

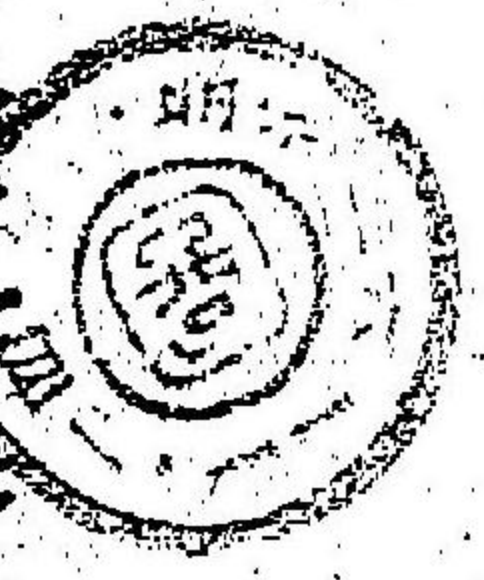
70
211



刑事訴訟法實用

樞密院顧問官副島伯爵題字
警視總監園田安賢君題字
前控訴院判事飯田宏作君序

前控訴院判事南館文一郎著



東京書肆 金刺氏發兌

心

也

副鳴種陸

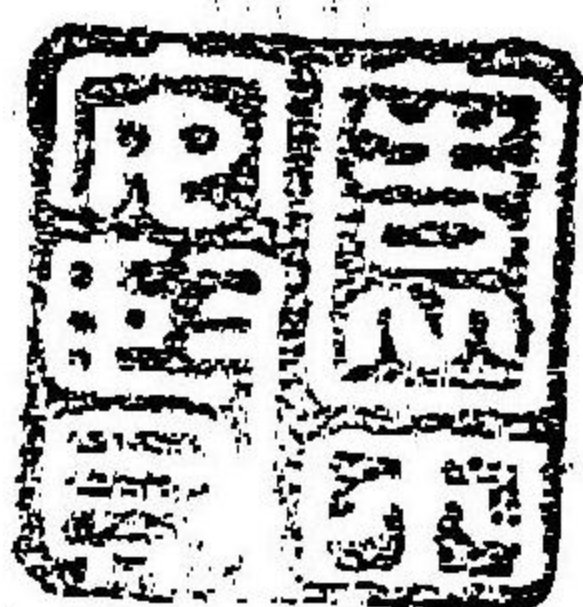


不
留

獄

明治廿六年十月

園田安賢



序

夫レ學各其科ヲ異ニスルモ其用アルニ至リテハ則チ一ナリ學ンテ
而シテ用フルコトヲ知ラス初メヨリ學ハサルニ若カサルナリ余曾
テ司法省法學校ニ在リ常ニ謂ラク刑事訴訟法民事訴訟法ハ聽訟ノ
方式行訴ノ手續ヲ規定スルニ過キス此等瑣末ノ事深ク講習スルニ
足ラスト後實務ヲ執ルニ及ヒ一訴件ニ接スル毎ニ之ニ應シテ處置
スルノ途ヲ知ラス俄カニ註釋書ヲ見レハ多クハ學理ヲ汎說シテ實
務上ノ困難ヲ援クニ足ルモノ甚ダ稀ナリ是ニ於テ乎始メテ前日ノ
誤見ヲ悟リ而シテ既ニ及ハス又訴訟法ノ註釋書ハ須ラク實務ニ適
切ナルベキヲ希ヒ而シテ未ダ得ル能ハス方今法學ヲ攻ムル者ノ多
キ余ト同一ノ誤見ヲ懷キ同一ノ困難ヲ感スル者ナシトセス余常ニ

此人ノ爲メニ同病相憐ノ情ナキ能ハス今夏郷友南館君其著ス所ノ
 刑事訴訟法實用ヲ携來リテ序ヲ徵セラル繙キテ之ヲ閱スルニ法文
 ナ解スル平易務メテ眞意ヲ明カニシ法理ヲ論スル簡明徒ヲニ高遠
 ニ驚ラス特ニ卷末數種ノ書式ヲ掲ケタルカ如キハ實務ニ從事スル
 者ノ便益ヲ圖ルコト極メテ親切ナリ誠ニ是レ實務家ノ指南車ニシ
 テ實用ノ名ニ反セスト謂フヘシ若シ此書ノ出ツル十年早カラハ余
 カ實務上ノ困難ヲ減スル幾多ナルコトヲ知ラス余早ク此種ノ書ヲ
 見ルコトヲ得サルノ不幸ヲ悲ムト同時ニ世人ハ此書ヲ得ルノ幸ヲ
 喜ハスンハアル可ラス乃ケ不文ヲ願ミス之ヲ書シテ以テ序ト爲ス

明治二十五年八月

思齋學人 飯田宏作

例言

- 一 刑事訴訟法公布以來之レニ關スル著書少シトセス然レモ概テ法
 理遠玄議論高尚以テ其實用ノ便ヲ欠クノ憾ナキ能ハス以是此書
 ハ勉メテ法理的ノ議論ヲ避ケ唯々實用ノ便ヲ主眼トス然レトモ
 本法中特ニ法理的解釋ヲ要スヘキ總則ノ部分ノ如キハ本著ノ主
 眼ニ反セサル限度ニ於テ極メテ簡明ナル解釋ヲ下シ又間々學者
 ノ說ヲ附言シ以テ疑團ヲ解クノ材料ニ供ス
- 一 此書大別シテ九編トナシ編中章ヲ設ケ章中節ヲ分テ節中更ニ款
 ナ置キ以テ閱覽ニ便ス而シテ法典ノ順序ニ從ヒ條文ヲ基礎トシ
 之レニ附記スルニ必要ノ諸規則ヲ以テシ特ニ其ノ公布ノ年月日
 號ヲ附セリ
- 一 刑事訴訟法ニ關スル一切ノ書式即チ諸令狀告訴狀其ノ他驗
 証臨驗等ノ書式ヲ掲載シ以テ實務ノ便ニ供ス
- 一 本著參考ノ用書ハ皆チ近世有名ノ著述ニシテ其ノ書且亦少シ

此人ノ爲メニ同病相憐ノ情ナキ能ハス今夏郷友南館君其著ス所ノ
 刑事訴訟法實用ヲ携來リテ序ヲ徵セラル繙キテ之ヲ閱スルニ法文
 ナ解スル平易務メテ眞意ヲ明カニシ法理ヲ論スル簡明徒ラニ高遠
 ニ驚ラス特ニ卷末數種ノ書式ヲ掲ケタルカ如キハ實務ニ從事スル
 者ノ便益ヲ圖ルコト極メテ親切ナリ誠ニ是レ實務家ノ指南車ニシ
 テ實用ノ名ニ反セスト謂フヘシ若シ此書ノ出ツル十年早カラハ余
 カ實務上ノ困難ヲ減スル幾多ナルコトヲ知ラス余早ク此種ノ書ヲ
 見ルコトヲ得サルノ不幸ヲ悲ムト同時ニ世人ヨリ此書ヲ得ルノ幸ヲ
 喜ハスシハアル可ラス乃チ不文ヲ顧ミス之ヲ書シテ以テ序ト爲ス

明治二十五年八月

思齋學人 飯田宏作

例言

- 一 刑事訴訟法公布以來之レニ關スル著書少シトセス然レモ概テ法
 理遠玄議論高尚以テ其實用ノ便チ欠クノ憾ナキ能ハス以是此書
 ハ勉メテ法理的ノ議論ヲ避ケ唯々實用ノ便チ主眼トス然レトモ
 本法中特ニ法理的解釋ヲ要スヘキ總則ノ部分ノ如キハ本著ノ主
 眼ニ反セサル限度ニ於テ極メテ簡明ナル解釋ヲ下シ又間々學者
 ノ說ヲ附言シ以テ疑團ヲ解クノ材料ニ供ス
- 一 此書大別シテ九編トナシ編中章ヲ設ケ章中節ヲ分チ節中更ニ款
 ナ置キ以テ閱覽ニ便ス而シテ法典ノ順序ニ從ヒ條文ヲ基礎トシ
 之レニ附記スルニ必要ノ諸規則ヲ以テシ特ニ其ノ公布ノ年月日
 號ヲ附セリ
- 一 刑事訴訟法ニ關スル一切ノ書式即チ諸令狀告訴告發狀其ノ他驗
 証臨驗等ノ書式ヲ掲載シ以テ實務ノ便ニ供ス
- 一 本著參考ノ用書ハ皆チ近世有名ノ著述ニシテ其ノ書且亦少シ

トセス特ニ學理的ニ關スル疑團ハ著者在學中ノ筆録ト講師ノ意見トヲ參酌シ又ハ其ノ實地ニ關スルモノハ當警官練習所在所中取調ヘタル事項ト其ノ教課書トヲ參酌シ且ツ當局者ノ意見ヲ叩キ以テ實用ノ便ヲ計ルニ怠ラサルモ本著着手以來未タ半週經サルニ此ニ上梓ヲ告ケタルノミナラス此間諸事頻激以テ此著ニ專心ナル能ハサルト著者ノ淺見寡聞トニ因テ或ハ時ニ脫漏誤謬ナキヲ保シ難シ此ノ點ニ對スル責任ノ輕ラサルハ著者ノ自ラ知ル所ニシテ將ニ異日ヲ期シテ謝スル所アラントス讀者幸ニ諒セヨ

明治壬辰八月

著者識

刑事訴訟法實用 目次

公訴權消滅ノ理由	十四	丁	私訴管轄裁判所	三十三	丁
公訴獨立ノ例外	全	丁	公訴ト私訴ト相異ナル要點	三十二	丁
公訴ノ獨立	十二	丁	私訴ト通常民事ノ損害賠償ノ訴ノ差異	三十一	丁
公訴ノ同一性	十一	丁	賠償義務ノ體様	三十	丁
檢事起訴ノ自由及ヒ例外	九	丁	第三者ノ訴訟參加	二十八	丁
公訴權ハ何人ニ屬スルカ	八	丁	被害者	全	丁
檢事公訴ヲ行フ理由	全	丁	私訴權ハ何人ニ屬スルヤ	二十六	丁
公訴ヲ行フヘキ人	七	丁	贓物	二十五	丁
公訴ノ目的	六	丁	私訴權ノ發生及其目的	二十四	丁
公訴權發生ノ時期	全	丁	私訴	二十三	丁
公訴及ヒ公訴權	五	丁	數人共犯ノ場合ニ於ケル確定判決ノ効力	二十	丁
公訴權消滅ノ理由	十四	丁	公訴ノ時効ト刑ノ時効ノ差異	二十二	丁
公訴權發生ノ時期	全	丁	私訴	二十三	丁
公訴ノ目的	六	丁	私訴權ノ發生及其目的	二十四	丁
公訴ヲ行フヘキ人	七	丁	贓物	二十五	丁
檢事公訴ヲ行フ理由	全	丁	私訴權ハ何人ニ屬スルヤ	二十六	丁
公訴權ハ何人ニ屬スルカ	八	丁	被害者	全	丁
檢事起訴ノ自由及ヒ例外	九	丁	第三者ノ訴訟參加	二十八	丁
公訴ノ同一性	十一	丁	賠償義務ノ體様	三十	丁
公訴ノ獨立	十二	丁	私訴ト通常民事ノ損害賠償ノ訴ノ差異	三十一	丁
公訴獨立ノ例外	全	丁	公訴ト私訴ト相異ナル要點	三十二	丁
公訴權消滅ノ理由	十四	丁	私訴管轄裁判所	三十三	丁

二

私訴ノ公訴ニ附帶スルヲ得 ヘキ時期	全	丁
私訴公訴ニ附帶ヲ許シタル 理由	三十四	丁
民事ト刑事トノ責任ノ特立 私訴權消滅ノ場合及ヒ其理 由	三十五	丁
私訴權ハ被告人ノ死去刑ノ 廢止及ヒ大赦ニ依リ消滅セ サル理由	三十六	丁
私訴時効ノ期間	三十七	丁
私訴時効ハ公訴時効ト 其期間ヲ同フスル理由	三十八	丁
時効ノ期間ハ犯罪ノ性質ニ 依リ起算點ヲ異ニスルヤ	三十九	丁
時効ヲ中斷スル條件及ヒ其 中斷スル理由	四十	丁
中斷後時効期間ノ起算方 時効ノ中斷無効トナル場合 及ヒ其例外	四十一	丁
被告人ハ免訴ノ言渡ヲ受ケ タルトキ告訴被告人又ハ民 事原告人ニ對シ反訴ノ損害 賠償一ヲ爲スコトヲ得ル場 合	四十二	丁

被告人無罪ノ判決ヲ受クル モ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得	四十三	丁
サル人及ヒ其理由 以上ノ官吏ト雖モ要償ノ訴 ヲ爲スコトヲ得ル場合	四十四	丁
期間ヲ計算スル方法	四十五	丁
距離ノ遠近ニ從ヒ猶豫ヲ與 フル割合	四十六	丁
訴訟關係人及ヒ管轄裁判所 地内ニ假住居ヲ定ムル理 由	四十七	丁
書類送達	四十八	丁
訴訟書類ノ公正ヲ維持スル 方式	四十九	丁
刑事訴訟法ノ効力ハ既往ニ及 ブコトヲ得ル理由	五十	丁
刑事訴訟法ノ及ブヘキ範圍	五十一	丁
裁判所部	五十二	丁
裁判所ノ管轄	五十三	丁
裁判管轄ノ區別	五十四	丁

三

公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管 轄ヲ移ス場合	五十一	丁
裁判所職員ヲ除斥シ又ハ忌 避回避スル場合及ヒ其理由	五十二	丁
犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審ノ 部	五十三	丁
捜査ノ目的	五十四	丁
捜査權ノ發動	五十五	丁
捜査權ト公訴權トノ關係	五十六	丁
司法警察ノ目的及ヒ其權限	五十七	丁
司法警察ノ職務ヲ執行スル 者ニ専務官ト兼務官ト補佐 官トノ區別	五十八	丁
特別司法警察官	五十九	丁
捜査着手ノ理由	六十	丁
司法警察ノ職務ヲ執ル者ノ 中公訴ノ提起實行ヲ爲シ得 ヘキモノト否ラサルモノト ノ區別	六十一	丁

司法警察ノ處分ヲ爲スコ當 リ公力士若クハ兵力ヲ要求 スルコトヲ得ル場合	六十二	丁
捜査着手ノ心得	六十三	丁
捜査着手後ノ心得	六十四	丁
被告事件交付上ノ心得	六十五	丁
巡査又ハ憲兵卒ハ司法警察 官ニ非ラスト稱スルヲ能ハ サルヤ	六十六	丁
告訴告發ノ解	六十七	丁
告訴スルコトヲ得ヘキ者	六十八	丁
告訴告發ヲ受ヘキ管轄官吏	六十九	丁
司法警察官告訴告發ヲ受ケ タルトキノ處分	七十	丁
告訴人ノ注意スヘキ條件	七十一	丁
告訴人ト民事原告人トノ關 係	七十二	丁
告訴人ト民事原告人トノ差異	七十三	丁

四

一 一人ノ責格ヲ以テ告訴告	七十三丁	告訴ノ爲メト盜難届ヲ爲ス	八十二丁
發シ爲ス方式	七十四丁	トノ差異	八十三丁
官吏公吏ノ責格ヲ以テ告發	七十五丁	告訴告發ヲ受ケタル管轄官	八十四丁
ヲ爲ス方式	七十六丁	吏ノ注意スヘキ要點	八十五丁
告訴告發ヲ受ケタル官吏ハ	七十七丁	現行犯ト非現行犯ノ區別及	八十八丁
之レヲ却下スルコト得ルヤ	七十八丁	許シタル理由	九十一丁
各人ノ告發ハ爲スヘキ義務	七十九丁	現行犯及ヒ准現行犯ノ場合	九十二丁
ニアラヌ	八十丁	現行犯人ノ逮捕	九十四丁
違警罪ニ付一己人ノ告發權	八十一丁	司法警察官被告人ヲ受取り	
告訴告發ハ代人ニ委任シテ		タル件ノ處置	
之レヲ爲スコトヲ得		起訴ノ解	
無能力者ノ告訴		豫審ヲ求ムヘキ犯罪	
法律上ノ代人及ヒ無能力者		豫審ノ解及ヒ其目的	
無能力者ハ私訴ヲ爲スコト		豫審ノ利益	
ヲ得サル理由		豫審手續ト公判手續ノ區別	
告訴ノ爲メニ付無能力者ト		令狀ノ解	
法律上ノ代理人ト其意見ヲ		令狀ノ種類	
異ニスル件			
告訴告發ノ取下及ヒ其申立			
ノ變更			
官吏公吏職務上ノ告發ト各			
己人ノ告發トノ差異			
告訴告發ノ差異			

五

令狀ノ効力	九十五丁	拘引狀拘留狀ヲ受ケタル被	全
令狀ノ性質	九十六丁	告人ヲ引致スヘキ場所	全
令狀ノ目的	九十七丁	令狀執行ニ關スル書類ハ何	全
召喚狀ヲ發セシメテ直チニ	九十八丁	人ニ之ヲ差出スヘキヤ	全
拘引狀ヲ發スルコトヲ得ル	九十九丁	密室監禁及ヒ其目的	全
場合及ヒ其理由	百丁	密室監禁ノ制限	全
令狀中容貌体格等ヲ記載シ	百一丁	證據	百二丁
テ發スルコトヲ得ルモノト否	百二丁	探証上刑事ト民事トノ差別	百三丁
ヲサルモノトノ區別	百三丁	及ヒ其理由	百四丁
令狀執行ノ方式	百四丁	刑事上ノ舉証ニ付注意スヘ	百五丁
令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡	百五丁	キ要點	百六丁
査憲兵卒被告人發見ノ爲メ	百六丁	民事上ノ證據ト刑事上ノ証	百七丁
家宅ヲ搜索爲スコトヲ得ヘキ	百八丁	據ノ差異	百九丁
場合其家宅搜索ヲ爲ス件ノ	百九丁	被告人ノ訊問	百十丁
制限	百十丁	對質	百十一丁
日出前日没後ニ家宅搜索ヲ	百十二丁	檢証	百十二丁
爲スコトヲ得ヘキ場合		檢証ヲ爲スヘキ場合及ヒ之	
巡査憲兵卒他管内ニ於テ令		ヲ爲ス理由	
狀執行スル方法		檢証調書ノ必要及ヒ其掲載	
現役ノ軍人軍屬ニ對シ令狀		スヘキ諸種ノ模様	
ヲ執行スル手續			

六 搜索

差押フヘキ物件及ヒ其處置	百十五丁
臨檢搜索物件差押ニ付其日	百十七丁
ニ終ラサルキ處分	全丁
差押物件ヲ被告人ニ示シテ	百十八丁
辨解ヲ爲サシムル理由	全丁
臨檢搜索及ヒ物件差押ノ處	全丁
分中現場ノ取締	百十九丁
檢証搜索物件差押ノ委囑	全丁
官署諸會社ノ取扱ニ係ル物	全丁
件及ヒ信書ヲ差押ヘ開披スル手續	全丁
物件差押及ヒ信書ヲ開披スルヲ能ハサル場合	百廿丁
証人鑑定人	全丁
証人鑑定人呼出狀ノ程式	百廿一丁
証人呼出ニ應セサルモ其制裁ナキ場合	全丁
現役ノ軍人軍屬ヲ証人トシテ呼出狀ヲ發スル手續	百廿二丁

証人鑑定人故ナク呼出ニ應セサルモ、制裁	全丁
証人鑑定人ニ科シタル罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消スヘキ場合及ヒ其理由	百廿三丁
証人鑑定人ノ氏名年齢職業ヲ確ムル理由	百廿四丁
宣誓及ヒ宣誓ヲ爲ス方式	全丁
法律上証人トナル能力ナキ者及ヒ其理由	百廿五丁
性質上証人トナル能力ナキ者及ヒ其理由	百廿六丁
証言ヲ拒絶スルヲ得ル場合及ヒ其理由	百廿八丁
官署又ハ供述ニ肯セサル片ノ制裁	百卅丁
証人訊問ノ手續	百卅一丁
証人訊問ノ場所	全丁
証人ノ所在又ハ所在地ニ於テ訊問スヘキ場合及ヒ其理由	百三十二丁
鑑定ヲ命スヘキ場合及ヒ其命スヘキ事項	百三十三丁

七

死体ノ解剖又ハ檢視ノ爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スル場合	全丁
鑑定書ノ製作及ヒ記載スヘキ事項	百三十四丁
現行犯ノ豫審	百三十五丁
豫審判事ハ檢事ノ請求ヲ俟テ豫審ニ着手スルヲ得ル場合	全丁
豫審判事自ラ訴テ受理スル場合	百三十七丁
現行犯罪ノ豫審手續繼續ニ付檢事ノ異議ニ對スル處分	百三十八丁
地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事カ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得ル	全丁
司法警察官假リニ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得ヘキ場合	百四十一丁
保釋資付ノ解	百四十二丁
保釋ノ要スヘキ條件	百四十三丁
保証ヲ立テシムル方法及ヒ保証金額	百四十四丁

保証金ノ沒收	全丁
保釋ノ言渡ヲ取消スヘキ場合	百四十五丁
保証金還付スヘキ場合	全丁
責附ヲ爲ス場合及ヒ責付ヲ爲スニ付必要ナル條件	百四十六丁
豫審終結ヲ爲スヘキ場合及ヒ豫審終結ニ付テノ手續	百四十七丁
豫審終結ノ決定ヲ爲ス場合	全丁
豫審終結ノ決定書ニ記入スヘキ要件	百五十一丁
豫審終結ニ對シテ抗告ヲ爲フ場合	百五十二丁
豫審免訴言渡ノ効力	百五十三丁
公判部	百五十五丁
公判及ヒ公判公行スル理由	全丁
公判開廷ノ要素	百五十六丁
公廷ニ於ケル被告人身体自由ノ制限	百五十八丁

八 公訴ノ受理

公訴ノ受理	全	丁
辯護人ノ選任	百五十九丁	
辯護權	百六十丁	
辯護人ノ權利及ヒ義務	百六十二丁	
補佐人	百六十三丁	
辯護權ノ拋棄及ヒ制限	百六十四丁	
開廷ノ取締	百六十五丁	
辨論停止	百六十六丁	
不告不理ノ原則	百六十八丁	
附帯犯	百六十九丁	
管轄違及ヒ公訴受理スヘカ ラサル申立	百七十一丁	
管轄違及ヒ公訴受理スヘカ ラサル申立ヲ爲シ得ヘキ人	百七十二丁	
管轄違及ヒ公訴受理スヘカ ラサル申立ヲ爲ス時期	全	丁

裁判所ニ於テノ申立書ヲ却下シタル時 百七十三丁

調書ヲ作リタル司法警察官
ヲ証人トシテ呼ヒ出スヘキ
場合 全 丁

司法警察官ト常人トノ証人
ノ差異 百七十四丁

証人ノ氏名目錄ヲ相手方ニ
送達スル理由 百七十五丁

公廷ニ於ケル証人 全 丁

証人及ヒ被告人訊問 全 丁

証人鑑定人ノ不實ノ供述ヲ
爲シタル時 百七十六丁

公判手續ニ付キ異議ノ申立
アリタル場合 百七十八丁

判決決定命令裁判ノ區別 全 丁

判決ノ種類 百七十九丁

私訴ノ判決ヲ爲スヘキ時期 百八十三丁

差押物還付

差押物還付	百八十四丁	
判決書ニ記載スヘキ要件	全	丁
判決ノ言渡ヲ爲スヘキ時日 及ヒ其方法	百八十五丁	
判決ノ正本謄本又ハ抄本ノ 下付スル場合	百八十六丁	
公判始末書ノ性質及ヒ記載 スヘキ事項并ニ其整頓法	全	丁
調書ト公判始末書トノ差別	百八十八丁	
區裁判所公判	全	丁
區裁判所ノ裁判權限	全	丁
公訴ヲ受理ノ理由	百八十九丁	
判決言渡ノ種類	百九十丁	
欠席判決ヲ爲ス理由	百九十二丁	
欠席判決ノ種類	百九十三丁	
地方裁判所公判	百九十四丁	

地方裁判所ノ權限 全 丁

公訴ヲ受理スル理由 百九十五丁

區裁判所ノ管轄ニ屬スルモ
ノト認メタル所ノ處置 全 丁

故障ノ解及ヒ之ヲ爲スコトヲ
得ル人 百九十六丁

故障申立ノ期間及ヒ其起算
方 全 丁

故障ノ申立ヲ受理スルニ必
要ナル條件 百九十七丁

上訴ノ部 百九十九丁

上訴ノ種類 百九十九丁

上訴ヲ爲シ得ヘキ人 二百丁

上訴申立ノ手續 二百一丁

上訴取下 同 丁

上訴期間ヲ經過スルモ回復
スル場合 二百二丁

期間停止ト回復トノ差異 二百三丁

控訴解	二百四丁	控訴ノ欠席判決	二百十三丁
控訴ヲ爲シ得ヘキ事件及ヒ其範圍	同丁	上告ノ解	二百十四丁
控訴ノ時期	二百五丁	上告ニ要スヘキ條件	二百十五丁
欠席判決ニ對スル控訴	二百五丁	上告ノ種類	全丁
控訴ヲ爲ス手續	二百六丁	上告ノ原因	全丁
期間經過後ニ爲シタル控訴申立	全丁	上告ノ理由ト爲ストテ得ザル例外ノ場合	二百廿丁
附帶控訴	全丁	上告ノ期間及ヒ其効力	全丁
附帶控訴ヲ爲シ得ヘキ者及ヒ其期間并ニ手續	二百七丁	上告書ノ種類	二百廿一丁
附帶控訴ト主控訴ノ關係	二百八丁	附帶上告	二百廿二丁
主控訴ト附帶控訴トノ差別	二百九丁	上告裁判ノ手續	二百二十三丁
控訴判決ノ種別	全丁	上告判決ノ種別	全丁
控訴ヲ受ケタル地方裁判所ニ於テ其事件ニ付キ第一審ノ裁判ヲ爲ス場合	二百十一丁	上告裁判ニ於テ直ニ判決ヲ下ヘキ場合	二百廿五丁
被告人ノ控訴ニ於ケル判決ノ制限	二百十二丁	破毀ノ範圍	二百廿六丁

破毀ノ効力	二百廿七丁	再審ノ訴ヲ爲シ得ル場合	二百三十六丁
抗告ノ解	二百廿八丁	再審ノ訴ヲ爲ストテ得ヘキ人	二百三十七丁
控訴ト抗告ノ差別	同丁	再審ノ訴ヲ爲ス手續	同丁
抗告ヲ爲スヘキ場合	二百廿九丁	再審ノ判決	二百三十八丁
抗告申立ノ手續	二百三十丁	判決揭示ノ手續	二百三十九丁
抗告ヲ裁判スル方法	二百三十一丁	大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續ノ部	二百四十丁
抗告ノ効力	二百三十二丁	大審院ノ特別權限	同丁
非常上告解	二百三十二丁	特別ノ訴訟手續	同丁
非常上告ヲ爲シ得ヘキ者	二百三十三丁	裁判執行復權及ヒ特赦ノ部	二百四十二丁
通常上告非常上告ノ差別	二百三十四丁	刑ノ執行	同丁
再審ノ解	二百三十五丁	刑ノ再渡及ヒ執行ニ付テノ異議申立	二百四十三丁
再審ニ要スヘキ條件	同丁	復權及ヒ復權ヲ得ルニ必要ナル條件	同丁
再審ノ訴ト非常上告ノ差別	同丁	復權願ヲ爲ス手續	二百四十四丁

二十

特赦ノ解及ヒ其手續	全	丁
復權願ト特赦ノ申立トノ差別	二百四十五丁	
違警罪即決例ノ部	二百四十七丁	
即決裁判	全	丁
即決言渡ノ手續	全	丁
即決裁判執行處分スル手續	二百四十八丁	
正式ノ裁判ヲ求ムル手續	二百四十九丁	
重罪控訴豫納金規則	二百五十丁	
輕罪ニ係ル控訴豫納金規則	二百五十一丁	
輕罪ニ係ル控訴豫納金規則中改正削除	同	丁
違警罪即決例	二百五十三丁	
違警罪處分手續告訴告發	二百五十五丁	
訴訟法中辨護士事務ノ件	二百五十六丁	
召喚狀	二百五十七丁	
勾引狀	二百五十九丁	
勾留狀	二百六十一丁	
呼出狀	二百六十三丁	
逮捕狀	二百六十五丁	
告訴狀詐欺取財例被告人判明ナル場合	三百六十七丁	
委任狀	二百六十九丁	
告訴狀(竊盜例被告人判明ナラサル場合)	二百七十丁	
口頭告訴調書式	二百七十一丁	
口頭告訴調書(家宅侵入脅迫ノ例)	同	丁
口頭告訴調書(強盜犯ノ例)	二百七十四丁	

書式ノ部

三十

口頭告訴調書(竊盜例)	二百七十六丁	
現行犯人ヲ逮捕シタルトキ告發書	二百七十七丁	
逮捕告發調書(強盜例)	二百七十八丁	
告發狀(違警罪ノ例)	二百八十一丁	
告發狀(條例違犯ノ例)	二百八十二丁	
現行犯人引致手續書(殺人罪)	二百八十三丁	
始末書(犯人捕獲)	二百八十五丁	
探偵復命書	二百八十六丁	
檢證調書式(強盜例)	二百八十九丁	
檢證調書(現行犯ノ殺人罪ノ例)	二百九十三丁	
檢證調書(毆打例)	二百九十七丁	
檢證調書(竊盜例)	三百丁	
家宅搜索調書	三百一丁	
臨檢調書	三百三丁	
(出火檢視)調書	三百四丁	
(放火檢視)調書	三百七丁	
贓物押収調書	三百九丁	
告訴取下届(姦通例)	三百十丁	
告訴ノ變更申立書	三百十二丁	
訊問調書(家宅侵入及脅迫罪ノ例)	三百十四丁	
其二(竊盜例)	三百廿三丁	
宣誓書	三百廿三丁	
訊問調書現行犯殺人罪	三百廿三丁	
送致書	三百三十丁	
意見書(竊盜例)	三百三十三丁	
不參届書	三百三十四丁	
罰金言渡取消ヲ求ムル申立書	三百三十五丁	
證人旅費日當請求書	三百三十六丁	

四十

假住所届	三百三十八丁	代人御届(罰金例)	三百五十一丁
鑑定書	同	公判開廷猶豫願	三百五十二丁
接見願	三百四十丁	証人呼出請求書	三百五十三丁
差入物願	三百四十一丁	故障申立書	三百五十五丁
拇印願	三百四十二丁	故障期間回復申立書	三百五十七丁
保釋願	三百四十三丁	正式裁判請求申立書	三百五十九丁
同受書式	三百四十四丁	控訴申立書	三百六十丁
保證金下付受書	三百四十五丁	保證金請求書	三百六十二丁
責付御請書	三百四十六丁	重罪控訴保証金免除請求書	三百六十二丁
辨護届書(辨護士ノ場合)	三百四十七丁	市町村長ノ証明書式例	三百六十三丁
辨護人撰定願(代言人ニ非サル場合)	三百四十八丁	証明書	全
訴訟書類謄寫願	三百四十九丁	上告申立書	三百六十五丁
補佐人届書(法律上代理人ノ場合)	三百五十丁	上告趣意書	三百六十六丁

五十

上告答辨書	三百六十七丁
附帶控訴上告申立書(但シ被告人ヨリ差出スヘキモノ)	三百六十九丁
抗告申立書	全
控訴取下届	三百七十二丁
再審趣意書	三百七十三丁
刑ノ執行ニ付異議申立書	三百七十四丁
復権願	三百七十五丁
豫審終結言渡書	三百七十六丁
裁判言渡書(第一審)	三百七十七丁
同(第二審)	三百八十丁

緒言



夫レ法ハ大別シテ公法私法ノ二トス公法中又二種アリテ一ナ外事
トイフ外事ノ公法トイフ外事ノ公法トハ國家ト國家ト
ノ關係ヲ規定シタルモノニシテ一ニ之レナ國際公法又ハ萬國公法
トイフ内事ノ公法トハ國家ト人民トノ關係ヲ規定シタルモノニシ
テ憲法刑法刑事訴訟法裁判所構成法行政法之レナリ
私法モ亦二種アリテ一ナ外事ノ私法トイヒ一ナ内事ノ私法トイフ
外事ノ私法トハ我國人民ト外國人民トノ關係ヲ規定シタルモノニ
シテ一ニ之ヲ國際私法又萬國私法ト云フ内事ノ私法トハ我國人民
ト人民トノ關係ヲ規定シタルモノニシテ民法民事訴訟法商法之レ
ナリ

二
此諸種ノ法律ハ何レモ國家ニ必要ニシテ苟シモ欠ク可ラサルモノ
ナリ而シテ公法中刑法ナルモノハ社會ノ治安ヲ保維スル要具ニシ
テ最も重要ノモノナリトス然レモ刑法ハ決シテ獨立獨行スルモノ
ニアラス必スヤ之ヲ運用スル機關ナキ能ハス而シテ其運用ヲ全フ
シ以テ國家ノ刑罰權ヲ實行スル機關ハ即チ刑事訴訟法是ナリ故ニ
刑事訴訟法ニシテ其ノ制定ノ完全ナラザランカ所謂金筆玉條ノ刑
法ト雖モ以テ其効用ヲ見ル能ハス假令ハ船舶ノ舳艫ニ於ケルカ如
シ蓋シ船舶ノ舳艫ヲ欠クハ只タ其運用ノ自由ヲ欠クニ止ムヲ得ヘ
シト雖モ刑事訴訟法ニシテ其ノ制定不完全ナランカ無辜獄ニ泣テ
惡奸外ニ嗤ヒ裁判爲メニ信憑ヲ失シテ法律爲メニ威嚴ヲ殺ク其害
豈ニ啻タ船舶ノ舳艫ニ於ケルノ此ノミナラン哉是ヲ以テ刑法ト刑

事訴訟法トハ二者相待テ而シテ后其効用始メテ見ルヘキノミ
刑事訴訟法ノ必要其レ此ノ如シ且ツ刑事訴訟法ハ國家刑罰權實行
ノ方法ヲ規定スルモノニシテ其最も重要ナルモノヲ起訴豫審公判
トス夫ノ裁判執行ニ關スル規定ノ如キハ元來本法ニ規定スルモノ
ニ非ラスト雖モ我刑事訴訟法ノ之ヲ第八編ニ規定シタルハ蓋シ便
宜ニ出ルモノナラン

三
我刑事訴訟法ハ通編三百三十四條ヲ以テ完結シ之ヲ大別シテ八編
トス即チ第一編ハ總則ヲ掲ケテ刑事訴訟法ノ一般ニ關スル重要ノ
事ヲ定メ第二編ハ裁判所ノ管轄及ヒ之レヲ行フ職員ノ除斥及忌避
回避スルユトヲ定メ第三編ハ犯罪ノ搜查起訴及豫審ノ規則ヲ掲ケ
テ犯罪事實ノ審究スルユトヲ示シ以テ其公判トノ區別ヲ定メ第四

四
編ハ公判ノ手續ヲ定メ且ツ法律ヲ適用シ裁判ヲ言渡ス規則ヲ載セ
第五編ハ上訴ヲ爲ス規定ヲ掲ケ第六編ハ再審ノ訴第七編ハ大審院
ノ特別權限ニ關スル訴訟手續ヲ掲ケ第八編ハ裁判執行復權特赦ノ
事ヲ掲ケテ以テ本法ノ終結トス
余亦タ法定ノ順序ニ從ヒ更ニ違警罪即決例ヲ加ヒ以テ九編トナシ
蓋シ即決例ナルモノハ訴訟法ノ範圍外ナルモノナレモ亦違警罪ヲ
斷スルノ手續ナレハ之レヲ此ニ掲ケ讀者ノ便ニ供ス而シテ編ヲ別
テ章トナシ章中又々節ヲ設ケ以テ閱覽ノ便ヲ計ル即チ本書ヲ別テ
九編十三章二百二十四節トナス

刑事訴訟法實用

控訴院判事
法律學士

春日 肅君 校閱
南館文一郎 著

第一編 總則

第一章 公訴

第一節 公訴及公訴權

凡ソ一犯罪アルキハ常ニ二ケノ訴訟ヲ惹起ス而シテ其訴訟ノ公ニ屬スルモノト私ニ屬ス
ルモノトアリテ其私ニ屬スルモノトハ即チ一己人ニ關スルモノニシテ私訴是ナリ公ニ
屬スルモノトハ國家公益ニ關スルモノニシテ國家カ此損害ヲ被リタルキニ其代理人ヲ
ル檢事ヲシテ國家ノ名義ヲ以テ犯罪者ニ對シテ刑罰ヲ求ムル爲メニ之レヲ司法裁判所
ニ訴ヘシム此訴ヲ稱シテ公訴ト云フ蓋シ公訴ト稱スル所以ノモノハ夫ノ一己人ニ關ス
ル私訴ノ對稱ナリ而シテ公訴權トハ國家カ國家ノ刑罰權ニ基キ此訴ヲナス權利ヲ云フ

第二節 公訴權發生ノ時期

五
夫ノ法律無クシテ犯罪ナシトシテ格言ト全ク犯罪無クシテ公訴ナシ故ニ犯罪ハ公訴ノ
原由ニシテ公訴ハ犯罪ノ結果ナリ故ニ苟モ一犯罪アルキハ必ズ茲ニ公訴權ヲ發生ス是

六レテ以テ公訴權ハ犯罪ニ先チ又ハ犯罪ニ後レテ發生スルモノニアラスシテ常ニ犯罪ト同時ニ發生スルモノトス但タ或ル事由(親告罪又ハ未タ犯罪アルヲ發見セサル等)ニ依テ一時實行セサルノミ

第三節 公訴ノ目的

公訴ノ目的ニ付テハ學者ノ論スル處一ナラス或說ニ曰ク犯罪ノ証明ト刑ノ適用ノ二個アリテ決シテ其効用ヲ同スルモノニアラス故ニ公訴ノ目的ハ單ニ犯罪ヲ証明スルコトアリ(數罪俱發ノ其輕キ若クハ均シキモノハ論セサル場合ノ如キ)又單ニ刑ヲ適用スルニアルコトアリト又或說ニ曰ク凡ソ刑ヲ適用スルニハ必ラスヤ其犯罪ヲ証明セサルヘカラス是レテ以テ其犯罪ヲ証明スルハ刑ヲ適用スル手段テレハ公訴ノ目的ハ唯タ刑ヲ適用スル一ニアリテ犯罪ヲ証明スルハ只タ其手段ニ過キズト之レヲ要スルニ第一說ハ犯罪ノ証明ト刑ノ適用トノ二個ヲ以テ公訴ノ目的トス第二說ハ單ニ刑ノ適用ノ一ナリトス蓋シ二說ノ是非得失ヲ詳論セント欲スルハ茲ニ數多ノ紙數ヲ要ス果シテ然ルハ本著ノ主意ニ反スルヲ以テ之レヲ茲ニ贅セズ且ツ著者ノ淺學寡聞ヨリ以テ之ヲ異議スルニ由ナキヲ以テ其斷定モ亦タ茲ニ贅セズト雖モ近來學者ノ說ク處ヲ見ルニ議論漸々一定スルニ似タリ即チ第一說ヲ以テ可トスルモノ、如シテ此問題タル其ノ干係スル處淺少ニ非ラサレハ讀者願クハ他ノ良書ヲ參酌シ決シテ本法ノ精神ヲ誤ル勿レ第一說ヲ陳スル學者ト雖モ學理上一刀兩斷ノ裁決ヲ下スルハ固ヨリ第二說ヲ以テ不當

トセサルヘト雖モ是レヲ以テ直ニ日本法典ノ精神ヲ得タルモノトナサ、ルモノ、如

第四節 公訴ヲ行フヘキ人

凡ソ一ノ犯罪アレハ國家ハ多少ノ損害ヲ被ムルモノタルコトハ已ニ述フル處ニヨリテ明ナリ而シテ國家ハ固ト法人ナレハ實際自ラ公訴ヲ行フ能ハス故ニ刑罰ノ權利ヲ實行セントスルハ必スヤ國家ニ代リテ之レヲ行フモノナカルヘカラス之レヲ行フモノハ何人ナルカ往時ニアリテハ或ハ此權ヲ以テ一己人ニ委シ或ハ以テ僧侶ニ委シタルモ後世遂ニ一ケノ官吏ニ委任スルニ到レリ檢事即チ是ナリ

第五節 檢事公訴ヲ行フ理由

何故ニ檢事ニ委スルニ公訴ヲ行フヲ以テシタルヤ曰ク社會即チ國家ハ已ニ述ベタルカ如ク一無形人ナレハ自ラ之レヲ行フヲ得ス故ニ檢事ニ委スルニ公訴ヲ行フヲ以テシタルハ則チ他ノ法人ノ場合ニ於ケルト異ナルナシ且ツ又タ昔日ノ如ク猥リニ人民ヲシテ公訴ヲ行ハシムルハ種々ノ弊害ヲ生スヘク或ハ輕忽ニシテ爲スヘカラス公訴ヲ爲スモノアリ或ハ怠慢ニシテ爲スヘキ公訴ヲ爲サ、ルモノアリ或ハ復讐ノタメニスルモノアリ或ハ畏怖ノタメニスルモノアリ或ハ子トシテ其父ヲ訴ヒ或ハ父トシテ其子ヲ訴ヒタメニ仁愛ヲ破リ風儀ヲ害スルニ到ルモノアリ此弊害ヤ却リテ社會ノ安寧ヲ害シ國家ノ秩序ヲ亂スニ到レリ是ヲ以テ公平正直ナル人ヲ撰ミ其職ニ任シ之レヲ以テ公訴

ナ行ハシメザルヘカラス又タ裁判官ヲシテ檢事ヲ兼務セシメサルハ訴訟人ニシテ自ラ其裁判ヲ爲スノ結果ヲ見ルニ到ルヲ以テナリ是レヲ以テ公訴ヲ行フノ權ヲ檢事ニ一委シ以テ裁判官ト訴訟人トノ區別ヲ明確ニシタル所以ナリ以上ハ檢事公訴ヲ行フノ理由ナリトス

而シテ第一條ニ檢事之レヲ行フトハ何等ノコトヲ意味スルヤ曰ク之レヲ了解セント欲セハ宣シ公訴ノ提起ト公訴ノ實行トヲ區別セサルヘカラス
抑モ公訴ノ提起トハ裁判官ヲシテ公訴ヲ受理セシムル最初ノ手續ヲ云フ仮令ハ第六十二條第一第二ノ場合ハ檢事カ公訴ヲ提起シタルモノニシテ第四百四十三條ハ豫審判事カ公訴ヲ提起シタルモノナリ而シテ公訴ノ實行トハ公訴ノ目的ヲ達スルカ爲メニ爲ス總テノ手續ニシテ夫ノ公訴提起ノ材料即チ司法警察ノ處分等ト異ニシテ仮令ハ公判廷ニ於テ刑ノ適用ヲ求ムルカ如キ又ハ豫審ノ決定又ハ裁判所ノ言渡ニ對シテ上訴スルカ如キ之レナリ然リ而シテ之レヲ行フトハ其公訴ヲ提起スル手續ヨリ其之レヲ實行スルマテノ總テノ手續ヲ爲スヘキ事ヲ意味シタルモノナリ

第六節 公訴權ハ何人ニ屬スルカ

公訴權ハ檢事之レヲ實行スルモノナレバ所有スルモノニアラス則チ公訴權ハ固ト國家ノ有ニ屬スルモノニシテ國家ハ唯タ之レカ實行ヲ檢事ニ委任シタルノミ故ニ檢事ハ其結果トシテ左ノ各頂ヲ犯スコトヲ得ス

(イ) 檢事ハ起訴ノ前後ヲ問ハス犯罪事件ニ付キ和解スルコトヲ得ス

(ロ) 檢事ハ公訴權ヲ他人ニ讓渡スコトヲ得ス

(ハ) 檢事ハ公訴權ヲ拋棄シ又ハ停止スルコトヲ得ス

(ニ) 檢事ハ明暗ニ抱ラス豫メ上訴權ヲ拋棄スルコトヲ得ス

第七節 檢事起訴ノ自由及ヒ例外

檢事ハ前陳ノ如ク犯罪事件ニ付テハ和解ヲ爲スコトヲ得ス又公訴權ヲ讓渡シ若クハ拋棄スルコトヲ得スト雖モ公訴ヲ起スト否トハ一ニ檢事ノ意見ニ在リ之レヲ檢事起訴ノ自由ト云フ(本法第六十四條)即チ換言セハ檢事ハ起訴スルト否トチ自ラ判斷スルノ權アルモノニシテ縱令告訴告發ニ依テ犯罪ノ申告ヲ受ルモ其事實ニシテ無罪又ハ法律ノ關スル所ニ非ズト思料シタルキハ之レカ起訴ヲナサ、モ差支ナシ之レニ反シ其事實ノ罪トナルヘント思料シタルキハ何人ノ抑制ヲ受クルコトヲ自ラ起テ之レカ起訴ヲナスモノナリ是レ公訴ハ檢事之レヲ行フトノ結果ニシテ其權ヲ行フト否トハ一ニ國家ノ代人タル檢事ノ意見ニ任セサルヲ得サルナリ之レヲ檢事起訴ノ自由ト云フ

己ニ述ヘシ如ク公訴ハ之レヲ提起スルト否トハ一ニ檢事ノ意ニ存スルモノナリト雖モ其例外即チ起訴セサルヲ得サル場合アリ即チ左ニ

(イ) 上官ノ命令アルキ檢事ハ一方ニ於テハ行政官ナレハ自己ノ上級ニ位置スル長官即チ(司法大臣檢事總長檢事長檢事正)ノ如キ監督ヲ受クル者ヨリ起訴スヘキノ命

合アリタル場合ノ如キハ例外ナリトス故ニ此場合ニ於テハ檢事ハ長官ノ意見ニ從ヒ必ラス起訴セサルヘカラス然レモ公訴實行中自己ノ意見ヲ陳述スルニ當リテハ決シテ長官ノ意見ニ拘束セラルヘキトスニアラス仮令ハ被告事件罪トナラサルモノト思料スルキハ縱令ヒ長官ノ命令ニ反スルモ被告人ノ利益トナル陳述ヲ爲スヲ得ヘシ之レ檢事ハ公益ヲ保護スルノ任アレハナリ(構成法第八十二條)

(ロ) 又豫審判事カ檢事ヨリ先キニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テ檢証調書ヲ作りタルトキハ公訴ヲ受理シタル者ナレハ此場合ニ於テモ亦檢事起訴ノ自由ノ例外ナリ故ニ檢事ノ意見ニ反シタリト雖モ檢事ハ公訴ノ實行ヲ爲サルヲ得サルコトアルヘシ但其事件ニ付キ自己ノ意見ヲ以テ無罪ヲ主張スルハ格別ナリトス(本法第四百十三條)

又タ以上ノ問題ニ一步ヲ進メ檢事公訴權ヲ執行スルニ於テ自由ナル例外トナスキハ其範圍曠漠ニシテ數多ノ例外アリ即チ永久ニ行フヲ得サル場合ト一時行フヲ得サル場合トノ二ケアリ

- (イ) 天皇及外國皇帝使節ニ對スルキ
- (ロ) 外國ニ於ケル犯罪ニシテ日本刑法ニ明文ナキモノ
- (ハ) 帝國議會議員ノ犯罪但シ開會中國事犯及現行犯ヲ除ク
- (ニ) 有位爵又ハ或官吏(各大臣)(十五年丙第十七號)

- (ホ) 親告罪
- (ヘ) 犯人外國ニアルキ
- (ト) 豫斷問題ニ關シタルキ

以上ノ場合モ檢事ハ直ニ職權ヲ以テ之レカ處分ヲナスヘカラスサルモノニシテ單ニ其ノ實行ヲ停止スルモノニシテ以上ハ絕對的ニ行フヲ得サル場合ナリトス

第八節 檢事ノ全一

檢事ハ同一體ナリトハ國家ノ代理者ナリトノコトヨリ生シ來ル結果ニシテ單ニ有形的ヨリ之レヲ觀察スルキハ甚タ奇怪ニ耐ヘサルナリ何者幾百ノ異ナル人ヲ以テ一體ナリト云フコト無クシハナリ況ンヤ下級裁判所檢事ト上級裁判所檢事ト其意見ヲ異ニスル等ノモノアルチヤ故ニ檢事ハ一體ナリトハ無形的即チ主觀的ヨリ觀察シテ下シタルモノナレハ上下其意見ヲ異ニスルハ恰モ一己人カ自己ノ意見ヲ變スルト同一ナリ又タ檢事ハ一體ナリトノ原則ヨリシテ左ノ結果ヲ生ス

- (イ) 檢事ハ繼續シタル事件ヲ取調フルコトヲ得即チ某事件ノ中途ヨリ取調ヲ爲スヲ得レトモ裁判官ハ反之其事件ヲ中途ヨリ取調フルコトヲ得ズシテ始終其人ノ全一ナルヲ要ス
- (ロ) 檢事ハ相互ニ代理ヲ爲ス去レトモ社會ノ頻繁ナルヨリ便宜ヲ計ル爲ニ其職務ヲ行フノ範圍ヲ規定ス之レ上級下級ノ區別アル所以ナリ然レモ敢テ一體不可分ノ原

則ニ對スル例外ヲ示シタルニ非ラサルナリ
以上ノ如ク檢事ハ同一体ナリト雖モ或學者ハ此原則ハ絶對的ノモノニアラスト云ヒ又
ハ殆ント此原則ヲ認メサルモノアリト雖モ是レ等ハ專ラ學理上ニ屬スル問題ナレハ茲
ニ贅セズ

第九節 公訴ノ獨立

第三條ニ曰ク「公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニアラス又告訴告發ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニアラスト」是レ即チ公訴獨立ノ原則ヲ揭示シタルモノナリ前既ニ述ヘシ如ク公訴ハ社會公益ノヲメ檢事之レヲ行フモノニシテ一人ノ利害ニ抱ハルヘキモノニアラス(親告罪ハ例外)故ニ被害者ノ告訴ナシト雖モ風評告發其他相當官吏ノ調書等ニ依リ苟モ犯罪アルヲ認知シタルトキハ則チ直チニ公訴ヲ起スコトヲ得是レ第三條ニ公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニアラス云々トアル所以ナリ又タ已ニ一旦公訴ノ起リタル以上ハ被害者ニ於テ告訴ノ拋棄ヲ爲スト雖モ之レカタメ公訴權ハ何等ノ影響ヲ受クルモノニアラス之レヲ公訴ノ獨立ト云フ (本法第三條)

第十節 公訴獨立ノ例外

公訴ハ獨立ヲ以テ原則ナリトスルモ又其例外アリ第三條但書ニ曰ク法律ニ於テ殊ニ定メタル場合ハ此限りニアラスト是レ其原則ノ例外ヲ規定シタルモノニシテ此但書即チ例外ノ場合ニ於テハ被害者ノ告訴アルニアラザレハ公訴ヲ起スヲ得ス而シテ被害者ノ

告訴ヲ待テ其罪ヲ論スル場合ハ之レヲ大別シテ二トスルヲ得ヘシ曰ク刑法上ニ於ケル例外曰ク特別法ニ於ケル例外之レナリ

第一 刑法上ニ於ケル例外ノ場合ハ左ノ如シ

- (イ) 幼者ヲ略取誘拐スル罪 但幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付シタル場合格別(刑三四二以下)
- (ロ) 猥褻姦淫ノ罪 但幼者ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合スル罪及猥褻姦淫ニ因テ人ヲ死傷ニ至ラシメタルモノハ格別(刑三四六以下)
- (ハ) 有夫姦ノ罪 (刑三五三)
- (ニ) 脅迫ノ罪 (刑三二二六以下)
- (ホ) 誹毀ノ罪 (刑三六一)
- (ヘ) 公然人ヲ罵詈嘲弄スル罪 (刑四六二、十二項)
- (ト) 牛馬外ノ家畜ヲ殺スル罪 (刑四二三)

第二 特別法ニ於ケル例外ノ場合左ノ如シ

- (イ) 新聞紙ニ登載シタル事項ノ錯誤ニ付正誤ノ要求ニ應セサル罪 (明治廿五年十二月勅令第七十五號新聞紙條例第廿八條 第三十四條參照)
- (ロ) 他人ノ版權ヲ侵スル罪 (明治廿五年勅令第七十七號版權條例第一條第三十七條)
- (ハ) 他人ノ寫真版權ヲ侵スル罪 (同上第七十九號寫真版權條例第一條第三十七條)
- (ニ) 他人ノ特許權ヲ侵スル罪 (明治廿一年勅令第八十四號特許條例第一條第三十六條第三十九條)
- (ホ) 他人ノ意匠ヲ侵スル罪 (同上第八十五號意匠條例第一條第二十三條第二十五條)

(ハ) 他人ノ商標ヲ侵ス罪(同上第八十六號商標條例第一條第廿三條第廿五條)
 (ト) 法律ヲ以テ組織シタル議會并ニ其議員ヲ公然誹毀侮辱シ又ハ脅迫恐喝シタル罪(明治廿二年十一月法律第廿八號)

以上ノ第一及第二各項ハ如何ナル理由ニ依テ親告罪即チ被害者ノ告訴ヲ待ツヤトハ刑法ノ範圍ニ屬スル問題ナレハ著者ハ其範圍ヲ越ヘザルヲ慎ムモノナリ只タ此等犯罪ノ如キ告訴ニ依テ一旦公訴起リタルキハ裁判確定前ナレハ何時ニテモ之ヲ取消シ得ヘキヤ否ヤハ訴訟法ノ問題ナリ而シテ此問題ニ付テハ多少ノ異議ナキ能ハス即チ一旦起リタル公訴ハ最早ヤ被害者ノ隨意ニ非ラスト又タ法律ノ精神ヨリ解釋スルキハ苟モ裁判ノ確定セサル前ハ何時ニテモ之レヲ取消シ得ヘシトノ說アレトモ其何レカ適說ナルヤハ之レヲ茲ニ斷言セスト雖モ本法解釋トシテハ後說ヲ以テ適當ナルモノト思考ス

第十一節 公訴權消滅ノ理由

- 公訴權ハ左ノ原因ニ依テ消滅スルモノナリ
- 第一 被告人ノ死去
- 第二 告訴ヲ待テ受理スヘキ事件ニ付テハ公訴ノ拋棄
- 第三 確定判決
- 第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
- 第五 大赦

第六 時効

以上ノ事項ハ皆チ公訴權消滅ノ理由ニシテ已ニ其權利ノ消滅スルキハ其權利ノ實行タル公訴ノ消滅スルハ亦タ自然ノ數ナリ是レヲ以テ公訴ノ發動前ニ此理由生シタルキハ檢事ハ公訴ヲ提起スヘカラス又公訴ノ實行中ニ此理由ノ生シタルキ若クハ檢事此理由ノ生シコトヲ知ラスシテ公訴ヲ提起シ而シテ其實行中ニ發見セシトキハ檢事ハ免訴ノ言渡ヲ請求スヘク判事モ亦タ免訴ノ言渡ヲナスヘキナリ若シ此理由アルニモ拘ラス刑ノ言渡ヲ爲シタルキハ總テノ訴訟人ハ採テ以テ上訴ノ理由トナスヲ得ヘシ若シ又總テノ訴訟人上訴ノ道ヲ盡サスシテ其言渡確定シタルキハ控訴院檢事又ハ大審院檢事ハ司法大臣ノ命ニ從ヒ又ハ職權ヲ以テ其院ニ非常上告ヲ爲シテ其刑ノ言渡取消ヲ求メサルヘカラス(本二九二)

第十二節 公訴權消滅ノ理由

公訴權消滅ノ理由ハ各原由ニ依テ全一ナラス今其理由ヲ見ント欲セハ宜ク各原由ニ付之ヲ攻究セサルヘカラス而シテ其原由亦タ各々其性質ヲ異ニス即チ其人ニ對スルモノト其事ニ對スルモノトアリ其人ニ對スル場合ハ其人一人ニ限ルモノナレモ其事ニ關シテハ其事件全体ニ係ルモノナリ故ニ事ハ關スルキハ共犯人アル場合ニ於テハ凡テノ犯人ニ對シ公訴權消滅スルモノナリ

以下公訴權消滅ノ各原由ニ付キ其理由ヲ述ントス

第一被告人ノ死去 此理由ハ刑ハ一身ニ止マルノ原則ヨリ出テタルモノニシテ夫ノ野蠻的ノ三族或ハ死者ニ及ス等ノナサ、ルモノトス或説ニハ其死者ニ及ホサ、ルノ理由トノ死者自ラ辨護スルコト能ハス或ハ冤罪ヲ負フコトナシトセス云々ヲ以テスルモ是レ公訴權消滅セシムル所以ノ理由トナスニ充分ナラサル者ナリ又既ニ述ヘタル如ク此項ハ人ニ關スルモノナルカ故ニ數人共犯ノ場合ニ於テ被告人中死去スルモノアリト雖モ死去セサル其他ノ被告人ニ對シテハ公訴權消滅セサルモノトス夫ノ有夫姦ノ場合ニ付キ其ノ死者ノ男女ニ依テ其說ヲ異ニスルモノアレモ其人ニ關スルノ原則ヨリスルハ死者ノ男女ニ依テ區別ナキヤ亦タ明確ナリト思考ス但シ一方ノ人死去スルハ證據上困難ヲ感スルノミ然レモ是レ單ニ證據上ノ問題ニシテ事件ノ本質ニ關係ナキモノナリ其ノ他有夫姦ハ其性質二人ニ非ラサレハ犯スコト得ス又タ婦女死スルハ婦女ハ空シク罪名ヲ被ルトノ理由ノ如キハ一方ノ者ニ對シテ公訴權消滅スルトノ事ヲ確ムルニ充分ナラサルモノナリ何トナレハ有夫姦ハ二人ヲ要スヘキ犯罪ナレモ必スヤ二人ノ合意ヲ要セス例之ヘハ有夫ノ婦ノ匿眼ニ乘シテ之ヲ姦シタル場合モ亦姦通ヲ以テ論スルヲ得ヘシ又タ婦ノ死シタル場合ニ辨護ノ方ナク空シク罪名ヲ負フト云フニ至テハ男女ノ區別ナキモノナリ特ニ本夫現場ニ於テ姦婦ヲ殺害シタル場合ニ本夫ハ法律ノ宥恕ノ恩點ヲ得ルヲ得サルニ至ルヘケレハナリ故ニ有夫姦ノ場合モ男女ノ區別ナク一方ノ死亡ニ依テ一方ニ對スル公訴ノ消滅スル理由ナキモノナリ

第二告訴ヲ待テ受盤スヘキ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄 舊治罪法ニハ棄權又ハ私和トアリタルモ本法ニ於テ單ニ拋棄ト改メタルハ二者ヲ合シタルモノト解スルモ大ナル誤ナカルヘシト思考ス其如何ナル場合ニテモ私和スルハ從テ何時キ告訴ヲ拋棄スヘキハ通常ナレハナリ然レモ私訴ヲ拋棄シタルハト雖モ告訴ヲ拋棄シタル者ナリト推測ナク下スヘカラス

此理由ハ公訴獨立ノ場合ニ於テ述ベタル如ク被害者ノ告訴ヲ拋棄シタル以上ハ國家ノ代人タル檢事ト雖モ進テ起訴スルノ必要ナキノミナラス法律カ被害者ノ意思ヲ參酌シテ規定シタル法律ノ精神ニ背クヲ以テ其停止ニ係ル公訴權ヲ消滅セシムル所以ナリ亦茲ニ注意スヘキコトアリ告訴拋棄ノ効ハ其指名シタル人ニ關スルヤ將タ事件全躰ニ關スルヤト云フ事之レナリ反對説ニハ其効ハ只タ定リタル人ニノミ及ホスモノナリト此説ニ基クハ某ニ對シテハ告訴ヲ拋棄スルモ某ニ對シテハ之レヲ拋棄セスト云フカ如キ奇怪ナル結果ヲ見ル然レモ告訴拋棄ノ効ハ如此モノニアラスヤ其官署ニ申告スルハ其事件全躰ヲ申告スルモノニシテ之ヲ拋棄スルモ亦同シク事件全躰ヲ拋棄スルモノナレハ共犯中某ニ對シテ拋棄シタルハ他ノ共犯人ニ對スルモ訴權モ同時ニ消滅セサルヲ得ス是レ私訴權ニ關スル拋棄ト異ナル取以ナリトス

又法律上ノ代人及ヒ親屬ハ有効告訴ノ拋棄ヲ爲スコト得ルヤト云フニ法律上ノ代人ト雖モ既ニ告訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ權利アリトスル以上ハ之カ拋棄ヲ爲スコトヲ得

ルノ理由ナリ且ツ法律上ノ代人ハ被代理者ノ爲メ常ニ利害ヲ判察スルヘキ義務アレ
 ハナリ只タ親屬ハ被害者ノ意思ニ反シ告訴ノ拋棄ヲ爲スコトヲ得サルモノ、如キ
第三確定判決 此理由ヲ知ラントスルニハ確定判決トハ如何ナルモノナルヤヲ知ラザ
 ルヘカラス曰ク確定判決トハ適法ノ裁判所ニ於テ言渡シタル本按ノ判決ニシテ其判
 決ノ確定シタルモノヲ云フ故ニ確定判決ニハ自ラ左ノ三個ノ條件ヲ要ス
 一適法ノ裁判所ニ於テ言渡シタルコト 故ニ裁判所以外即チ監獄署長カ囚人ノ獄則チ犯
 シタルニ付懲罰ヲ言渡シタルガ如キ又本屬長官カ所屬官吏職務上ノ犯罪ニ付懲罰ヲ
 言渡シタルガ如キハ訴權アル場合ハ再ヒ同一ノ事實ニ付適法ノ裁判所ニ訴ヲ起スモ
 妨ケトナラス之レニ反シテ適法ノ裁判所ニ於テ言渡シタル判決ハ假令瑕瑾アルモ上
 訴期間過キタルトキハ既判力ヲ有シテ再ヒ動スコトヲ得サルモノトス
 二本按ノ判決ナルコト 故ニ手續ニ關スル判決又ハ異議ノ申立ニ關スル決定ノ如キハ
 本按外ノ言渡シタルハ縱令確定スルモ其効力ヲ本案事件ニ及ササルナリ
 三確定ニ至リタルコト 故ニ上訴期間ヲ經過シ又ハ上訴ノ手續ヲ盡シタルキハ其判決
 ナリテ再ヒ動スヘカヲサルモノトス
 以上ノ三項ハ確定判決ノ條件ナリト雖モ確定判決ノ効力即チ確定判決ヲ以テ對抗スル
 ニハ多數ノ學說ニ依レハ民事ト全シク三ヶノ條件ヲ要スルトスレモ是レ單ニ民法ヲ假
 ヲテ説明スルモノニシテ刑事ニアリテハ何時モ其目的ハ刑ノ適用ニアルヲ以テ常ニ同

一ナレハ唯タ左ノ二條件ヲ具備スルヲ以テ充分ナリトス
第一前訴ト後訴ト同一ノ事件ニ係ルコト 故ニ前後同一ノ事件ニ係ルトキハ再ヒ訴ヲ
 起スコトヲ許サ、ルモノトス假令ハ竊盜事件ニ付キ既ニ確定シタルキハ再ヒ公訴ヲ
 起シ該事件ハ竊盜ニアラス詐偽取財又ハ家宅侵入ナリトシテ其名稱ヲ變スルモ再訴
 ナ許サス然レモ外形ヨリ見レハ其事件同一ナルカ如クニシテ其實然ラサルモノアリ
 即チ誣告ヲ爲シ併シテ偽証罪ヲ犯シ又貨幣度量衡等ヲ偽造シテ併シテ官印ヲ偽造シ
 又ハ私書ヲ偽造シテ併シテ私印ヲ偽造スルカ如キ之レナリ此場合ニ於テハ犯罪ノ目
 的ハ唯一ナリト雖モ犯罪ノ事實ハ二個各相異なるナルモノナリ故ニ誣告罪ニ付キ確定判
 決アルモ偽証罪ニ付テハ尙ホ公訴ヲ起スコトヲ得ルカ如キナリ
第二前訴ト後訴ト相手方ノ同一ナルコト 凡ソ判決ハ之レヲ受ケタルモノニハ其効力
 アリト雖モ之レヲ受ケサルモノニハ其効力ナキモノトス故ニ甲者ハ判決ヲ受ケルモ
 乙者ハ之ヲ受ケザルキハ甲者ニ對シテハ同一ノ事件ニ付再ヒ訴ヲ起スコトヲ得ズト
 雖モ乙者ニ對シテハ尙ホ其事件ニ付更ニ訴ヲ起スコトヲ得ルモノトス何トナレハ甲
 者ニ對シテノ判決ハ確定判決ノ効力アレモ乙者ハ曾テ判決ヲ受ケタルコトナケレハ
 ナリ且ツ公訴ニ關スル原告ハ國家ノ代理人タル全一休ナル檢事ナレハ只タ被告人ノ
 同一ナラサルヲ要スルノミ然レモ私訴ニ關スル確定判決ノ條件ハ民法ト全一ナルヲ
 要スヘキハ勿論ナリ

第十三節 數人共犯ノ場合ニ於ケル確定判決ノ効力

換言スレハ共犯ノ場合ニ一人ノ受ケタル裁判ハ他ノ共犯人ニ如何ナル効力ヲ及ホスヤトノ問題ニ過キス而シテ此ノ問題ニ付テハ種々ノ異論アリテ

第一説 犯罪事件法律上罰スヘキモノニ非サルカ又ハ罪トナラサル場合又ハ証據不充分ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ハ共犯人一般ニ其人ノ確定判決ノ効力ヲ及ホス其理由ニ國家ノ代人タル檢事立會ノ上言渡サルモノナレハ其裁判ハ適正不可動ノモノナレハ也ト去レ此説ハ唯無罪ノ場合ヲ想像シタルモノニシテ且ツ已ニ述ヘタル如ク確定判決ニハ相手方即チ被告人ノ全一ナルヲ要ストノ條件ヲ妄却ノ既判力ヲ亂用スルノ説ナリ佛國大審院及ヒ佛國一般ノ學者モ亦此説ヲ採用シタルモ是レ法理上許容スヘキ説ニ非ラサルナリ

第二説 ハ第一説ニ例外ヲ置キ即チ姦通罪及ヒ重婚罪ニ付テハ姦夫又ハ新配偶者ハ一方ノ無罪又ハ免訴ヲ以テ自己ニ對スル公訴ヲ棄却セシムルヲ得スト是又法理上容ルヘカラサルモノナリ

第三説 ハ絶對ニ他ノ共犯ニ及ホサハルモノナリトノ説ニ即チ確定判決ハ其人ニ限ルモノニシテ他人ハ之ヲ利用スルヲ得ストノ原則ヲ通用シタルモノ也且ツ甲裁判官ト乙裁判官トハ假令其ノ事件ノ全一ナルニモセヨ各自異別ノ決定ヲ與フルヲ得ヘキモノナレハナリ要スルニ確定判決ノ効力ハ有罪ト無罪トヲ問ハス其訴訟關係人ノミ之

レヲ利用スルヲ得テ他ノ共犯人即チ訴訟ニ關係セサル者ハ之ヲ利用スルヲ得スノ只其關係人ニノミ對シテ公訴權消滅ノ原由トナルモノナリ
以上ハ專ラ學理上ニシテ本著ノ主趣ニ反スルモ確定判決ヲ説クニ當リ最モ注意ヲ要スヘキ點ナルヲ以テ之レヲ此ニ掲載シタルモノナリ而シテ說ノ可否ニ就テハ固ヨリ讀者ノ撰フ處ニ任スヘシ

第四 犯罪ノ后頒布シタル法律ニ因リ其ノ刑ノ廢止

法律ハ一旦罰スヘキ必要ヲ認メ或處爲テ罪トシ之レニ刑ヲ科シタルモ其後其ノ刑ノ有用ナラサルヲ確メ法律ヲ以テ其ノ刑ヲ廢止シタルキハ此ノ法律カ假令犯罪ノ后ト雖モ已ニ國家カ之ヲ罰スルノ必要ナシトシテ廢止シタル以上ハ最早其ノ刑ヲ科スルノ必要ナシ是レ公訴權消滅ノ原由タル所以ナリトス
又タ法律ニ依リ云々トハ國家カ法律ヲ以テ委任シタル者ノ命令ヲ以テ之カ規定ヲナシタルキ其命令ヲ以テ之レヲ廢シタルキモ亦タ此項ニ該當スルモノナリ

第五 大赦ハ特赦ノ如ク其刑ヲ免スルニ非ラズシテ罪其モノヲ消滅セシメテ初ヨリ罪ナキ人ノ位置ニ復セシムル法律上ノ恩典ナリ故ニ大赦ヲ得タル事件ニ付テハ公訴權消滅スルモノニシテ訴訟ノ如何ナル程度ニアルヲ問ハス訴訟關係人及裁判官ハ之レヲ以テ其訴ヲ棄却スルヲ得但私訴消滅ノ原由トナラス是レ私訴ハ元來民事ニ屬スルモノニシテ國家公益ニ關スルモノニ非ラサレハナリ

第六 時効(刑事ノ時効ニハ取得ノ時効ナシ)

時効ノ以テ公訴權消滅セシムル理由ニアリ一ハ證據ノ湮滅ニシテ一ハ社會ノ遺忘ニ基クモノナリ蓋シ時日ノ經過ハ事物ヲ湮滅遺忘セシムルモノナリ故ニ犯罪アルモ若干時間公訴ヲ起サ、ルトキ又ハ之レヲ起スモ其手續ヲ繼續セシメテ多少ノ時間ヲ經過スルトキハ犯罪ノ證據ハ漸次ニ湮滅シ隨テ無辜ヲ罰スルノ恐レアリ又假令犯罪ノ證據湮滅セサルコトアルモ社會公衆ハ其犯罪ノ事實ヲ遺忘スルヲ以テ之レヲ罰スルノ必要ナキニ到ルモノナリ之レ時効ニ由テ公訴權ヲ消滅セシムル所以ナリ

第十四節 公訴ノ時効ト刑ノ時効ノ差異

公訴ノ時効ト刑ノ時効トハ等シク刑事ノ時効ナレトモ之レテ混スヘカラス其差異アル點ハ左ノ如シ

第一 公訴ノ時効ハ公訴ノ實行權ヲ消滅セシムルモノナレトモ刑ノ時効ハ刑ノ執行權ヲ消滅セシムルモノナリ何ントナレハ公訴ノ時効ハ犯罪ノ所爲アルモノニ對シ若干ノ時間公訴ヲ起サ、ルニ因リ生スルモノナレトモ刑ノ時効ハ犯人刑ノ言渡ヲ受ケタル後チ若干ノ時間其刑ノ執行ヲ受ケサルニ因リ生スルモノナレハナリ

第二 公訴ノ時効ト刑ノ時効トハ之レヲ與フル理由チ異ニス公訴ノ時効ハ證據ノ湮滅ト社會ノ遺忘トニ基クモノナレトモ刑ノ時効ハ專ラ社會カ犯罪事件ヲ忘却スルニ基クモノニシテ既ニ刑ノ言渡アル以上ハ之レカ證據ノ湮滅スルノ理由ナケレハナリ

第三 公訴ノ時効ト刑ノ時効トハ其期間チ異ニス即チ公訴ノ時効ハ三段ニ分チ重罪ハ十年輕罪ハ三年違警罪ハ六ヶ月(重輕違ハ各條項ニ規定シタル)ナレトモ刑ノ時効ハ七段ニ分チ長ハ三十年短ハ一年ナリ是レ刑ノ時効ハ專ラ社會ノ遺忘ニ基因スルモノナレハナリ尙刑法第五十九條ヲ見ルヘシ

第四 公訴ノ時効ト刑ノ時効トハ其期間ノ起算點チ異ニス即チ公訴ノ時効ハ犯罪ノ日(續犯ニ付テハ終ノ日)ヨリ起算スレトモ刑ノ時効ハ刑ノ執行ヲ遣レタル日ヨリ起算ス

第五 公訴ノ時効ト刑ノ時効トハ其期間ノ中斷方法チ異ニス即チ公訴ノ時効ハ適法ノ起訴豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過チ中斷スルモノナレトモ刑ノ時効ハ逮捕シタル日又ハ逮捕ヲ命シタル日ニ因リ其期間ノ經過チ中斷スルモノナリ

第十五節 私 訴

私訴ハ被害者犯罪ニ依リ生シタル損害ノ賠償 贖物ノ返還チ加害者(又ハ民事擔當人)ニ向テ要求スル訴ニシテ公訴ニ對スル名稱ナリ而シテ私訴ハ其性質民事ニシテ民法ノ支配ヲ受ケヘキモノナルモ便宜上刑事ニ附帶シテ之レヲ審理スルモノナリ又チ私訴ニ要スヘキ條件左ノ如シ(本法第二條)

- (イ) 損害アル
- (ロ) 犯罪ノ事實ニ關シタル
- (ハ) 損害ヲ回復シ得ヘキモノナル

(二) 損害回復ノ目的ニ出ル

第十六節 私訴權ノ發生及其目的

凡ソ社會ニ一ノ犯罪アレハ公益ヲ害スルノミナラス亦共ニ私益ヲ害スルコトアリ(純粹ノ國事犯又ハ違警罪ハ格別)假令ハハ身體財産ニ關スル歐打又ハ竊盜ノ如キニ至リテハ社會ノ公安ヲ害スルト同時ニ必ラス一個人ノ私益ヲ害スルモノナレバ一犯罪ハ多クノ場合ニ公訴權ヲ發生スルノミナラス亦同時ニ私訴權ヲ發生スルモノナリ故ニ何レノ場合ニモ私訴ノ名稱ヲ下スヘキトキハ其原因タル必スヤ犯罪ノ事實アルニアラサレハ此名稱ヲ附スヘカラス

私訴ノ目的ハ之レヲ一言ニ云フキハ單ニ損害ヲ賠償セシムルニアリ法文ニヨレハ損害ノ賠償ト贖物ノ返還ヲ目的トス云々トアレバ損害ノ賠償中ニハ自ラ贖物ノ返還ヲ包含スヘクシテ殊ニ之レヲ區別スルノ必要ナキモノ、如クナレバ法文ニ之レヲ區別シタルハ亦故ナキニアラス即チ贖物ノ返還ハ物權ニ係リ反之損害ノ賠償ハ單ニ人權タルニ過キサレハナリ故ニ私訴ノ目的タル贖物ノ返還損害賠償ノ理ヲ明カナラシメシハ先ツ人權物權ノ何物タルヲ知ラサルヘカラス即チ物權ハ直チニ其物ノ上ニ權利ヲ有スルモノナレハ社會一般ノ人ニ向テ對抗スルヲ得レトモ人權ハ特ニ定マリタル人ニアラサレハ對抗スルコトヲ得ス又其結果トシテ物權ニハ追及權アレバ人權ニハ追及權ナシ故ニ贖物ノ返還ヲ請求スルトキハ其物件ノ所在ヲ追フテ之レヲ取戻スコトヲ得決シテ他人

ノ爲メニ自己ノ權利ヲ左右セラル、コトナシ
但贖物第三者ノ手ニ在リテ第三者ガ公商ヨリ買取シタルトキハ公商又ハ被害者ヨリ第三者ニ原價ヲ償フニアラサレハ直チニ取戻スコトヲ得スト雖モ結局加害者ノ負擔ニシテ所有者ニ於テハ尙ホ其取戻ヲ爲スコトヲ得(刑法第四十八條同法附則第五十五條參照)

第十七節 贖物

凡ソ犯罪ニ原因シ不正ノ所爲ヲ以テ得タル物件ハ皆之ヲ贖物ト云フ假令ハ強盜竊盜詐欺取財ニ關シタル物其他遺失物ナルコトヲ知リテ之レヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル物品ハ皆之レヲ贖物ト云フ刑法第三百九十九條ニ強盜竊盜ノ贖物ナルヲ知テ云々トアリ又タ全第四百一條ニハ單ニ物件云々トアルモ皆之レ贖物ニシテ敢テ差アルニ非ラス何者全第四百一條ニハ其他ノ犯罪ニ關シ云々トアレハナリ又贖物中ニモ物件ノ性質ニ依リ消費物ト不消費物トアリ之レ私訴ノ目的ヲ達スルコト於テ其區別ノ必要ヲ見ル即チ非消費物トハ一ニ之レヲ不得代物ト云フ假令ハ古昔ヨリ傳來ノ寶物又ハ其定紋付ノ羽織版權ヲ得タル著述本ノ如キ之レナリ消費物トハ一ニ之レヲ得代物ト云フ假令ハ米麥酒油等ノ如キ之レナリ之等ハ數量尺度ヲ以テ計算シ得ル所ノモノナレハ他ノ物品ヲ以テ代替スルコトヲ得ルモノナリ已ニ此ノ區別ヲ明カニシタル以上ハ如何ナル場合ニ於テハ贖物ノ返還ヲ請求シ得ヘキカ又如何ナル場合ニ於テ損害ノ賠償ヲ請求シ得

ヘキヤチ知ルニ足ル即チ犯罪ニ關シタル物件不得代物ナルカ又ハ物件現存スルキハ賍物ノ返還ヲ請求シ得ヘク又タ得代物ナルキ又ハ物件既ニ滅失シタルキハ賍物ノ返還ヲ請求スルヲ得オシテ單純ナル損害賠償ヲ請求スルヲ得ルノミナリ而シテ損害トハ得ヘキ利益ノ損失ト失ヘタル利益トノ總稱ナリ

第十八節 私訴權ハ何人ニ屬スルヤ

私訴權ハ何人ニ屬スルヤ曰ク第二條ニ規定シタル如ク犯罪ノ爲メ損害ヲ被リタル者即チ被害者ニ屬スルモノトス故ニ被害者ハ自己ノ意見ニ依テ隨意ニ放棄又ハ讓與スルヲ得又被害者ノ債權者モ之レヲ請求スルヲ得等凡テ民法ノ規定ニ從フモノナリ

第十九節 被害者

被害者トハ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタルモノナラサルヲ得ス故ニ被害者ト爲スニハ左ノ條件ヲ要ス

第一 現ニ損害ヲ被リタルコト 素ト私訴ノ目的ハ損害ヲ賠償セシムルニアルモノナレハ現ニ損害ヲ被リタルコトナケレハ私訴ノ生ズヘキ理由ナシ即チ損害ハ原因ニシテ私訴ハ結果ナレハナリ

第二 損害ノ犯罪ニ原因シタルコト 損害ノ因テ生スヘキ所ノ事實ハ刑法ニ觸レサルモノナルキハ之レカ賠償ヲ求ムルノ訴ハ私訴ニアラスシテ通常民事ノ訴ナリトス故ニ私訴ハ必ラス刑律ニ觸ル、所ノ犯罪ニ原因シタルモノナラサルヘカラス

第三 損害ハ直接ニ生シタルコト 其損害ハ必ラス犯罪ニ原因シテ而シテ直接ニ生シタルモノナラサルヘカラス間接ニ生シタルモノモ尙ホ其賠償ヲ請求シ得ルモノトセシカ殆ント其底止スル所ナキニ至ルヘシ故ニ被害者トハ害ヲ受ケタル本人ハ勿論或ル場合ニハ法律上ノ代人及ヒ親族并ニ被害者ノ債權者即チ犯罪ノ爲メニ殺サレタル者ノ技術ヲ目的トシテ作爲ノ契約ヲナシタルキハ之レカ被害者ハ債權者ナルカ如キ之レナリ

而シテ既ニ被害者ノ何タルチ知リタルト雖左ノ場合ヲ注意セサルヲ得ス即チ私訴權執行スルニ於テ特ニ注意スヘキコトナリトス

第一 甲者ニ對スル犯罪ニシテ乙者ニ損害ヲ加ヘタル場合 假令ハ有夫ノ婦若クハ幼者ニ對シテ罪ヲ犯シタル場合ニ於テハ其直接ナル被害ハ婦タリ子タリト雖左婦タリ子タルモノハ其夫若クハ父ノ保育ニヨリ生活スルモノナレハ夫若クハ父モ亦タ被害者トナルコトアリ故ニ此場合ニハ夫又ハ父タルモノハ自己ノ名義ヲ以テ賠償ヲ請求スルコトヲ得ルモノナリ

第二 被害者死去シテ相續者ノ存スル場合 此場合ハ更ニ分チ三トス

一 被害者他ノ原由ニ依リ死去シタル場合 此一項ノ場合テ更ニ分テ二個ニ分ツ可シ

(イ) 被害者死去前已ニ私訴ヲ起シタルトキ此場合ニハ私訴權ハ相續人之レヲ繼續スルハ當然ナリトス何ソナレハ私訴權ハ財産ノ一部ヲ爲スモノナレハナリ

(ロ) 被害者未タ私訴ヲ起サズシテ死去シタルキ此場合ニハ相續人ハ必ラスモ私訴ヲ起スノ權利アルモノニアラス唯ターノ犯罪カ被害者ノ財産若クハ身体ニ害ヲ加ヘタルトキ且ツ親告罪ニ非ラサルキニ限ルモノナリ

二 被害者犯罪ノタメ死去シタルキ 此場合ニ於テハ相續人ハ勿論縱令ヒ相續人ニアラズト雖モ之レカタメ損害ヲ被リタルモノハ皆私訴ヲ起スコトヲ得ルモノトス何ントナレハ犯罪ノタメニ死去シテ其死去ノタメ損害ヲ被ムレハナリ

三 死者ニ對シテ誹毀罪ヲ犯シタルキ 死者ニ對スル誹毀罪ハ死者ヲ傷ケ併セテ相續人ヲモ傷ケタルモノナレハ相續人ハ私訴ヲ起スコトヲ得ルモノナリ而シテ死者ニ對スル誹毀罪ト生活シツ、アル人ニ對スル罪ハ異ナレモ是レ刑法ノ範圍ナレハ亦タ茲ニ略ス

第二十節 第三者ノ訴訟參加

本法第四條末項ニ第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルヲ得トアリ參加トハ第三者即チ原被告以外ノ者カ自己ノ權利主張ノ爲メ或ハ利益ノタメ私訴ニ關與スルモノニシテ民事訴訟法第五十一條以下ニ於テハ種々ニ區別セヨリ今之レヲ摘述スレハ左ノ如シ

第一 主參加 主參加トハ原告被告ニ對シテ自己ノ爲メニ訴ヲ爲スモノヲ云フ例ヘハ民事原告人ニ於テ被告ニ向テ何々ノ贓物返還ヲ求メタルキ第三者カ其贓物ハ自己ノ

所有物ナレハ被告ヨリ自己ニ引渡ヲ求メタルカ如キ之レナリ (民事訴訟法第五十三條)

第二 從參加 從參加トハ他人ノ間ニ起リタル訴訟ノ結果ニ依リ自己ノ權利ニ利害ノ關係アルモノ其訴訟ニ參加シ原被告ノ一方ヲ補助スルモノヲ云フ例ヘハ民事原告人ニ於テ贓物ナリトシテ或ル物品ノ返還ヲ請求セシキ第三者カ其贓物ナリト云フ物品ハ曾テ被告ニ賣渡セシモノニシテ決シテ贓物ニアラズトシテ被告人ヲ補助スル如キモノヲ云フ(民事訴訟法第五十九條)

第三 告知參加 告知參加トハ原告若クハ被告カ敗訴スルキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又第三者ヨリ請求ヲ爲スヘキコトヲ恐ル、場合ニ於テ其第三者ニ告知シテ訴訟ニ參加スルモノヲ云フ(民事訴訟法第六十二條)

第四 指名參加 指名參加トハ第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告トナリタルトキ本案ノ辨論前第三者ヲ指名シ之レニ陳述ヲ爲セシムルヲ呼出ヲ求ムルモノニシテ例ヘハ甲アリ乙ノ所持スル物品ハ余ノ盜マレタル品ナリトシテ乙ニ對シテ求メタルニ乙ハ丙ノ名義ヲ以テ借用シタルモノナリ依テ丙ヲ呼出アリト云フカ如キ之レナリ

以上ハ私訴ニ付キ民事訴訟法ニ從ヒ參加スルコトヲ許シタルモノニシテ尙ホ詳細ハ民事訴訟法ニ依ルヘキナリ

又訴訟ハ多クハ公訴ニ附帯シタルキニ關スル場合ナリト雖モ私訴ノ附帯ナキ公訴ノ場
合ニ於テモ民事原告人ハ第一審ノ判決アルマテハ何時ニテモ之レニ參加スルヲ得而
自己ノ利害ニ付テ訴訟人タルヲ得ヘシ故ニ其結果トシテ(イ)裁判ノ効力ヲ及ホス(ロ)
既ニ訴訟人ナレハ共犯人ナルキニ於テハ檢事ノ起訴ヲ待テ要セス

第二十一節 賠償義務ノ體様

損害ヲ賠償スル義務ハ連帯ナルカ非連帯ナルカ刑法第四十七條ニ曰ク數人共犯ニ係ル
裁判費用贓物ノ還給損害ノ賠償ハ共犯人チシテ之ヲ連帯セシムヘト規定セリ今之レ
ヲ論スルニ先チ連帯ノ何物タルヲ知ラサルヘカラス即チ連帯ニハ債務者間ノモノト債
權者間ノモノトアレトモ刑事事ニハ多クハ債務間ノ連帯ノミ而シテ連帯トハ其ノ間相互
ニ代理ノ原則ヲ適用シ例ヘハ五人共同シテ金千圓ヲ借リ入レタル場合ニ於テ通常ノ規
定ニ從ヘハ債主ハ負債者中ノ一人ニ對シテハ總高千圓ノ五分ノ一即チ二百圓ツ、ヲ請
求スルヲ得ルノミ然ルニ其義務若シ連帯ノ義務ナルトキハ債主ハ負債者中ノ一人ニ對
シテ全額即チ千圓ヲ要求スルノ權アリ隨テ其全額ノ請求ヲ受ケタル負債者ハ二百圓ヲ
返還シテ其義務ヲ免カル、ヲ得ズ之レ連帯ノ最モ著シキ効果ナリトス故ニ三人ニテ竊
盜ヲナシタリ三人ハ共犯人ナレハ連帯ニテ之レヲ負擔セサルヘカラス而シテ連帯ハ例
外ナレハ極メテ狹隘ニ解釋スヘキナリ然ラハ刑法第四十七條ニハ共犯人云々トアリ故
ニ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル共犯人及ヒ民事擔當人ハ連帯シテ其ノ義務ヲ負擔ス

ヘキヤ否ヤハ少ク説明ヲ要スヘキナレモ余ハ尙ホ二者共ニ連帯ニテ負擔スヘキモノ
ナリト斷定ス但シ無罪免訴ノ中ニハ夫ノ權利行為ニ依ル正當防衛ノ如キモノヲ含蓄セ
サルハ勿論ナリト雖モ其他ノ處爲ニシテ免訴若クハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルモノモ共犯人
トシテ取調ヘテ受ケタル者ニシテ其所爲ニシテ性質上分ツヘカラサルハ連帯シテ負
擔スヘシ民事擔當人モ亦全シ然レモ連帯ハ例外ナレハ狹隘ニ解釋スヘシトノ原則ニ反
セサルカノ忌アルモ固ト連帯ニハ法律合意及ヒ性質ヨリ來ルモノナリ
以上二ケノ場合ニハ余ハ所爲ノ性質ヨリ來ルモノナレハ假令無罪ヲ得タル者及ヒ民事
擔當人ト雖モ連帯ノ責ヲ免レサルモノト思考スルモノナリ

第二十二節 私訴ト通常民事ノ差異

私訴ハ犯罪ニ原由スルモノナレモ其目的タル畢竟損害賠償ヲ要求スルニ外ナラサレハ
通常民事ノ損害賠償ノ訴ト異ル所ナシ之レ第二條ノ末文ニ民法ニ從ヒトアル所以ナリ
然レモ已ニ其名ヲ異ニシタル以上ハ其實ニ於テ多少ノ差異ナキヲ得ズ左ニ之ヲ述フヘ

- 第一 私訴ハ犯罪ニ原由スレモ通常民事ノ訴ハ犯罪ニ原由スルモノニアラスシテ合意
不當利益不正ノ損害(犯罪準犯罪)及ヒ法律ノ規定ニ原由スルモノナリ
- 第二 通常民事ノ訴ハ民事ノ管轄裁判所ニアラサレハ起スヲ得スト雖モ私訴ハ
民事ノ管轄裁判所ニ訴テ起スハ勿論公訴ニ附帯シテ刑事裁判所ニ訴テ起スコトヲ得

第三 通常民事ノ訴ハ請求金額ノ多寡被告人所在等ニ依リ其管轄裁判所ヲ異ニスト雖
凡私訴ハ民事上裁判管轄ノ如何ト金員ノ多寡トヲ問ハス公訴ニ附帶シテ其裁判所ニ
爲スヲ得ルモノナリ

第四 通常民事ノ訴ハ請求金高ノ多寡ニ從ヒ訴訟印紙ヲ貼用セサルヲ得サレトモ私訴
ハ印紙ヲ貼用スルコトナシ

第五 通常民事ノ訴ハ民法ニ定メタル時効ノ規定ニ從フ之ニ反シテ私訴ハ本法ニ定メ
タル時効ノ規定ニ從フ故ニ左ノ結果ヲ生スルモノトス

一 私訴時効ノ期間ハ公訴時効ノ期間ト同一ナリ然レトモ通常民事ノ訴ニ係ル時効
ハ民法ニ定メタル時効ノ期間ニ從フ

二 私訴ノ時効ハ被害者無能力ナルトキト雖凡進行ス之ニ反シテ通常民事ノ訴ニ係
ルハ五ヶ年ヲ經過シタル時効ニ關シテハ其期間ハ成年ニ達シタル未成年者又ハ
精神ノ回復シタル禁治産者ヲシテ常ニ其權利ヲ行フ猶豫ヲ得セシムルヲメ最後ノ
一ヶ年間停止ス

三 私訴ノ時効ハ私訴ノ手續其規定ニ背キタルヨリ無効ニ屬スルハ時効ノ經過ヲ
中斷スルノ効力ナシ(管轄違ニ例外アリ)通常民事ノ訴ニ係ル時効ハ縱令裁判上ノ
請求カ方式ニ於テ無効タルモ時効中斷ス

第廿三節 公訴ト私訴ト相異ナル要點

公訴ト私訴ト相異ル要點ハ左ノ如ク

第一 公訴ノ目的ハ犯罪ヲ証明シ刑ヲ適用スルニアリテ私訴ノ目的ハ損害賠償ト贓物
ヲ返還スルニアリ

第二 公訴權ハ國家ニ屬シ私訴權ハ被害者ニ屬スルモノナリ

第三 公訴ハ必ス常ニ刑事ノ管轄裁判所ニ提起セサルヘカラスト雖凡私訴ハ公訴ト共
ニ刑事裁判所ニ提起ス又ハ別ニ民事裁判所ニ提起スルヲ得

第四 公訴ト私訴ト消滅ノ理由ニ差異アリ即チ被告人死去ハ公訴ヲ消滅セシムルトモ
私訴ハ其相續人ニ對シテ行フヲ得ルカ如キ是ナリ

第廿四節 私訴管轄裁判所

私訴ハ損害ノ賠償ヲ目的トスルモノナレハ其性質タルヤ民事ノ訴ニ外ナラス故ニ私訴
ハ民事訴訟法ノ規定ニ依リ其管轄裁判所ニ之ヲ爲ス正則ナリトス然レ凡通常民事ノ
損害賠償ノ訴ト異ナリハ犯罪ニ原由スルモノナレハ公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スヲ得而
シテ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲スハ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヘキモノナレハ民事訴訟法
及ヒ裁判所構成法第十四條ノ規定ニ依リ金額ノ制限ニハ依ラサルナ(本法第四條)

第廿五節 私訴ノ公訴ニ附帶スルヲ得ヘキ時期

私訴ハ何時ニテモ公訴ニ附帶ノ之ヲ爲スヘキモノニアラス第二審ノ判決アル時ヲ以テ
其限界トス(第四條)而シテ第二審トハ假令ハ區裁判所ノ判決ニ服セズシテ地方裁判所

ニ控訴シタルハ地方裁判所ノ判決ハ第二審ノ判決ナリ又地方裁判所ノ判決ニ服セス
シテ控訴院ニ控訴スルハ控訴院ノ判決ハ即チ第二審ノ判決ナリトス而シテ控訴ハ事
實ノ覆審ナレハ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ許スト雖モ第三審即チ上告裁判所ニ至テハ事實
ノ覆審ニアラスシテ單ニ法律ノ誤謬ヲ正スニ止マルモノナレハ私訴ノ附帶ヲ許サル
モノトス

第廿六節 私訴ノ公訴ニ附帶ヲ許シタル理由

- 公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲スコトヲ許シタル理由ハ左ノ便益アルヲ以テナリ
- 第一 證據ヲ蒐集スルニ付キ便益アリ
- 第二 被告人ハ一ノ辨論ヲ以テ公私兩訴ニ應スル便益アリ
- 第三 日時ヲ費スコト少ク且ツ訴訟入費ヲ減殺スルノ便益アリ
- 第四 司法事務ヲ延滞セシメサルノ便益アリ
- 右四個ノ便益ハ以テ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ許シタル理由ナリトス

第廿七節 民事ト刑事トノ責任ノ特立

民事ト刑事トノ責任ハ峙立セルモノニシテ互ニ相關セサルモノトス故ニ第五條ニ被
告人兇訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖モ云々トアリテ好シ刑事上責任ナキモ民
事ノ責任ヲ免ル、コトヲ得サルモノナリ假令ハ竊盜罪ノ訴ヘテ受ケシニ竊盜罪トナル
ニハ他人ノ所有物ヲコト竊取スルコト利益トスルノ意思アルコトノ三條件ヲ具備ス

ルコトヲ要ス而シテ若シ竊取スルモ自己ノ利益トスルノ惡意ナキヲ以テ其罪ハ問ハサ
ルコトアルモ其物件ハ返還セサルヘカラス然ラザレハ民事ノ原則ニ背反シ他人ヲ害シ
テ不正ノ利益ヲ希望スルニ至レハナリ(本法第五條)

第廿八節 私訴權消滅ノ場合及ヒ其理由

私訴ハ左ノ場合ニ於テ消滅スルモノトス

- 第一 拋棄又ハ和解私訴權ハ固ト被害者ノ權利ナレハ之レヲ行フト行ハサルトハ一ニ被害者ノ意見ニアリ故ニ權利ヲ拋棄シテ之ヲ消滅セシムルハ勿論和解ヲ爲スルハ被害者ハ多少ノ賠償ヲ得ルコトアレハ損害ヲ求ムル要ナキヲ以テ消滅セシムルコト、セリ

第二 確定判決 確定判決ノ如何ナルモノナルヤハ前已ニ述ヘタルヲ以テ茲ニ再ヒス

ルノ必要ナシト雖モ私訴ハ即チ民事ノ訴ナレハ其確定判決ノ効力ヲ生スルニハ前ニ述ヘタル公訴ノ條中ト少シク差アリテ民法ニ從ヒ訴訟ノ目的訴訟ノ原由及ヒ原被兩造ノ資格全一ナルヲ要スルモノトス此ノ三ヶノ條件ヲ具備シ其事件ニ付判決ノ確定トナリタルハ私訴權ノ消滅スル尙ホ公訴權消滅ト異ナルナシ但シ或ル場合ニ於テハ私訴トシテ消滅スルモ民事ノ訴トシテ提起スルヲ得ヘキモノアリ假令ハ竊盜ニテ物件ヲ竊取セラレタルハ於テ其犯罪ノ原由トマテ訴ヲ起スヲ得スト雖モ物件ノ處有權回復トシテハ訴ヲ起スヲ得ヘキカ如キ是レナリ此場合ニハ犯罪ノ事實ノミヲ

証明スルハ固ヨリ法律ノ禁スヘキモノニアラス

第三 時効 私訴ノ時効ハ公訴ト其期間ヲ同フスレモ(已ニ刑ノ言渡アリタルモハ例害(第九條)其理由ヲ異ニス即チ公訴ハ社會ノ遺忘ト証據湮滅トノ二理由ニ出ツルモ私訴即チ民事ノ訴ハ原告人ノ懈怠ニ基因スルモノニテ凡ソ時日ヲ經過スルニ從ヒ証據ノ湮滅スルモノアレハ舉証實ニ困難ナルヨリ從テ裁判ノ失誤ヲ來ス故ニ亦タ隨テ私訴モ消滅スルコト、セリ(本法第七條)

茲ニ注意スルコトハ時効ニモ權利ヲ得ルモノト義務ヲ免カル、モノトアリ權利取得ニ係ルモノ之ヲ取得時効ト云ヒ義務ヲ免カル、モノ之ヲ免責時効ト云フ而シテ刑事時効(刑ノ時効及ヒ公訴ノ時効)ニハ免責時効アレトモ取得時効ニシテ私訴ノ如キハ性質民事ニ屬スルモノナレトモ取得時効ナシ若シ之ヲ有トスルモ所有權回復ヲ原由トスルモハ尙ホ三十年ノ長キニ從ハサルヘカラス而シテ其詳細ハ民法證據編ニ讓ル可キモノナルヲ以テ茲ニ贅セズ

第廿九節

私訴權ハ被告人ノ死去刑ノ廢止及ヒ大赦ニ依リ消滅セサル理由

公訴消滅ノ原由ハ已ニ陳ヘシ如ク犯人一身ニ係リテ爲スモノ存ルカ故ニ犯人死去スルモハ公訴ノ目的ナキヲ以テ其訴權モ消滅スト雖モ私訴ハ專ラ財產ニ干スルモノナルカ故ニ犯人死去スト雖モ財產ノ存スル限リハ相續人ニ對シテ之ヲ要求スル途アルヲ以テ

消滅セルモノトセズ

又刑ノ廢止シタルモハ國家ハ已ニ刑罰權ヲ拋棄シタルヲ以テ公訴ヲ行フノ必要ナキニ依リ公訴權消滅ノ原由トシタレトモ被害者ノ損害ハ夫レカ爲メニ消滅スヘキモノニアラサルヲ以テ其目的ヲ果スヘキ私訴モ亦消滅スヘキ道理ナシ是レ公訴私訴ハ其ノ目的ヲ異ニスル所以ナリトス

又大赦ハ特別ノ恩典ニ依リ其罪刑ヲ免スト雖モ以テ被害者ノ私權ヲ害スヘカラス佛國ノ或ル學說ニハ私訴モ供ニ消滅スヘキ旨ヲ説クモ直ニ以テ本邦ノ大赦ニ運用スヘキモノニアラス

第三十節

私訴時効ノ期間

(以下單ニ時効トアルハ私訴ニ限ルモノニ非ラス)

私訴ノ時効ハ公訴ノ時効ト其期間ヲ同一ニス蓋シ二者犯罪ヲ原因トスルモノナレハナリ即チ本法第八條ニ公訴ノ時効ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス

- 第一 違警罪 六ヶ月
- 第二 輕罪 三年
- 第三 重罪 十年

其時効ノ消滅スル理由ハ公訴權消滅ノ場合ニ於テ述ヘシ如ク証據ノ湮滅ト社會ノ遺忘トニ依ルモノナレモ罪ノ輕重ニ依リ特ニ証據上ノ必要アリ又タ社會遺忘ノ點ニ深淺厚薄アルモノナレハ犯罪ノ種類ニ依リ時効ニ長短ノ別アルモノナリ故ニ私訴ノ期限モ亦

タ此ノ區別ニ從フヘキモノトス

第卅一節 私訴ノ時効ハ公訴ノ時効ト其期間ヲ同フス
ル理由

第九條ニ私訴ノ時効ハ被害者無能カナルキ又ハ公訴ニ附帶セシメテ其訴ヲ爲シタルキト雖モ公訴ノ時効ト其期間ヲ同クストアリ而シテ其期間ヲ同一ニシタル理由ハ私訴モ亦タ一ノ犯罪ノ原由トスルモノナレハ已ニ社會ハ其犯罪ヲ遺忘シタルヲ以テ公訴權消滅シタリトスルニモ關ラズ他ノ一方ニアリテ再ヒ其犯罪ヲ社會ニ發露スルカ如キトアラハ前後其旨意ノ貫徹ヲ得サルノ結果ヲ來スヘシ故ニ公訴消滅スルキハ犯罪ニ原因スル私訴モ亦タ消滅スルハ當然ナリ且ツ私訴ハ犯罪ヲ原因トシテ申告スルモノナレハ國家ハ爲メニ容易ニ犯罪ヲ知ルノ便益アリ此理由ハ則チ公訴ト其期間ヲ同一ニシタル理由ノ一ナリトス

而シテ夫ノ從ハ主ニ從ヒ及ヒ證據湮滅トノ理由ハ未タ以テ刑ノ消滅理由トスルニ足ラサルナリ故ニ已ニ公訴ニ付キ刑ノ言渡アリタルキハ社會ハ之ヲ記念ニ止メテ忘却セサルヲ以テ民法ニ定メタル時効ノ例ニ從フヘキハ當然ナリトス

而シテ已ニ私訴ノ時効ヲ得タルキハ最早之ヲ取戻スノ途トキカロク否ラズ其犯罪前ニ已ニ所有權アルモノハ所有回復ノ權利ニ依リ三十年間ハ之ヲ請求スルヲ得此場合ニハ犯罪ノ原由トセスシテ所有權ヲ原由トシ只タ其犯罪ノ事實ヲ供用スルノミナリ

第卅二節 時効ノ期間ハ犯罪ノ性質ニ因リ起算點ヲ異ニス

時効ノ期限ハ即時犯ニ付テハ犯罪ノ日ヨリ起算シ繼續犯ニ付テハ最終ノ日ヨリ起算シ連續犯ニ付テハ議論一ナラズト雖モ我刑法ハ連續犯ヲ以テ一ノ繼續犯トシタルヲ以テ又最終ノ日ヨリ起算スルモノナリトス又慣行犯ニ付テハ最モ議論アリテ其說大別シテ三トスントモ著者ハ第一ノ所爲ト第二ノ所爲カ法律ニ定メタル時効ノ期間(三年)ニアルヲ要シルモノニシテ又最終ノ日ヨリ起算スヘキモノトス(本法第十條)

而シテ是レ等犯罪ノ何者タルニ至テハ刑法ニ屬スルモノナレハ之ヲ略ス

第卅三節 時効ヲ中斷スル條件及ヒ其中斷スル理由

(刑ノ時効ヲ除ク)

左ノ條件アリタルキハ時効ノ期間ヲ中斷スルモノトス(本法第十一條)

- 第一 起訴豫審又ハ公判ノ手續アルヲ
 - 第二 手續ノ適法ナルヲ
 - 第三 一定ノ期間ニ左ノ手續アルヲ
- 而シテ時効ヲ中斷スル理由ハ固ト時効ハ証憑ノ湮滅ト社會ノ遺忘トニ基クモノナリ然ルチ社會カ之ヲ遺忘セスシテ右ノ手續ヲ爲シタルキハ社會カ犯人ヲ忘却セサル証ナレハ已ニ經過シ來ル時間ヲ全ク無効ニ屬セシムルモノナリ之ヲ時効ノ中斷ト云フ故ニ此

時効ノ中斷アリタルハ唯タ其指名シタル被告人ニ對シテ時効ヲ中斷スルノミナラス未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ對シテモ又テ時効ヲ中斷スルモノナリ是レ中斷ノ効ハ其人ニ對スルニ非ラスシテ其ノ事件全体ニ干スルモノナレハナリ而シテ民事擔當人トハ明治十四年十二月第七十三號布告ヲ以テ定メラレタリ該布告文ニ曰ク民事擔當人トハ左ノ如シ

第一 未丁年者ノ父若シクハ母又ハ同居ノ親族ニシテ監督ヲ爲スモノ

第二 夫タルモノ

第三 白痴風癲者ノ保管者

第四 雇主

但シ雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行ヒタルトナレトモ民法實施後ハ民法ニ依ルヘキハ勿論ナリトス

第卅四節 中斷後ニ時効期間ノ起算方

時効期間ノ經過ヲ中斷シタルハ其處分以前及ヒ處分中ノ日數ハ時効ノ期限ニ算入スルヲ得ス但タ其處分ヲ止メタルハ更ニ其日ヨリ時効ノ期間ヲ起算スルヲ未タ中斷ナキトキト異ナルナシ

第卅五節 時効ノ中斷無効トナル場合及ヒ其例外

前已ニ述ヘタル如ク起訴豫審公判ノ手續ハ時効期間ノ經過ヲ中斷スル者ナリト雖モ是

レ又タ一概ニ論スヘカヲサルヲ以テ之ヲ二段ニ分チ無効ニ屬スル場合ト否トナ明ニスヘシ(本法第十二條)

第一 起訴豫審公判ノ手續規定ニ背反シタルニ因リ無効トナル場合ハ時効期間ノ經過ヲ中斷スルノ効ナキモノトス假令ハ檢事カ其重罪事件ナルヲ知テ豫審ヲ求メスシテ直ニ公判ニ付シタルカ如キ又豫審判事カ規定ニ違反シテ令狀ヲ發シ若シクハ之ヲ送達シタルカ如キ公判々事カ檢事書記ノ立會ナクシテ裁判言渡ヲナシタルカ如キ之レナリ之レ等ハ其手續無効ナレハ中斷ノ効モ又タ無効ナルハ當然ナリトス

第二 裁判ノ管轄違ニ因リ其手續無効トナリタルハ假令ハ地方裁判所ノ檢事犯罪事件輕罪ニシテ且ツ輕易ナルモノト思料シ直ニ其裁判所ニ公訴ヲ爲シタルニ審判中其重罪犯タルコトノ發覺シタルトキハ裁判所ハ豫審判事ニ送致スルノ決定ヲ爲サハルヘカラス即チ此場合ニ於テハ其經過ヲ來リタル起訴公判ノ手續共ニ無効ナルヘシト雖モ時効期間ノ經過ヲ中斷スル妨ケトナラサルナリ是レ裁判管轄ハ初メヨリ必ス確定ノモノニアラスシテ檢事又ハ判事ト雖モ屢々其管轄ヲ誤ルヲアレハ特ニ例外ヲ設ケタル所以ナリトス

第三十六節

被告人ハ免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキ告訴
告發人又ハ民事原告人ニ對シ 反訴(損害
賠償)ヲ爲スヲ得ル場合

第十三條ニ曰ク被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルハ是等ノモノニ對シ損害賠償ヲ求ムルヲ得トアリ

凡ソ法律ハ勿論人トノ原則ヨリ出テ何人ト雖モ已レノ所爲ヲ以テ他人ニ損害ヲ加ヘタルトキハ必ス之ヲ償ハサルヘカラス其損害ヲ受ケタルモノハ之ヲ償ハシムルノ權利アリ刑事ノ被告人タルトキト雖モ免訴無罪ノ言渡ヲ受ケタルハ勿論刑ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖モ過實ノ申立ヲナシタル等ニ依リ濫リニ他人ノ爲メニ損害ヲ被ルヘキ等ナシ荷モ損害ヲ受ケタルモノハ之ヲ償ハシムルノ權利アルヘク之ヲ加ヘタルモノハ之ヲ償フノ義務アルヘキハ亦タ一般ノ場合ト異ナルコトナシ是ヲ以テ被告人若シ告訴告發ノ過實ノ申立ニ因ルカ又ハ全ク根據ナキ申告ニ依テ過實ヲ被リタルハ之レニ對シ告訴ヲナシ又タ併セテ反訴ヲ以テ損害ヲ請求スルヲ得ヘキモノトス

茲ニ一言スルコトハ惡意ト重キ過失ノ區別是ナリ惡意ニ出ルトキハ刑事上ノ責任ト民事上ノ責任トヲ償フヘシ即チ刑事上ノ責任トハ誣告罪刑三五五ニ開擬セラレ民事上ノ責任トハ誣告ヲ爲シタルカタクメ生シタル損害ヲ償ハサルヘカラサルカ如シ重キ過失トハ惡意ナリト認ムヘキモノニアラサルモ疎誤懈怠ノ最モ重キモノ假令ハ雇人ニ金員ヲ渡シタルニ其命シタル用向ノ速カナラサルヲ憤リ恐クハ費消シタルナラント速斷シテ告訴シタルカ如キ即チ之レナリ此場合ニハ誣告罪ハ惡意ヲ要セスシテ故意ヲ以テ足

ルトスル説ニ從ヘハ重過失モ亦タ刑法ノ責任ヲ免ル、コトヲ得ス去レトモ是等ハ刑法ニ屬スル問題ナレハ茲ニ略ス

第二十七節

被告人無罪ノ判決ヲ受クルモ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ザル人及其理由

左ニ列記スル官吏ニ對シテハ假令ヒ被告人無罪又ハ免訴ノ判決ヲ受クルモ要償ヲ爲スコトヲ得ス但法文免訴ノ文字ナシ

- 一 判事
- 二 檢事
- 三 裁判所書記
- 四 執達吏
- 五 司法警察官
- 六 巡查
- 七 憲兵將校下士卒

凡ソ官吏タルモノハ司法ト行政ト中間ハ法律規則ノ規定ト上官ノ命令ニ依リ其範圍内ニ於テハ充分ニ其職ヲ行フヲ得ヘキ權利義務ヲ有ス故ニ緊急ノ場合ニハ公益ヲ保持スル爲メ一己人ノ私益ヲ害スルニ於テ片時モ躊躇セサルコトアリ此處分特ニ檢事又ハ司法警察官ニ於テ之ヲ見ル然ルニ此等ノ官吏及ヒ前列記ノ官吏ノ總テハ其職務ニ付特ニ六ヶ敷規定等アリ且ツ是レ等ノ官吏ハ尙ホ人類ノ一部ナレハ固ヨリ失誤ナキ能ハス此ノ失誤アル毎ニ常人ノ如ク容易ニ賠償ヲ求ムルヲ得ヘシトスルハ只タ其失誤ナキニ汲々トシテ活潑ナル職務ノ運動ヲ爲ス能ハス故ニ第十四條ニ於テハ以上列記スル官吏ニハ疎慮懈怠等ヨリ生シタル場合ニ於テハ其損害賠償ノ責務ヲ負ハシメサルコトトセ

第三十八節 以上ノ官吏ト雖ヒ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ル場合

以上ノ官吏ハ其職務ニ依リ爲シタルコトニ付テハ自己ノ責任如何ト同時ニ威權ノ濫用ニ依テ一己人ノ權利ヲ害サ、ルコトヲ記憶セサルヘカラス特ニ檢事司法警察官及ヒ巡查憲兵卒ニ至テハ常ニ直接ニ公衆ニ接スルコト多キモノナレハ深ク慎テ威權ヲ濫用スルナキヲ要ス況ンヤ左ノ場合ニ於テハ以上ノ官吏ト雖ヒ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ルノミナラス刑法ノ責モ亦タ免ルヘカラスレハナリ

- 一 故意ヲ以テ被告人ニ損害ヲ加ヘタル時
- 二 官吏刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル時

第卅九節 期間ヲ計算スル方法

本法ニ於テ期間ヲ計算スル方法左ノ如シ

- (イ) 時ヲ以テ計算スルトキハ即時ヨリ起算ス
- (ロ) 日ヲ以テ計算スルモノハ初日ハ算入セスシテ其翌日ヨリ起算ス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入セス
- 但シ一ノ例外アリテ公訴私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス(刑ノ時効ハ刑法ニ依ル)
- (ハ) 一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テス

- (ニ) 一月ト稱スルハ三十日ヲ以テス
- (ホ) 一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第四十節 距離ノ遠近ニ從ヒ猶豫ヲ與フル割合

本法ニ於テ巨離ノ遠近ニ從ヒ猶豫ヲ與フル割合ハ左ノ如シ

- 一 海陸里程八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得
但シ三里以上ナル時モ亦タ同ヤ
 - 二 島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得
- 此ノ起算法及ヒ里程猶豫ハ種々ノ必要アリ特ニ時効上訴及ヒ令狀執行等ニ於テ最モ其實用ヲ感スヘキナリ(本法第十六條)

第四十一節 訴訟關係人及ヒ管轄裁判所地内ニ假住居ヲ定ムル理由

訴訟關係人トハ訴訟ニ依リテ利害ノ關係アルモノヲ云フ假令ハ檢事被告人民事原告人民事擔當人等是レナリ証人鑑定人通事告訴人告發人事實參考人等ハ訴訟ノ利害ニ關係ナキヲ以テ訴訟關係人ニアラサルナリ

原告ハ訴ヲナシタルキヨリ被告ハ訴ヲ受ケタルキヨリ(檢事ハ例外ナリ)裁判所所在ノ地ニ本住所ヲ有スルモノハ格別若シ有セサルモノハ其地ニ假リニ住所ヲ定メ書記局ニ届ケ置カサルヘカラス是レ書類ヲ送達セシムルニ便ナルノミナラス訴訟人費ヲ減却セ

シメ事實ヲ迅速ナラシメシカテメノ便アリ但シ假住居ヲ定ムルハ重モニ書類送達ヲ便ニスルタメナレハ本人ハ現住スルト否トニ關セサルモ又訴訟關係人ハ此規定ニ背キ假住居ヲ定メサルトキハ書類ノ送達ヲシト雖モ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ許サス(本法第十七條)

第四拾二節 書類送達

刑事訴訟ノ書類送達方ハ本法ニ於テ別ニ規定ナキトキハ民事訴訟法第三百三十六條乃至百五十八條ノ規定ニ從ヒ裁判所書記之ヲ擔任ス而シテ裁判所書記ハ執達吏ニ委任シテ送達スヘキモノトス特ニ明文ヲ以テ巡查ニ送達執行ヲ命シタルモノハ此ノ限ニ非ラス尙ホ詳細ハ民事訴訟法ニ就キ見ルヘシ(本法第十九條)

第四十三節 訴訟書類ノ公正ヲ維持スル方式

訴訟書類トハ調書令狀呼出狀公判始末書言渡及ヒ上訴申立書趣意書答辨書等ニシテ之レ等ノ書類ノ公正ヲ維持スルニ付テハ左ノ各項ヲ守ラサルヘカラス若シ此規定ヲ守テサルコ於テハ其効力ナキモノトス(本法第二十條全第二十一條)

- 第一 官吏公吏人民共ニ守ルヘキ規則ハ左ノ如シ
- (イ) 文書ハ改竄スヘカラサルコト(假令ハ文字ノ字ヲ丈ノ字ニ改ムルカ如シ)
- (ロ) 文字ノ押入削除又ハ欄外ニ記入シタルキハ其所ヘ捺印スルコト
- (ハ) 文字ノ削除ハ讀ミ得ヘキ爲メ字体ヲ遺存シ唯タ其削除ノ數ヲ記シ捺印スルコト

ト(例令ハ何々ノ何字ヲ削除スト記スルカ如シ)

(ニ) 二枚已上ニ達スルキハ毎葉ニ契印スルコト

第二 官吏公吏ノ字ルヘキ規則ハ左ノ如シ

- (イ) 所屬官公署ノ印ヲ用ユルコト 但シ用ユルコト能ハサルキハ其理由ヲ附記スヘシ
- (ロ) 年月日場所(假令ハ何裁判所ト云フカ如シ)ヲ記載シ署名捺印スルコト

第三 人民ノ守ルヘキ規則ハ左ノ如シ
(イ) 自ラ署名捺印スルコト 但シ之ヲ爲シ得ハサルキハ其理由
(ロ) 年月日ヲ記載スルコト

第四十四節 刑事訴訟法効力ハ既往ニ及フコトヲ得ル理由

本法第二十二條ニ曰ク此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用スト之レ刑法第三條ト異ナル點ナリ何故ニ刑事訴訟ノ手續ハ既往ニモ効力アルカト云フニ固ト刑法ハ罪ト刑トヲ定メタルモノナレハ之ヲ既往ノ事件ニ及ホスモノトスルトキハ人身ノ自由ヲ妨ケ既ニ得ル權利ヲ害スルニ至ル故ニ刑法ニ於テハ之ヲ許サスト雖モ刑事訴訟法ハ訴訟手續ヲ定メタルモノナレハ之ヲ既往ニ溯ルモ毫モ既得ノ權利ヲ害スル等ノコトナク概シテ新法ハ舊法ノ不備ナル所ヲ増補改正シタルモノナレハ却テ公私ノ便益トナ

ルモノナリ之ヲ以テ刑事訴訟ノ手續ハ夫ノ法律ハ既往ニ遡ラス(法例二條)トノ例外ニシテ既往ニモ及ホスコトナ許シタル所以ナリ

第四十五節 刑事訴訟法ノ及フヘキ範圍

本総則ヲ終ルコ臨テ一言スヘキハ本法ノ及フヘキ範圍是ナリ即チ本法第二十三條ニ此法律ハ陸海軍ニ干スル法律ヲ以テ處分スヘキモノニ適用スルヲ得ストアリ即チ陸軍ニハ陸軍治罪法アリ海軍ニハ海軍治罪法アリテ各其所ヲ取扱フモノナレハ是レ等即チ陸海軍犯罪ニハ此ノ法律ヲ適用セサルモノナリ

第二編 裁判所

第一章 裁判管轄

第一節 裁判管轄ノ區別

舊治罪法ニアリテハ犯罪ノ種類及ヒ犯罪ノ場所及ヒ逮捕地ヲ以テ管轄ノ原則トシタルモノ、如シ特ニ重罪裁判所又ハ高等法院等ノ設ケアリ而ルニ訴訟法ニ於テハ此管轄ニ於テ特ニ著シキ變更ヲ見ル即チ裁判ノ管轄ヲ左ノ如ク區別スルヲ得ルニ似タリ

第一 犯罪ノ種類ニ依ル裁判管轄

(イ) 重罪ハ地方裁判所

(ロ) 輕罪ハ地方裁判所又ハ區裁判所

(ハ) 違警罪ハ區裁判所

但シ現今違警罪ハ即決例ノ行ハル、カ故ニ一旦警察(本分)署又ハ憲兵設置アル地方ニ於テハ同署ノ即決裁判ヲ受ケタル後ニアラサレハ區裁判所又ハ軍法會議ノ正式裁判ヲ受クル場合ナキモノトス

第二 場所ノ區別ニ依ル裁判管轄以下第四

(イ) 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地(本法第二十六條)

(ロ) 數個ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタ

ル裁判所(本法第二十七條)

第三 外國ニ於テ犯罪シタル犯罪ノ裁判管轄

(イ) 内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス(本法第二十九條)

(ロ) 外國ヨリ送致シタルキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス(全上)

(ハ) 欠席判決ニ付テハ被告人最後ノ住所ノ地ヲ以テ其管轄ナリトス(全上)

第四 海船内ノ犯罪ニ付テハ管轄ハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ着船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス(本法第三十條)

第五 特別管轄

(イ) 皇族ニ對スル重罪及ヒ國事ニ關スル重罪及ヒ皇族ノ犯シタル禁錮以上ノ犯罪ニ付テハ大審院之レカ管轄ナリトス

(ロ) 皇族ノ犯シタル犯罪ニ付テハ其正犯從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院之レカ管轄スルモノトス

(ハ) 從犯ハ正犯ニ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又數個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス(本法第二十八條)

此第五ノ場合ニ特別管轄ヲ定メタルハ被害人ノ自分犯罪ノ性質常人ニ異ナルヲ以

テ特ニ其取扱ヲ鄭重ニシタルモノニシテ敢テ偏頗ノ意ニ出テタルニ非ス却テ其裁判ノ正當ヲ得ンカ爲メナリトス而シテ從犯ハ正犯ノ管轄ニ屬シ又ハ正犯數人ノ場合ノ如キハ便宜上ノ利害ニ出テタルモノナリ

第二節 公安又ハ嫌疑ノタメ裁判管轄ヲ移ス場合

第一 公安ノタメ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス場合ハ左ニ

(イ) 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐レアルキ(本法第三十四條)

第二 嫌疑ノタメ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス場合

(イ) 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサル恐レアルトキ(本法第三十六條)

第一ノ場合ハ司法大臣ノ命ニ依リ大審院ノ檢事總長之レテ其院ニ申立第二ノ場合ハ管轄裁判所ノ檢事又ハ訴訟關係人之レテ上級裁判所ニ申立ツルモノトス

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避回避

第一節 裁判所職員ヲ除斥シ又ハ忌避回避スル場合及其理由

其理由

第一 判事法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ハ左ノ如シ(本法第四十條)
一 判事被害者ナルキ之レ判事ハ公平無私ノ裁判ヲ爲スモノナレハ訴訟關係人若ク

ハ其事件ニ關係ヲ有セザル局外者ナラサルヘカラス然ルニ若シ判事自ラ被害者タルトキ判事ハ自ラ訴ヘテ自ラ裁判スルモノナレハ其裁判ハ公平無私ナリト云フニ於テ疑ナキ能ハス縱令正當ナリトスルモ社會ヨリ嫌疑ヲ蒙ルハ免カルヘカラスモノナリ果シテ然ルトキハ裁判ノ威嚴ヲ保持スル能ハス之レ法律上其職務ノ執行ヨリ除斥セラル、所以ナリ

二 判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是レ等ノモノト親屬ナルキ 此場合ハ判事カ訴訟關係人ニ非ラサルモ親屬姻族ノ關係スルモノナレハ或ハ其間ニ私情ヲ狹抱シテ不正ノ裁判ヲ爲スヤノ嫌疑ヲ免カルヘカラスモノナルヲ以テ亦タ法律上其職務ヨリ除斥セラル、モノナリ且ツ法律ハ親族ニ付テハ婚姻ヲ解除シタル後ト雖モ之レヲ除斥スルコトセリ

三 判事其事件ニ付キ鑑定人トナリタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上ノ代理人ナルトキ モト判事ハ蒐集シタル數多ノ證據ヲ以テ裁判スルモノナリ然ルニ証人鑑定人ノ供述モ證據中ノ一ナレハ若シ判事其事件ニ付キ鑑定人トナリタルトキハ證據トナルヘキ申立ヲナシテ自ラ裁判ヲ爲スト一般ナリ又判事カ被告人若クハ被害者ノ法律上ノ代理人ナルトキハ其親族タル場合ノ如ク公平無私正當ノ裁判ナリト云フニ於テ躊躇スヘキモノアリ之レ法律上其職務ヨリ除斥セラル、モノトス

四 判事其事件ノ予審終結ニ關與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ關與シタ

ルトキ同一ノ事件ニ付テハ再ヒ同一ノ判事ニ裁判ヲ受クヘカラスハ訴訟法ノ原則ナリトス何ントナレハ判事一タヒ裁判ヲ爲ス片ハ二タヒ其事件ノ裁判ヲ爲スモ前判決カ最早先入シテ自分ノ意見ハ始終變更スヘキモノニアラサルハ常体ナリ故ニ豫審ノ決定ニ關與シタル判事ハ其事件ノ公判及ヒ上訴裁判ニ關涉スルヲ許サ、ルモノトス之レ法律上其職務ヨリ除斥セラル、モノトス而シテ前審トハ第一審ト第二審トヲ包含シタルモノニシテ第一審ノ裁判ハ第二審ノ裁判ニ對シテハ前審ナリ第二審ノ裁判ハ第三審上告ノ裁判ニ對シテハ亦前審ナリトス假令ハ區裁判所ノ判決ニ對シ不服ヲ地方裁判所ニ申立タルトキノ如キハ區裁判所ノ判決ハ地方裁判所ニ對スル前審ナリ而シテ豫審ト公判トヲ問ハス只タ其取調ヲナシタルノミニシテ未タ判決ヲナサ、ルキハ此制限ニ入ラサルモノトス

第二 檢事其他訴訟關係人ヨリ忌避スルコトヲ得ル場合ハ左ノ如シ(本法第四十一條)

- 一 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルヘキ事情アルトキ即チ前項除斥ノ場合例ヘハ判事カ原被告ナルトキノ如シ
- 二 判事偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ルヘキ事情アルキ例ヘハ被告人若クハ被害者ト判事ト口夕相往來スルカ或ハ親友ナルトキ被告人又ハ被害者ヨリ贈物ヲ收受シ又ハ收受ヲ聽許シタル場合ノ如シ此場合ニハ其裁判ノ偏頗ナルヲ疑フニ足ルヘケレハ之レニ忌避ノ申立ヲ許シタルモノナリ

第三 判事自ら回避ノ申立ヲ爲スヘキ場合ハ左ノ如シ

一 判事自ら除斥ノ原因アルヲ認メタル件

二 其他判事自ら回避スベキモノト思料シタル件

以下除斥及ヒ忌避回避ノ如何ナルモノヤチ陳ントス

除斥トハ裁判所職員ヲ公平無私正當ノ裁判ヲ爲スニ必要ナル獨立無私ノ自由ヲ支障スル情狀アルカクメ法律上當然其職務ノ執行ヨリ排除セラル、チ云フ故ニ除斥ノ原因アルハ訴訟ノ程度ノ如何ニ關セス之レヲ申立ルコトヲ得ヘシ

忌避トハ或ル情狀アルカ爲ノ裁判所職員ヲ其職務ノ執行ヨリ脫離セシメテ檢事其他訴訟關係人ヨリ申請スルヲ得ヘキモノナルモ其理由ノ如何ニ依テ除斥ト同シク何時モ之レヲ申立ルヲ得ヘキモノト否ラサルモノ即チ偏頗ノ疑ヒアル場合ニハ之レヲ申請セスシテ辨論等ヲナシタルハ最早申立ヲ得サルモノトス而シテ其詳細ナルハ民事訴訟法第三十四條ニ依ルヘキモノトス此忌避申立ノ効果トシテ公判ニテハ之レヲ停止シ豫審ニテハ之レヲ停止セスト雖モ其急要ナラサルモノハ之レヲ停止スルモ法律ノ禁スル所ニ非ラス

回避トハ或ル情狀アルカクメ裁判所職員カ自ら其職務ノ執行ヨリ脫離セシメテ申立ツルヲ云フ

此規定ヲ設ケタルハ是レ實ニ判事ヲシテ公平無私正當ノ裁判ヲ爲サシメ且ツ裁判所ノ

信用ヲシテ益々確固ナラシメンカクメナリ而シテ以上三ケノ場合ハ裁判所書記ニモ準用スルヲ得ヘキハ第四十四條ノ明言スル所ナリ然ルニ檢事ニ付テハ何ノ爲メニ之レヲ準用スルヲ得サルヤ曰ク舊治罪法第二百四十五條ニハ特ニ明文ヲ以テ之レヲ揭示シタルモ本法ニハ之ヲ删除シタルハ之レヲ準用スルヲ許シタルモノニ非スシテ明文ヲ要セサル故ニ之レヲ删除シタルモノナリ何ントナレハ檢事ハ社會國家ノタメニ公益ヲ維持スルモノナレト訴訟人トシテ法廷ニ出ツルモノニシテ縱令ヒ如何ナル關係ヲ以テ辨論ヲ爲スモ裁判官ハ之レニ從フノ義務ナキモノナレハ裁判官ニシテ確實不動ナルトキハ之レカクメニ其裁判ノ正鵠ヲ誤マルノ恐レナシ是レ檢事ニ準用セサル理由ニシテ明文ヲ待テ後チ之レヲ知ルモノニ非ラサルナリ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第一節 捜査ノ目的

捜査トハ犯ハ及ヒ犯罪ノ証憑ヲ搜索シ公訴ノ提起及ヒ實行ニ供スヘキコトヲ目的トスルモノニシテ尙ホ之レヲ詳言スレハ犯罪ノ原由性質方法情狀日時場所被害ノ形狀被告人ノ氏名年齢職業住所身分品行前科ノ有無及ヒ證人鑑定人ノ誰タルコト其他證憑トナルヘキ一切ノ事物ヲ取調ヘ以テ公訴ヲ提起實行スルニ必要ナル資料ヲ蒐集スルヲ目的トスルモノナリ而シテ此ノ目的ヲ遂ントスルニハ特ニ左ノ事項ニ注意スルヲ要ス(イ)被告人ノ人違ナキ(ロ)刑律ニ違背シタル所爲ノ成立シタルヤ否ヤ(ハ)被告人ハ果シテ其ノ所爲ニ依リテ刑罰ヲ受クヘキモノナルヤ否ヤ(ニ)等之ナリ

第二節 捜査權ノ發動

捜査權ハ公訴權ト存廢消長ヲ共ニスルモノニシテ其發動スルヤ實ニ犯罪成立ノ時ニアリテ公訴權ノ發動ト其時期ヲ同フス是レ其公訴權執行ニ關スル權利ナレハナリ

第三節 捜査權ト公訴權トノ關係

捜査權ト公訴權トハ形影相件フテ須臾モ相離ル、コトナシ即チ公訴權ノ發生スルヤ捜査權モ發生シ公訴權停止スルヤ捜査權モ共ニ停止ス公訴權ノ消滅スルヤ捜査權モ亦消滅スルモノナリ而シテ公訴權ハ國家ノ刑罰權ヲ執行スル權利ニシテ捜査權ハ公訴權ヲ執行スルニ付テノ權利ナリ然レモ夫ノ家宅搜索物件差押ノ如キ豫審ニ屬スル處分ト混全スヘカラス而シテ捜査權ハ一ニ司法警察ノ範圍ニシテ搜索權ハ既ニ豫審處分ナリ其詳細ハ別ニ司法警察ノ權限ノ部ニ於テ之レヲ陳ヘントス

第四節 司法警察ノ目的及其權限

本頁ニ入ルニ先テ警察ノ何モノナルヲ説クハ敢ヘテ贅事ニ非ラサルヲ信シ即チ警察權ハ行政權ノ一部ニシテ内務行政ノ部内ニ屬ス今之ヲ分テ行政警察司法警察ノ二ト爲ス行政警察ハ危害ノ未タ生セサルニ當リテ之レヲ豫防スルヲ以テ目的トスルモノニシテ警察ノ本分タル性質ナリ而シテ其目的ヲ達スル爲メニハ別ニ非常權ナルモノアリテ社會ノ安寧秩序ヲ維持スルニ於テ至大ノ關係ヲ有ス去レトモ其詳細ハ警察法ノ範圍ナレハ之レヲ此ニ略ス司法警察ハ其目的ノ危害已ニ生シタル後チニ於テ之レヲ除去スルニアリテ嚴格ニ之レヲ云フトキハ最早警察ノ本分ナキモノナリ故ニ行政警察ハ一ニ之レヲ豫防警察ト云ヒ司法警察ハ一ニ之レヲ除去警察ト云フ而シテ犯罪既發ノ後チニ於テ之レヲ捜査スルハ司法警察即チ除去警察ノ部項ニ屬ス

司法警察ノ目的ハ犯罪ノ証憑及ヒ犯人ヲ捜査シ公訴ノ提起實行ノ資料ニ供スルニアリ即チ本法第四十六條ニ檢事ハ犯罪アルヲ認知シ又ハ思量シタルキハ其証憑及ヒ犯人ヲ捜査スヘシトアリ又タ舊治罪法第九十二條ニモ同一ノ文意アリ而シテ檢事ハ國家ノ代

表者ニシテ公訴權執行ノ任アルモノナレハ此司法警察ノ主眼タル犯罪ノ捜査ハ檢事ノ
 主重ナル任務ノ一ナリトス
 然リ而シテ司法警察ノ權限即チ範圍ハ如何ナル程度マテ及フヤトハ必要ノ問題ニシテ
 若シ之レテ輕忽ニ觀過スルキハ其害ヤ亦タ一樣ナラサルモノアラフ檢事及ヒ他ノ司法
 警察官タルモノ深ク此ニ意ヲ留メサルヘカラス又司法警察官ノ手足タル巡査及憲兵
 卒ト雖モ必ラスヤ輕々視シ去ルヘカラス則チ司法警察ノ權限ヲ知ラントセハ先ツ其目
 的タル捜査權ノ何タルヲ知ラサルヘカラス而シテ捜査權ノ何タルハ前既ニ述ヘタル如ク
 公訴ヲ提起實行スヘキ資料ニ付キ査察スヘキモノニシテ夫ノ豫審處分ニ屬スヘキ身
 体拘束(人身自由ノ制限) 家宅侵入(家宅ノ靜安權ノ制限即チ戸主又ハ戶主ニ代ルヘ) 物件差押(所有權ノ侵
主又ハ保管者ノ承諾ヲ要ス) 及ホスコトヲ得スシテ例ヘハ犯人ノ坐作進退ノ模樣ヲ觀察シ又
 ハ其衣服ノ贓品ニ非ラサルナキヤ否ヤ或ル事變ハ天災ニ原因セシテ何某ノ所爲ニ非
 ラサルナキカ又ハ何某ハ犯人ニ非ラサルカ等凡テ主觀的ノ運動作用ニ出テサルヘガラ
 ス若シ否ラスシテ前例ニ於ケル坐作進退ノ怪シキノミヲ以テ直チニ犯人トシテ之レヲ
 逮捕シ又ハ身体ヲ搜索スルカ如キハ司法警察ノ處分ニ非スシテ豫審處分ナリトス故ニ
 例ヘハ漁車内ニ於テ物品ヲ竊取セラレタルモノアルニ際シ司法警察官ハ其乗合中ノ凡
 テノ人ノ身体ヲ搜索スルヲ得ス況ンヤ巡査憲兵卒タルモノヲ然レトモ是等ノ場合ニ
 ハ別ニ行政警察權ナルモノアレハ臨機處分ヲ爲スヲ得ヘキハ勿論ナリトス

要之司法警察ノ權限トハ犯罪ヲ捜査スルニ止マリテ豫審處分ノ範圍以外ニアルモノナ
 レハ各人各己ノ權限ヲ害スルヲ得サルモノトス然レトモ現行犯ノ場合ニハ其處分ノ速
 ナルヲ要スルヲ以テ法律カ特ニ之レカ例外ヲ設ケタレハ司法警察ノ職權モ亦タ其原則
 ノ範圍ヲ起ルヲ得巡査憲兵卒ノ職權ニ付テ亦然リトス

**第五節 司法警察ノ職務ヲ執行スル者ニ專務官ト兼務
 官ト補佐官ノ區別**

犯罪ノ捜査ハ司法警察ノ職務ナルコトハ前已ニ述ヘタリ今此職務ヲ執行スルモノヲ揭
 ケレハ左ノ如シ

第一 司法警察ノ職務ヲ執ル專務官トハ即チ左ノ如シ

一 大審院ノ檢事總長(本法第三百十條參照) 裁判所構成法第五十條第二項同第五十
 六條參照)

二 控訴院ノ檢事長及檢事(裁判所構成法第四十二條第八十三條參照)

三 地方裁判所ノ檢事正及檢事(裁判所構成法第三十三條本法第四十三條參照)

四 區裁判所ノ檢事(裁判所構成法第十八條本法第四十三條參照)

第二 司法警察ノ職務ヲ執ル兼務官ハ即チ左ノ如シ但シ其管轄地内ニテ地方裁判所檢
 事ト同一ノ職權ヲ行フコトヲ得ルト雖モ若シ檢事其場合ニ臨ミタルキハ之レヲ檢事
 ニ讓テサルヘカラス之レ兼務官タルヲ以テナリ(本法第四十七條參照)

一 警視總監及府縣知事（東京府知事ヲ除ク）

第三 司法警察官トシテ檢事及府縣知事警視總監ノ補佐官ハ即チ左ノ如シ（東京府知事ヲ除ク）（本法第四十七條參照）

一 警視警部長警部

二 憲兵將校下士

三 島司

四 郡長

五 林務官

六 市町村長

以上列記セル補佐官ニモ專務官ト兼務官トアリ即チ一ヨリニマテノ官吏ハ專務官ニテ三ヨリ六マテハ兼務官ナレハ若シ其場合ニ臨ミタルキハ兼務官ハ其職務ヲ專務官ニ讓ルニ至當ナリトス

第六節 特別司法警察官

特別司法警察官トハ即チ左ノ如シ

一 海船内ノ船長（本法第四十八條參照）

二 樺戸空知訓路集治監ノ典獄（裁判所構成法實施條例第十四條參照）

三 小笠原島及伊豆七島ノ島吏（全上法第十二條參照）

四 清國朝鮮國駐在官吏（明治廿一年勅令第七十一號及領事裁判規則參照）

第七節 捜査着手ノ原由

凡ソ捜査ニ着手スルニハ必ラス法律上適法ノ原由ニ因リテ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタル場合ニ限ラサルヘカラス若シ然ラスシテ妄リニ犯罪アルヘシト豫想シ隱密探偵等ヲ爲スニ於テハ或ハ社會公安ヲ妨ク或ハ各人ノ名譽ヲ害スル等ノ弊アルヘキヲ以テ司法警察ノ事務ニ當ルモノハ宜シク注意スヘキ所ナリ而シテ捜査着手適法ノ原因ニハ種々アレバ第四十六條ニハ告訴發現行犯其他ノ原因云々トアリテ法律ハ只々二三ノ例ヲ示シタルレ決シテ二三ノ原由ニ限ルモノニアラス之レヲ舉レハ概チ左ノ如シ（第四十六條參照）

一 告訴

二 告發

三 現行犯准現行犯

四 自首

五 新聞

六 風演說

七 變死

八 創傷

九 隱匿物件

第八節

司法警察ノ職務ヲ執ル者ノ中公訴ノ提起實行
ヲ爲ス得ヘキモノト否ラサルモノトノ區別

第一 公訴ノ提起及ヒ實行ヲ爲スヲ得ヘキモノ左ノ如シ

一 檢事總長

二 檢事長

三 檢事正

四 檢事

以上ノ官吏ハ獨リ司法警察ノ職務即チ犯人及ヒ罪證ノ搜查ハ勿論各自法律ニ定メタル
區別ニ從ヒ國家ノ代表者トナリテ公訴ノ提起及ヒ實行ヲ爲ス權限ヲ有スルモノナリ

第二 司法警察ノ職務即チ搜查權ノミヲ有スルモノハ左ニ

一 警視總監府縣知事 (東京府知事ヲ除ク)

二 警視警部長警部

三 憲兵將校下士

四 郡長

五 島吏

六 林務官

七 市町村長

八 海船内ノ船長

九 特別司法警察官

以上ノ官吏ハ犯罪ノ搜查ニ付テハ檢事ト異ナル處ナシト雖モ原告タル資格ナクハ自
ラ公訴ヲ爲ス權利アルコトナシ故ニ其搜查ニ因リテ得タル証憑及ヒ被告人ハ之レヲ檢
事ニ送致スルニ止マルモノナレハ其實檢事カ公訴ノ提起實行ヲ爲スノ資料ニ供スルモ
ノタルニ過キサルナリ

第九節

司法警察ノ處分ヲ爲スニ當リ公力ト若クハ兵
力ヲ要求スルコトヲ得ル場合

司法警察ノ職務ヲ行フニ際シ必要トスルルハ警察本分署又ハ憲兵屯所ニ照會シテ巡查
憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得若シ時機緊急ナルルハ直チニ巡查憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得
ヘキナリ時機緊急事件重要ニ涉ルルハ(兇徒嘯集罪ノ如キ)鎮台又ハ分營ニ照會シテ兵
力ヲ要求スルコトヲ得ヘシ其要求書ニハ可成犯罪ノ性質被告人ノ員數所在地及ヒ携帶
スル兇器ノ種類等ヲ記載スルヲ要ス但シ兵力ヲ要求シタル司法警察官タル者ハ直接ニ
兵力ヲ指揮命令スルコトヲ得スト雖モ其處分ヲ爲ス方法ニ付テハ指揮官ト協議ヲ爲スコ
トヲ得ヘシ(明治十四年九月布告第八拾二號及同年十二月司法省丙第十五號參照)

第十節

搜查着手ノ心得

- 一 犯罪アレハ必ラス捜査權アリ然レモ其實行ニ至リテハ事ノ輕重ニ因リ寬嚴其度ニ適セサルヘカラス故ニ犯罪アルコトヲ認知思料スルモ先ツ其全体ヲ通觀シ其關係ヲ熟察シ事實適當ノ處分ヲ爲スヘシ
- 二 人ノ内事ニ關シ若クハ親屬間ニ生スル犯罪又ハ輕微ナル犯罪ニシテ其害一般ニ及ハサルモ一概ニ之レヲ檢摘スルハ却ツテ安寧風俗ヲ害スルコトアルニヨリ其土地民情等ヲ熟察シ捜査ヲ爲スト否トヲ定ムヘシ
- 三 司法警察ハ専ラ奸惡ヲ摘發シ公害ヲ除去スルコトニ着眼スヘシ唯モ犯罪ヲ舉示スルコトノ多數ナルヲ以テ其職務ヲ盡スモノト爲スヘカラス
- 四 奸惡ノ徒ハ巧ミニ法網ヲ脱スルコトヲ圖ルモノニシテ無智ノ細民知ラスシテ法律ニ觸ル、ノ比ニアラス宜シク其犯情ヲ看破スルコトニ注意スヘシ
- 五 皇族ニ對スル犯罪ノ如キハ固ヨリ之レヲ嚴罰セサルヘカラスト雖モ其情實ヲ精査セシ濫リニ之レヲ檢舉スルハ却ツテ爲メニ法律ノ威嚴ヲ減スルコトアリ……………
- 六 國事ニ關スル罪ハ能ク其機期ヲ察知シ隱謀又ハ豫備中ニ防制スルヲ要ス然レモ其隱謀ニ係ルモノ、如キハ証憑ヲ得ル極メテ難シ若シ捜査ニ着手シテ証憑ヲ得サルトキハ却ツテ不良ノ結果ヲ生スルニ因リ輕忽ニ人ノ身体財産ニ對スル處分ヲ爲スヘカラス

- 七 官吏ノ犯罪ノ如キハ固ヨリ寬假スヘカラス然トモ捜査處分其當ヲ得サルモハ施政上妨害ヲ生スルコトアルヲ以テ被告人官等ノ高下事件ノ大小ニ關ラズ充分ノ注意ヲ爲スヘシ
 - 八 外國人ノ犯罪ハ其處分ノ當否ニ因リ重大ノ關係ヲ生スルコトアルヲ以テ事件ノ大小ヲ問ハズ失誤ナキコトヲ勉メサルヘカラス(司法警察訓則第百十九條乃至第百廿四條參照)
- 第十一節 捜査着手後ノ心得**
- 一 犯罪ノ場所又ハ證憑物件所在ノ場所ニ臨檢スルコトヲ必要トスル場合ニ於テハ其處分ヲ爲スコトヲ得但人ノ邸宅内ニ係ルモ其戸主又ハ看守者ノ承諾アルヲ要ス
 - 二 犯罪ノ事實ヲ證明ス可キ物件ハ所有者又ハ保管者ノ承諾アル時ハ之レヲ預置スルコトヲ得
 - 三 官署公署内ニ於テ前二項ノ處分ヲ爲サントスルモ其長官ノ許諾ヲ得ルヲ要ス
 - 四 現行犯ト非現行犯トヲ問ハズ又臨檢シタル場合ト否トニ抱ラズ捜査上必要トスルモハ證人鑑定人及ヒ被告人ヲ呼出シ又ハ其所在ニ就キ取調ヲ爲スコトヲ得但シ宣誓ヲナサシムルヲ得サルハ固ヨリナリトス
 - 五 呼出チ爲スニハ報知書ヲ用フヘシ但時宜ニ因リ巡查憲兵卒又ハ小使等ヲシテ口達セシムルコト妨ケナシ

- 六 報知書ハ逕査憲兵卒又ハ小使等ヲシテ送達セシメ若クハ郵便ヲ以テ送致スヘシ
- 七 證人ヲ取調フルニハ宣誓ヲ用ヒス其陳述ハ錄取シ一件書類ニ添置クヘシ但事實單簡ナルカ又ハ本人ノ希望アルキハ手續書又ハ始末書ノ差出サシムルモ妨ケナシ
- 八 鑑定ヲ爲サシムルニハ宣誓ヲ用ヒス其結果ハ鑑定書ニ記載シ之レヲ差出サシムヘシ
- 九 物件ノ原形ヲ變スルニ非サレハ鑑定ヲ爲スコ能ハサル場合ニ於テ其物件重要ナル証憑ト爲ルヘキモノナルキハ捜査上鑑定ヲ爲サシム可ラス但シ腐敗其他ノ原因ニ因リ其物件ヲ保存ス可カラサル時ハ此限リニアラス
- 十 捜査上被告人ヲ取調フルコト得ルト雖モ輕忽ニ着手スル時ハ人ノ名譽ヲ毀損シ又ハ被告人ノ逃亡証憑ノ湮滅ヲ招クノ恐れアリ宜シク犯罪ノ種類被告人ノ身分及ヒ情狀等ヲ斟酌ス可シ
- 十一 被告人ノ誰タルコト知り得サル場合ニ於テ之レヲ搜索スル方法ハ固ヨリ豫定シ難シト雖モ犯罪ノ方法遺留ノ物件等ニ因リ先ツ其所爲ノ巧拙被告人ノ職業及ヒ其員數等ヲ鑑別スルヲ緊要トス
- 十二 新聞風説其他古物商賣屋、兩替屋、旅店、割烹店、待合茶屋、遊船屋、湯屋、理髮店等ニ於テ被告人發見ノ端緒ヲ得ルコト少クナラサルヲ以テ之等モ注意スヘキモノナリ

第十二節 被告事件交付上ノ心得

- 第一 犯罪捜査ハ成ル可シ事件ノ大体ニ注意シ其要領ヲ得タルキハ左ノ各項ニ從ヒ被告事件交付ノ手續ヲ爲ス可シ但シ交付後ト雖モ仍ホ捜査ヲ爲スコト得ヘキノミナラス或ル場合ニ於テハ必スナスヘキ必要ナリ
 - 一 被告事件ヲ交付スル時ハ證據物件ヲ添ヒ且ツ參考ト爲ル可キ事項ヲ通知スヘシ
 - 二 司法警察官重罪輕罪ノ捜査ヲ爲シタルキハ速ニ其事件ヲ檢事ニ送致スヘシ但豫審判事ノ爲シタルキモ亦同シ
 - 三 檢事自ラ重罪輕罪ノ捜査ヲ爲シ又ハ其補佐タル司法警察官ヨリ其送致ヲ受ケタルキハ本法第六十二條ニ從ヒ相當ノ手續ヲ爲ス可シ
 - 四 違警罪ニ付テハ其捜査ヲ爲シタル者ヨリ直ニ所轄警察署ニ送致スヘシ
 - 五 陸海軍人軍屬ノ犯罪ニ係ルキハ其捜査ヲ爲シタルモノヨリ直チニ管轄法衙ノ檢事又ハ被告人ノ所屬長官ニ送致スヘシ但シ憲兵設置ノ地方ニ於テハ違警罪ニ限リ憲兵屯所ニ送致ス可シ
 - 六 軍人軍屬任官者シハ就役者先キニ罪ヲ犯シ在官現役中發覺シタル者又ハ歸休兵及ビ豫備後備ノ軍籍ニアル者召集中罪ヲ犯シ若シクハ舊罪發覺シタルモノハ亦前條ノ手續ニ從フヘシ
- 其在官現役中又ハ召集中罪ヲ犯シ免官免役者クハ解散ノ後發覺シタル者ハ常人ノ

例ニヨル

七 外國人ノ犯罪ニ付テハ其捜査ヲ爲シタルモノヨリ管轄領事廳所在ノ地ノ檢事ニ送致シ檢事ヨリ其領事廳ニ其處分ヲ請求スヘシ但シ領事廳所在ノ地方ニ於テハ其捜査ヲ爲シタル者ヨリ直チニ其處分ヲ請求スルコトヲ得朝鮮人及ヒ條約未濟國人ノ犯罪ニ係ルキハ第二項以下ノ手續ニヨルヘシ(司法警察官則第四百四十一條乃至第四百四十七條參照)

第十三節 巡查又ハ憲兵卒ハ司法警察官ニ非ラスト稱スルコト能ハサルヤ

巡查又ハ憲兵卒ハ決シテ司法警察官ト謂フヘキモノニアラス故ニ犯罪ノ捜査等ニ關シテハ只々其附屬トシテ運動スヘキモノナリ然レモ法律上公力ノ執行ヲ要スル事柄等ハ概チ巡查又ハ憲兵卒ノ力ニ係ルモノナリ假令ハ拘引狀勾留狀執行ノ如キ之レナリ然レトモ元來司法警察官タル資格ナケレハ自ラ告訴發覺ヲ受理スル等ノ職權ナキモノニシテ只々司法警察官ニ差出スヘキモ告訴發覺狀ヲ取次クコトヲ得ヘキノミ然レモ實際ニ於テハ司法警察官ナル檢事ハ他ノ補佐官ニ依テ捜査ヲナスガ如ク巡查憲兵卒セ他ノ司法警察官ノ手足ナレハ亦々司法警察官タルノ心得ナカルヘカラス況ンヤ一時代理ノ名義ヲ以テスルキハ尙ホ檢事ノ補佐官ナリトス

第十四節 告訴發覺ノ解

告訴トハ被害者自ラ犯罪事件ヲ相當官ニ申告スルコトイヒ發覺トハ被害者ニアラサル者

即チ第三者ヨリ犯罪事件ヲ相當官吏ニ申告スルモノヲ云フ

第十五節 告訴スルコトヲ得ヘキ者

法文ニ曰ク何人ニ限ラス云々告訴スルコトヲ得ト故ニ男子タルト女子タルト未丁年者タルト丁年者タルト無能力者タルト能力者タルト日本人タルト外國人タルトハ苟シクモ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタルモノ即チ被害者ハ自ラ告訴ヲ爲シ又ハ代人ニ委任シテ告訴スルコトヲ得又或ル場合ニ於テハ親屬モ亦々告訴ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ發覺ニ付テモ亦々然リ是レ告訴發覺ハ只々犯罪事實ヲ申告スルノミナレハナリ故ニ民事原告人トナルノ申立ト大ニ異レリ(本法第四十九條)

第十六節 告訴發覺ヲ受クヘキ管轄官吏

第一 告訴ヲ受クヘキ管轄官吏ハ左ノ如シ(本法第四十九條)
(イ) 重罪輕罪違警罪トテ問ハス犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官

舊治罪法第九十三條ニハ違警罪ニ付テハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地區裁判所ノ檢事又ハ司法警察官云々ノ明文アルモ本法ハ既ニ犯罪云々ト汎博ナル文字アレハ是レ等ノ區別ヲ要セサルヤ明ナリ

第二 發覺ヲ受クヘキ管轄官吏ハ左ノ如シ
(イ) 重罪輕罪違警罪ヲ問ハス發覺人所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察

官

(ロ) 重罪輕罪違警罪ヲ問ハス官吏公吏職務上ノ告發ハ其職務ヲ行フ地ノ檢事 但シ不得止場合ニ於テハ檢事ニ送致スルヲメ司法警察官其告發ヲ取次クモ妨ケナシ

(リ) ノ場合ハ檢事トノミアリテ司法警察官トナキハ單ニ原則ノ適用ナリ他ノ場合ニ司法警察官トアルハ犯罪ノ事實ヲ容易ニ知ルヲ得ヘキ爲メニ設ケタルモノニシテ元來檢事カ告訴告發ヲ受クヘキモノナリ

(ハ) 舊治罪法(第九十六條)ニハ違警罪ニ付キ官吏公吏職務上ノ告發ハ違警罪裁判所檢察官ニ告發スヘシトアリテ違警罪裁判所檢察官トハ警部ヲ云フモノナレトモ本法ハ區裁判所ヲ以テ違警罪裁判所トシ又タ區裁判所ニハ檢事アリテ如何ナル場合ニアリテモ警視警部ハ檢事トナルコトナシ去レトモ本法ニハ官吏告發ニ付テ檢事トノミアリテ司法警察官トナシ之レ即決例アルヲ以テ違警罪ニ付テハ別段ナル取扱ヲナスヲ以テ司法警察官ノ文字ナキ所以ナリ又タ舊治罪法ニハ豫審判事告訴ヲ受クル云々トアレトモ本法ニハ凡テノ場合ニ於テ豫審判事ハ告訴告發ヲ受クルコトナシ即チ豫審判事ニ告訴スルモ誣告ノ原由トナラス是レ告訴告發ヲ受クヘキ相當官吏ニ非ラサレハナリ

明治十八年九月第三十一號布告ヲ以テ違警罪ハ即決例ヲ設ケラレタルニ依リ一旦犯罪ノ地ノ警察(本分)署ニ於テ即決裁判ヲ受ケタル後チニ非ラサレハ區裁判所ノ

正式裁判ヲ仰クヲ得ス故ニ本罪ニ付テハ檢事之レカ告發ヲ受クルモ直チニ管轄ノ警察(本分)署ニ之レヲ送致ス可シ但シ軍人軍屬ノ違警罪犯ハ憲兵設置ナキ地方ニアリテハ警察(本分)署ノ即決裁判ヲ受クヘキモノトス

又タ告訴告發ハ或ル官吏ニ對シテハ即チ作爲ノ義務ヲ命シタルモノナルモ各人ニ付テハ義務ヲ命シタルニ非ラス是レ法律ニ官吏ノ場合ニハ告發スヘシト云ヒ各人ニハ告訴告發スルヲ得トアル所以ナリ

第十七節 司法警察官告訴告發ヲ受ケタルトキノ處分

檢事カ告訴ヲ受ケタルトキハ第六十二條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲スヘキモ司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ速ニ訴訟書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致スヘキモノトス故ニ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルキハ地方裁判所檢事ニ送致スヘク區裁判所管轄ニ屬スルキハ之レヲ區裁判所檢事局ニ送致スヘキモノトス自ラ之レカ取調ヲ爲シ又ハ法律適用ニ付キ意見等ヲ述フヘキモノニ非ラス否其職權ナキモノナリ唯タ書類又ハ犯罪人ヲ檢事ニ送致スヘキノミ去レテ其犯罪ニ付キ搜查ヲ遂クハ固ヨリ其職權ノミナラス亦タ其義務ナリトス故ニ告訴告發アルニ當テ犯人ノ自由ヲ拘束シテ之レヲ強テ其署ニ引致スル等ノ事ヲナスヲ得サルナリ(現行犯ノ場合ヲ除ク)

但シ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ハ格別ナリ

第十八節 告訴人ノ注意スヘキ條件

告訴人ハ只犯罪事件ヲ報告スルノミナラス成ル可ク其証憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキニ
トテ申立テサルヘカラス何ントナレハ被害者ヨリ之レヲ申立テサルトキハ檢事司法警
察官ハ捜査ヲ爲スニ途ナク終ニハ起訴スルヲ得サルニ至ルヘク告訴人モ亦テ隨テ其目
的ヲ達スルヲ得サレハナリ然レトモ縱令ヒ告訴人ニ於テ之レヲ申立サルモ其告訴ノ無
効ナルニアラス法律ハ只テ告訴人ノ利益ヲ慮リ可成其証憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキニ
トテ申立テサルニ外ナラサルモノナリ又テ告訴ハ犯罪事實ヲ申告スルノミニ過キサ
ルモ一方ニ於テハ誣告ノ原由トナルモノナルヲ以テ之レヲ爲スニ當リテハ宜シク彼我
ヲ顧ミサルヘカラス(本法第五十條)

第十九節 告訴人ト民事原告人トノ關係

告訴人ハ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタルモノナレハ其犯罪事件ノ告訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ
ノミナラス亦テ自ラ民事原告人トナリ公訴ニ附帶シテ又ハ民事裁判所ニ私訴ヲ起スコ
トヲ得ルハ當然ナリトス然レモ民事原告人ハ訴訟關係人ナレハ必ラス丁年者タルヲ要
ス之レニ反シ告訴人ハ訴訟關係人ニアラサレハ丁年者タルヲ要セス而シテ告訴人民事
原告人ト其名稱ノ異ナルハ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタルモノナルモ告訴人トハ被害事件
ヲ檢事又ハ司法警察官ニ報告シタルニ於テ初マリテ民事原告人トハ私訴ヲ提起シタル
トヨリ初マリタルモノトス

第二十節 告訴人ト民事原告人トノ差異

告訴人及ヒ民事原告人ハ等シク犯罪ニヨリ損害ヲ受ケタル被害者ナレトモ之レヲ混ス
ヘカラス其差異アル要點ヲ掲クレハ左ノ如シ

第一 告訴人ハ法律上證人トナルコトヲ得レトモ民事原告人ハ証人トナルコトヲ得ス
只テ事實參考トシテ其事實ヲ陳述スルノミ是レ告訴人未タ民事原告人トナラサル間
ハ告發人ト異ナル所ナクシテ証人トナルコトヲ得ルハ勿論ナリト雖モ已ニ民事原告
人トナリタルトキハ自己ノ利害ニ關係アルヲ以テ証人トナルヲ許サス之レ何人ト雖
モ自己ノヲメニ證人トナルヲ得ストノ原則ノ適用ナリ(本法第百廿三條參照)

第二 告訴人ハ証人タルコトヲ得レハ隨テ偽證ノ罪ニ問ハル、コトアルモ民事原告人
ハ証人タルノ資格ナキヲ以テ偽證罪ニ問ハル、コトナシ但シ名義ノ如何ニ抱ラス惡
意若クハ重過失ニ依リ被告人ニ損害ヲ被ラシメタルトキハ賠償若クハ誣告ノ責ハ免
カル、コトヲ得サルモノトス(本法第十三條刑法第三百五十五條參照)

第三 告訴人ハ訴訟關係人ニアラサレハ訴訟入費ヲ擔當スルコトナシト雖モ民事原告
人ハ訴訟關係人ナルヲ以テ敗訴シタルトキハ訴訟費用ヲ擔當セサルヘカラス(第二
百〇一條參照)

第四 告訴人ハ訴訟ヲ爲スモノニアラサレハ能力者タルヲ要セスト雖モ民事原告人ハ
必ラス訴訟ヲ爲ス得ル能力ヲ有スルモノナラサルヘカラス(第五十四條參照)

第廿一節 一己人ノ資格ヲ以テ告訴告發ヲ爲ス方式

人民ノ資格ヲ以テ告訴告發ヲ爲ス方式ハ左ノ如シ(本法第五十一條)

第一 文書ヲ以テスルコト 此場合ニハ告訴人告發人ハ必ラス署名捺印シタル書面ヲ以テスヘシ若シ署名捺印スルコト能ハサルハ其理由ヲ附記スヘシ

第二 口述ヲ以テスルコト 此場合ハ其告訴告發ヲ受ケタル官吏ハ其口述ヲ録取シ告訴告發ノ調書ヲ作り之レヲ告訴又ハ告發人ニ讀ミ聞カセ相違ナキニ於テハ署名捺印セシムヘシ若シ署名捺印スルコト能ハサルハ其旨ヲ附記スヘシ

第廿二節 官吏公吏ノ資格ヲ以テ告發ヲ爲ス法式

官吏公吏職務上ノ告發ハ必ラス其官吏公吏ノ署名捺印シタル書面ニ官署公署(本法第二十條)ノ印ヲ捺捺シタル書面ヲ以テセサルヘカラス之レ官吏公吏ハ職務上告發スヘキノ義務アルモノニシテ又官吏公吏ハ夫ノ暗忘無學ノ田夫野人ト異ニシテ書面ヲ作り又ハ署名捺印スルコト能ハサル理由ナキヲ以テナリ但シ官吏公吏ノ作ルヘキ書類ト雖モ官署公署印ヲ用ユルコト能ハサル事ナキニアラス而シテ一己人ヨリ差出シタル告訴告發狀ニハ方式ナキヲ以テ只タ其犯罪ノ事實ヲ伺フニ足ルヲ以テ充分トス是レ告訴告發ハ國家ノタメニシテ一個人ノタメニスルモノニアラサレハナリ若シ其事件ノ不明瞭ナル所アレハ國家ハ宜シク之レヲ調査スヘク人民ヲ以テ之レヲ調査セシムヘキモノニ非ラス若シ官吏公吏ノ差出スヘキ告發狀ノ如ク一定ノ方式ヲ定メタルハ各人ハ其繁雜ヲ厭フテ告訴告發ヲ爲スニ躊躇スルコトアレハナリ故ニ告訴告發狀ハ書式ノ如何ニ拘ラ

ス事實ノ見ルヘキモノアレハ皆之レヲ受理スヘキモノトス然レモ實際警察(本分)署ニ於テ之レカ取扱ヲ見レハ略ホ書式等ヲ示スモノ、如クナレバ之レ只タ執務官ノ便利ヨリ出テタルモノニシテ一般人民ノ恪守スヘキモノニアラス否恪守セシムヘキモノニモアラサルナリ(本法第五十二條第二項)

第廿三節 告訴告發ヲ受ケタル官吏ハ之レヲ却下スルコトヲ得ルヤ

本問ニ付テハ其官吏ノ資格如何ニ因テ之レヲ決スヘシ即チ警視警部ノ如キ司法警察官ハ檢事ノ補佐タルニ過キサレハ其主任官タル檢事ノ意見ニ從フヘキモノニシテ自ラ之レヲ取捨スヘキ權アルニアラス故ニ告訴告發アリタルトキハ必ラス之レヲ受理スヘキナリ之レニ反シテ檢事ハ其事件ノ起訴スヘキモノナルヤ否ヤヲ取捨スル權アルモノナレハ其告訴告發ヲ取捨スルコト素ト自由ナリトス但シ檢事ノ補佐タル司法警察官ト雖モ其事件ノ明白ニシテ犯罪ト爲スニ足ラサルモノハ行政警察ノ本分ナル職權ヲ以テ之レヲ取消サシムルヲ得ヘシト雖モ告訴告發ハ苟モ人ノ毀譽ニ係ルモノナレハ濫リニ之レカ勸誘ヲナスヘカラス

第廿四節 各人ノ告發ハ爲スヘキ義務ニアラス

官吏公吏ハ國家ノタメ奉職スルモノナレハ公益上ノタメニハ必ラス告發スヘキ義務アルハ勿論ナリト雖モ各人ハ官吏公吏ノ如ク公益ヲ保護スル義務ナクテ隨テ犯罪ヲ申

告スルノ義務ナキモノトス
然レトモ犯罪ハ國家ノ秩序ヲ紊シ人民ノ安寧ヲ害スルモノナレハ犯罪アルコトヲ知リ
タル以上ハ何人ト雖モ犯人ヲ處罰シ以テ其秩序安寧ヲ維持センカタメ之レヲ告發スル
ノ權利ナカルヘカラス蓋シ法律カ人民ニ與フルニ之レカ權利ヲ以テテ義務ヲ以テセ
サルハ人民互ニ害惡ヲ發キ秘穩ヲ摘シ爲メ人々相愛ノ道ヲ傷ケ反リテ世安ノ擾亂スル
ノ虞ナキニアラサレハナリ是レ法文ニ告發スルコトヲ得トアリテ告發スヘシト命セサ
ル所以ナリ然レモ重罪又ハ禁錮以上ノ刑ニ係ルヘキ現行犯ヲ逮捕シ之レヲ巡查憲兵卒
ニ渡シタルモ法律ハ之レニ命シテ告訴告發スヘシト規定セリ是レ一方ニ於テハ犯人
ヲ逮捕スルヲ許シ一方ニ於テハ其人身ノ自由ヲ保護シテ之レニ責任ヲ負ハシメタルモ
ノナリ(本法第五十二條)

第廿五節 違警罪ニ付一巳人ノ告發權

舊治罪法第九十六條ニテハ何人ニ限ラス重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタル所
ハ云々トアリテ常人ノ告發ハ重罪輕罪ニ限リ違警罪ニハ何等ノ規定ナキヲ以テ種々ノ議
論アリタルモ本法ニハ廣ク犯罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタル云々トアリテ重罪輕罪
ニ限ラス故ニ何人ト雖モ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタルトキハ勿論違警罪ア
ルコトヲ認知シ又ハ思料シタルトキト雖モ告發スルコトヲ得ルハ明白ニシテ本法ノ下
ニ於テハ最早疑ナシ

第廿六節 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之レヲ爲スコト
ヲ得

告訴告發ハ只犯罪アルコトヲ報告スルニ過キサレハ本人差支アルトキハ代人ヲ以テ告
訴告發ヲ爲スコトヲ得(第五十二條ヲ除ク)此場合ハ代人ハ告訴告發ノ委任狀ヲ差出サ
ルヘカラス但シ法律上ノ代人無能者ノタメニ告訴ヲナスニハ別ニ委任狀ヲ要セサル
ヘシ之レ惡意若クハ重過失ノ場合ニ於テ其責任ヲ負擔スルヲ以テナリ

第廿七節 無能力者ノ告訴

無能力者ハ自ラ告訴告發ヲ爲スコトヲ得ルト雖モ其告訴ハ亦法律上ノ代人之レヲ爲ス
モ有効ナリトス法律ニハ無能力者ノ告訴ノミヲ掲ケテ告發ヲ掲ケス是レ告發ハ被害者
ニアラサルモノヨリ之レヲ爲スモノナレハ法律上代人ハ自己ノ名義ヲ以テ之レヲ爲ス
ヲ得ヘク無能力者ノ名義ヲ用ヒ代人ノ資格ヲ以テ爲スヘキ必要ナキヲ以テナリ

第廿八節 法律上ノ代人及ヒ無能力者

法律上ノ代人トハ明治十四年十二月第七十三號布告ヲ以テ定メラレタリ然レモ該達ハ
舊治罪法ニ付テ定メラレタルモノニシテ今ハ民法モ頒布セラレタルハ本法ヲ適用スヘ
キモノ、如クナレモ未ダ實施セサル以上ハ該布達ヲ適用シテ不可ナカルヘシ今左ニ列
記セン

第一 未成年ニ付テハ父母又ハ後見人

第二 白痴瘋癲者ニ付テハ管理人

第三 婦ニ付テハ夫

第四 禁治産者ニ付テハ管財人

以上ハ法律上ノ代人ヲ示シタルモノナルモ其被代理者ノ位置ニアルモノハ即チ無能力者ナリトス然レトモ是レ民法ニ屬スル規定ニシテ刑法上皆以テ無能力者トナスヲ得ス例ヘハ有夫ノ婦及ヒ十六年以上ノ未丁年者ノ如キ是レナリ

第廿九節 無能力者ハ私訴ヲ爲スコトヲ得サル理由

告訴告發ハ無能力者ト雖モ之レヲ爲スコトヲ得レトモ私訴ハ法律上ノ代人ニアラザレハ之レヲ爲スコトヲ得ス是レ既ニ述ヘシ如ク告訴告發ハ犯罪ヲ報告スルニ過ギサレハ何人ト雖モ之レヲ爲スコトヲ得ヘケレハナリ然レモ私訴ハ一ノ訴訟ナレハ其訴訟能力アルヲ要ス故ニ前既ニ述ヘシ如ク私訴ハ民事原告人ノ爲スヘキ所ナリ且ツ私訴ヲ爲スニハ能ク其事實ヲ調査シ而シテ後子之レヲ爲シ又タ既ニ訴ヘタル後ト雖モ種々ノ取調ヲ要スヘキモノナレハナリ若シ否ラサレハ反リテ反訴ヲ受シルノ恐レアリ又タ判決ノ失誤ヲ來スコトアレハナリ之レヲ爲ス實ニ通常能力者ト雖モ頗ル至難ヲ覺ユ況ンヤ無能力者ニ於テオヤ之レ無能力者自ラ私訴ヲナスヲ許サ、ル所以ナリ

第三十節 告訴ヲ爲スニ付キ無能力者ト法律上ノ代理人ト其意見ヲ異ニスルハ

告訴ヲ爲スコト付キ無能力者ト法律上ノ代人ト其意見ヲ異ニスルハ執レノ意見ニ從フヘキカ曰ク法律上ニ明文ナキヲ以テ當然告訴ヲ爲シ得ル者即チ無能力者ノ意見ニ從ハサルヘカラサルカ如シ然レモ告訴ハ私訴ニ關係シ及ホスコト頗ル大ナルヲ以テ法律上ノ代理人ノ意見ニ從フヲ至當ナリト但シ告訴ヲ待テ受理スヘキ事件ニ付テハ概シテ無能力者ノ意見ニ從ハサルヘカラス何ントナレハ其罪ノ成立不成立ハ本人ニアラザレハ之レヲ知ルコト能ハサルノミナラス本人ノ名譽ニ關スルモノナレハナリ

第卅一節 告訴告發ノ取下及ヒ其申立ノ變更

一旦告訴告發ヲ爲スト雖モ之レヲ取下ケ若シハ之レヲ變更セント欲スルハ固ヨリ其自由ナリ是レ告訴告發ハ人ノ惡事醜行ヲ申報スルモノナレハ固ヨリ其事實ヲ精査シテ而シテ後子之レヲ爲スヘキモノナリ然レモ被害者又ハ第三者ハ或ハ一時ノ憤怒ニ乘シ又ハ惡意若クハ輕忽ニ出テ、無實ノ申立ヲ爲スコトモアルヘケレハナリ若シ然ラスシテ一旦告訴告發ヲ爲シタルトキハ之レヲ取下ケ又ハ其申立ヲ變更スルヲ得ストスルコト於テハ遂ニ告訴人告發人ヲシテ其非ヲ遷ケシムルニ至レハナリ隨テ被告人ハ無辜ニ陥リ判事カタメニ事實ヲ誤リ裁判ノ正鵠ヲ失シ世上ノ信用ヲ欠クニ至ルヘシ況ンヤ告訴告發ハ官吏公吏職務上ニ係ルモノ、外必ラス之レヲ爲サ、ルヘカラサル義務アルニアラザレハナリ然レモ告訴告發ヲシタルハ依テ公訴ヲ提起シ又ハ被告人ノ權利ヲ害シタルハ之レヲ取下ケ又ハ變更スルモ公訴消滅ノ原由トナラス(親告罪ハ格別)又タ

損害賠償及ヒ誣告罪ニ問擬セラル、コアルヘキハ勿論ナリトス既ニ告訴告發ヲ變更シ又ハ取下ケタルヲ以テ其責ヲ免カルヘカヲサレハナリ

第卅二節 官吏公吏職務上ノ告發ト各己人ノ告發トノ差異

告發ニモ二種アリテ一チ官吏公吏職務上ノ告發一チ常人即チ各人ノ告發トナス而シテ其間多少ノ差異アルコトハ各條ニ於テ略ホ明了ナルモ尙ホ之レカ比較ヲ掲クレハ左ノ如ク

第一 官吏公吏職務上ノ告發ハ義務ナリ故ニ犯罪アルコトヲ發見シタルトキハ必ラス之レヲ告發セサルヘカラスト雖モ常人ノ告發ハ權利ニ屬スレハ之レヲ爲スト爲サ、ルトハ自由ナリ

第二 官吏公吏職務上ノ告發ハ惡意ヲ以テ爲シタル場合ヲ除クノ外被告人ニ對シ反訴ノ責ニ任セスト雖モ常人ノ告發ハ告發人ノ惡意ニ出テタルトキハ勿論重過失ニ出テタルトキト雖モ猶ホ其責ニ任セサルヘカラスト

第三 官吏公吏職務上ノ告發ハ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ爲サ、ルヘカラスト雖モ常人ノ告發ハ告發人所在ノ地若クハ犯罪地ノ檢事又ハ司法警察官ニ之レヲ爲スコトヲ得是レ國家カ早ク犯罪ヲ知得セントスルニ出テタルモノナリ

第四 官吏公吏職務上ノ告發ハ必ラス署名捺印シタル書面ニ官署公署ノ印ヲ押シタル

モノヲ以テセサルヘカラスト雖モ常人ノ告發ハ書面若クハ口述ヲ以テ之レヲ爲スコトヲ得但司法警察訓則ニヨレハ官吏公吏職務上ノ告發ト雖モ急遽ヲ要スルトキハ電信又ハ口述ヲ以テ之レヲ爲スコトヲ許セリ

第五 官吏公吏職務上ノ告發ハ必ラス自ラ之レヲ爲サ、ルヘカラスト雖モ常人ノ告發ハ代人ニ委任シテ之レヲ爲スコトヲ得

第六 官吏公吏職務上ノ告發ハ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ思料シタルトキハ速ニ之レヲ爲サ、ルヘカラスト雖モ常人ノ告發ハ必スシモ之レヲ爲スニ要セス

第七 官吏公吏職務上ノ告發ハ成ル可ク證據及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ添フヘキト雖モ常人ノ告發ハ可成證據及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ申立ツレハ可ナリ以上ハ二者ノ差異ナル要點ナリト雖モ第六第七ハ第一ノ結果タルニ過キサルナリ

第卅三節 告訴ト告發トノ差異

告訴ト告發トノ差異アル要點ヲ掲クレハ左ノ如ク

第一 告訴ハ被害者ヨリ犯罪ヲ申告スルモノナレトモ告發ハ被害者ニ非ラサル第三者ヨリ申告スルモノナリ

第二 告訴ヲ爲スモノハ民事原告人トナルコトアリト雖モ告發ヲ爲スモノハ民事原告人ト爲ルコトナシ

第三 檢事ニ於テ被告事件其裁判所ノ管轄ニアラサルモノト思科シ又ハ被告事件ト

ナラス者クハ公訴受理スヘカラスルモノト思料シ其處分ヲ爲シタル場合ニ於テ被告事件ハ告訴ニ依ルトキハ其處分ヲ被害者ニ通知スト雖氏告發ニ係ルトキハ通知スルコトナシ

第四 無能力者ノ告訴ハ法律上ノ代人ノレヲ爲スコトヲ得レトモ無能力者ノ告發ハ法律上ノ代人其代人ノ資格ヲ以テ之レヲ爲スコト稀ナリ

第五 告訴ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ之レヲ爲スコトヲ得告發ハ官吏公夫職務上ノ告發ト常人ノ告發トヲ區別シ官吏公夫職務上ノ告發ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ爲スヘシ常人ノ告發ハ其告發人所在ノ地若クハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ之レヲ爲スコトヲ得

第卅四節 告訴ヲ爲スト盜難届ヲ爲ストノ差異

告訴ハ凡テ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル場合ニ之レヲ爲スモノナレトモ又盜難ニ遇ヒタル場合ニ於テ盜難届ヲ爲スコトアリ此告訴ヲ爲スト盜難届ヲ爲ストハ相方併ヒ行レテ相悖ラサルモノナレトモ今其差別アル要點ヲ掲クレハ左ノ如シ

第一 告訴ヲ爲スハ司法警察上ノ手續ナレトモ盜難届ヲ爲スハ行政警察上ノ手續ナリ故ニ之レヲ受理スルモノ、資格ヲ異ニス然レトモ實際ニ於テハ行政警察事務ニ從事スルモノハ即チ司法警察事務ニ從事スル者ナルカ故ニ之レヲ區別スルノ要ナキモノ、如クナレハ盜難届ハ縱令ヒ司法警察官之レヲ受理スルト雖行政警察官ノ資格ヲ

以テ之レヲ受理スルモノナレハ未ダ告訴ナキ前ニ其警察官ニ自首スルモハ所謂事未タ發覺セサル前ナルヲ以テ自首減刑ヲ與フヘキモノトス

第二 告訴ハ之レヲ爲スモ爲サ、ルモ被害者ノ自由ナリト雖盜難届ハ必ラス之レヲ爲サ、ルヘカラス

第三 告訴ヲ爲スニハ書面又ハ口述ヲ以テ之レヲ爲スコトヲ得レトモ盜難届ハ必ラス書面ヲ以テ之レヲ爲サ、ルヘカラス

第四 告訴ハ檢事又ハ司法警察官ニ之レヲ爲スモノナレトモ盜難届ハ警察署ノミニ之レヲ爲スモノナリ

第五 告訴ハ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ要償ノ責任ヲ負ハサルヲ得スト雖盜難届ハ此ノ如キコトナシ

第卅五節 告訴告發ヲ受ケタル管轄官吏ノ注意スヘキ要點

告訴告發ヲ受ケタル管轄官吏ハ左ノ要點ニ注意スヘキモノナリ

第一 犯罪ノ性質方法日時場所被告人証人ノ住所氏名其他證據及ヒ其事實參考トナルヘキコトヲ申立テシム

第二 被告人ヲ指名シテ告訴告發シタルトキハ本人ト被告人トノ關係如何ヲ熟察シ其經綸ニ出ツルコトヲキヤ否ヤニ注意スヘシ又告訴人ノ如キハ一時ノ憤怒ニ乘リ過

實ノ申立ヲ爲スナキヤモ計リ難シ故ニ可成失誤ナキトニ注意スヘキナリ

第卅六節

現行犯ト非現行犯ノ區別及現行犯ニ限り特別處分ヲ許シタル理由

現行犯トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ニシテ非現行トハ犯罪ノ成立シタル後多少ノ時日ヲ經過シタルノ後發覺シタル罪ヲ云フ此區別タル犯罪後時日經過ノ多寡ト發覺ノ遲速トニ基キタルモノナリ
抑モ現行犯ハ被告人逮捕罪證集取ニ付頗ル簡便ノ手續ニヨリ其處分ヲ爲スナキ許シ非現行犯ニ之レヲ許サ、ルハ現行犯ハ罪證明確ナル場合多クノ事ノ疑ハシキモノ甚々少シ故ニ直チニ犯人ヲ逮捕シ罪證ヲ蒐集スルモ之レカ爲メ人身ノ自由ヲ妨ク各人ノ權利ヲ侵ス等ノ恐レアルコトナシ若シ躊躇シテ其處分ヲ怠ルトキハ犯人遁逃證憑湮滅ノ恐アリ之レニ反シ非現行犯ニ至リテハ犯人明確ナルモ罪證明確ナラス罪證明確ナルモ犯人明確ナラサル等其間何レカ事ノ疑ハシキモノ甚々多シコト時ニ當リ猶ホ便宜處分ヲ許シシテ或ハ人身自由其他各人ノ權利ヲ侵害スル弊ナキ能ハス之レヲ以テ現行犯ニ限り便宜處分ヲ許シ非現行犯ニ付テハ特ニ鄭重ノ法式ニ遵ヒ猥リニ人身ノ自由其他ノ權利ニ關スル處分ヲ爲スコトヲ許サズ現行犯ニ於ケル特別處分トハ左ノ如シ
第一 禁錮以上 刑ニ該ルヘキ現行犯アル場合ニ於テハ令狀ナク巡查憲兵卒ハ勿論通常人民ト雖モ被告人ヲ逮捕スルヲ得且ツ或ル場合ニハ其携有スル處ノ財貨物件ヲ押

収シ又ハ人家ニ侵入スルコトヲ得ヘシ然レトモ是等ハ各人ニアリテハ尤モ種ニシテ特ニ注意ヲ要スヘキコトナリトス何ントナレハ家宅ニ侵入スルハ固ト豫審處分ナレハナリ

第二 區裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪以上ノ現行犯アル場合ニ於テハ豫審判事檢事司法

警察官ハ變例ニ依リ豫審處分ヲ爲スコトヲ得(本法第百四十二條以下)

第三 豫審判事現行犯ノ場合ニ調書ヲ作りタルヲ以テ公訴提起トスルモ非現行犯ノ場合ハ必ラス檢事ノ請求ヲ待ツヘキモノナリ

第卅七節 現行犯及ヒ準現行犯ノ場合

第一 現行犯ノ場合

重罪輕罪違警罪ヲ問ハス現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發見シタルモノハ現行犯トス是レ即チ本法第五十六條ノ與フル定義ナリ而シテ現ニ行ヒトハ罪トナルヘキ所爲ヲ行ヒツ、アル時ニシテ現ニ行ヒ終リタル際トハ罪トナルヘキ所爲ヲ行ヒ止メタル當時又ハ之レヲ止メタルヨリ些少ノ時間ヲ經過スルモ其罪跡現存シテ犯狀ヲ認ムルニ容易ナル時間ヲ云フ然レモ法文ニハ終リタル際云々トアル故ニ些少ノ時トハ幾何ノ時間ナルヤハ之レヲ事實ノ問題ニ讓ルヘシ
發覺トハ犯人ノ誰(氏名ヲ知ルヲ要ス)タルヲ知リタルト云フ若シ否ラズシテ犯人ノ誰タルヲ知ラズト雖モ司法警察官若シハ巡查憲兵卒ニ於テ其犯罪事件ヲ覺知シテ

其處分ニ着手シ又ハ被害者若クハ第三者カ其犯罪事件ヲ知得シタルキヲ云フモノト
スルキハ自首減刑ヲ適用スルニ於テ甚ダ不都合ヲ來ス何ントナレハ自首ハ其犯罪事
件ノ發見シタルモ犯人ノ誰タル未ダ知レサルキハ尙ホ減刑ノ原由トナルヲ以テナ
リ且ツ現行犯ノ場合ニハ多クハ其犯人ノ知得スルヲ得ヘキ場合ニシテ單ニ其事件ノ
發覺ノ場合ハ非現行犯ノキニ多シト雖モ現行犯又ハ准現行犯ノ場合ニハ甚ダ稀ナリ
トス

第二 重罪輕罪ニ付テハ左ノ場合ハ現行犯ニ準ス

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時 此場合ヲ分拆スレハ左ノ三條件ヲ

要ス

(イ) 逃走スルモノアルコト

(ロ) 其跡ヲ追フモノアルコト

(ハ) 追フモノニ於テ犯人ナリト呼フコト

此條件ヲ具備スルヲ要ス但シ司法警察訓則ニ依レハ犯人タルコトヲ詰ツルニ當リ直チ
ニ遁逃スルキハ別ニ追呼者ナキモ現行犯ニ準シテ處分スルコトヲ許セリ然レモ准現行
犯ハ特例ナレハ必ラス其範圍ヲ擴張スヘカラス
故ニ此場合ニハ夫ノ明治十四年布告第四十六號達ニ基キ舉動犯人トシテ之レヲ逮捕ス
ヘシ然レモ此布達ハ最早消却シ去テ存在スルコトナキヲ以テ今日ニアリテハ司法警察官

又ハ巡查憲兵卒ハ行政警察權ヲ以テ之レカ臨機ノ處分ヲナシ其罪ニ同行スルヲ得ヘシ
但タ惡意若クハ重過失ナキヲ要ス

二 兇器贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身体被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト

思料スヘキトキ此場合ヲ分拆スレハ左ノ二條件ヲ要ス

(イ) 兇器贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身体被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アルコト

(ロ) 其者ノ舉動犯人ト思料スヘキコト

三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢証スルタメ又ハ其犯人ト思料スヘキ者ヲ逮捕スル
タメ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ 此場合ヲ分拆スレハ左ノ三條件ヲ要

ス

(イ) 家宅内ニ犯罪アルコト

(ロ) 其犯罪ニ付檢證又ハ逮捕ノ請求アルコト

(ハ) 其請求者ハ戸主又ハ戸主ニ代ルヘキモノナルコト

右ノ條件ヲ要ス只タ本項ニ注意スヘキコトハ法文ニ戸主トアレトモ必ラス戸主ニ限
ルニアラス其家ノ管理スルモノハ皆戸主ト見做シ取扱フテ可ナリ

以上ハ本法第五十七條ノ規定スル所ニシテ本法ニハ重罪輕罪トアリテ違警罪トナキ故
ニ違警罪ニハ准現行犯ハナキモノトス

現行犯罪ニアラサレハ罰スヘカラサルモノハ(賭博犯ノ如キ)現行犯ノミニ係ル

故ニ准現行犯罪ニ係ルモノハ罰スルヲ得ス

帝國議會ノ議員ニシテ其會期中ニ逮捕スルコトヲ得ルハ現行犯罪ノ場合ニ限ルモノニシテ準現行犯罪ノ場合ハ逮捕スルコトヲ得ス

奏聞ヲ經スシテ帶勤者有位者等ヲ逮捕スルヲ得ルハ現行犯罪ニシテ準現行犯罪ノ場合ハ必ラス奏聞シテ逮捕スルヲ要ス(本法第五十六條第五十七條參照)

第卅八節 現行犯人ノ逮捕

第一 司法警察官及ヒ巡查憲兵卒其職務上現行犯罪アルコトヲ知リタルハ

司法警察官及巡查憲兵卒其職務上重罪又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル輕罪ノ現行犯罪アルコトヲ知リタルトキハ其令狀ヲ俟タズシテ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得ヘキノミナラズ又必ラス逮捕スヘキ義務アリ是レ現行犯ノ場合ニ於テ此等ノ處分ヲ爲サシメサルトキハ犯罪ヲシテ容易ニ隱避セシメ社會ノ安寧ヲ維持スル能ハサルヲ以テナリ(本法第五十八條)

又罰金ノ刑ニ該ルヘキ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ之レヲ逮捕スルコトヲ得ス只タ其氏名明カナラズ其逃走ノ恐レアルハ限リ之レヲ檢事若クハ即決スヘキ官署即チ警察本分署ニ引致スルコトヲ得ルノミ又其氏名住所ノ申立判然セズシテ虛偽ノ申立アリト認ムルトキモ引致スルヲ得ヘキヲ逃走ノ恐レマルハト同一ナリトス

而シテ巡查憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之レヲ司法警察官ニ引致セサルヘカラス即チ巡查ハ警視警部等其所屬ノ上官ニ引致スヘク又憲兵卒ハ其所屬ノ憲兵將校下士ニ引致スヘキナリ

而シテ巡查憲兵卒ハ被告人ヲ引致シタルハ司法警察官之レカ調書ヲ作ルモノナレハ別段告發狀ヲ差出スニ及ハサルカ如クナレバ此場合ニハ司法警察官ハ告發ヲ受クヘキ職權ナキモノナレハ(第五十二條)其犯罪アルコトヲ發見シタル巡查及ヒ憲兵卒ハ正式ノ告發狀ヲ作ラサルヲ得ス司法警察官ハ只タ其逮捕ト告發ニ付テノ調書ヲ作り直チニ之レヲ管轄ノ檢事ニ送致スヘキモノナリ(本法第五十九條)

第二 常人カ現行犯アルコトヲ知リタルトキ

本法第六十條ニ曰ク何人ニ限ラス云々トアリ故ニ被害者ハ勿論其他被害者ニアラザルモノト雖モ現行犯重罪及ヒ禁錮以上ノ刑ニ於テハ直チニ逮捕スルコトヲ得又司法警察官及ヒ巡查憲兵卒等ニシテ其職務外ニアルモノ或ハ此等ノ官吏以外ノ官吏公吏ト雖モ本法ニ從ヒ凡テ常人ト等シク現行犯アル場合ニ於テハ之レヲ逮捕スルコトヲ得且ツ常人ノ場合ニハ罰金若クハ違警罪ニ付キ縱令ヒ逃走ノ恐レアルモノ之レヲ引致スルヲ得ス而シテ常人カ現行犯ヲ逮捕スルハ其權利ニシテ義務ニアラサレハ之レヲ逮捕スルト否トハ一ニ其自由ニアリ是レ其司法警察官及ヒ巡查憲兵卒ト異ナル所ナリ(本法第六十條)

而シテ常人カ被告人ヲ逮捕シタルトキハ之レヲ司法警察官ニ引致スヘク而シテ之レ
ヲ引致シタルトキハ特別ニ告訴告發ヲ爲スヲ要セス只ク其官吏ノ作リタル調書ニ署
名捺印スルヲ以テ足レリトス然レトモ若シ假リニ巡查憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速
ニ告訴告發ヲ爲サルヘカラス何ントナレハ巡查憲兵卒ハ告訴告發ヲ受クヘキ官吏
ニアラサルヲ以テナリ

又被告人ヲ巡查憲兵卒ニ引渡シタルトキハ被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル
モノニ對シ共ニ官署ニ同行ヲ求ムルコトヲ得是レ人違若クハ惡意ヲ以テ濫リニ無罪
人ヲ逮捕シ之レヲ巡查憲兵卒ニ引渡シテ其跡ヲ失スルコトナキヲ保シ難シ且ツ此場
合ニハ告訴告發ヲナスヘキ義務アリ又ク逮捕シタルモノハ現在ニ其犯罪ノ事實ヲ了
知スルヲ以テ犯罪證據等ニ付キ頗ル關係スル所アレハナリ故ニ被告人ヲ逮捕シタル
正當ノ事由ナクシテ同行ノ請求ヲ拒ミタルトキハ巡查憲兵卒ハ直チニ之レヲ引致ス
ルコトヲ得ヘキナリ(本法第六十一條)

第卅九節 司法警察官被告人ヲ受取りタルキノ處置

司法警察官ハ常人又ハ巡查憲兵卒ニ於テ現行犯(准現行犯トモ)ノ場合ニ於テ被告人ヲ
逮捕シ之レヲ引渡サント求ムルモノアルトキハ直チニ其被告人ヲ受取り逮捕ノ事由ヲ
審問シテ其逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ルヘシ是レ逮捕ノ確實ナルコト及ヒ常人巡
査憲兵卒カ監リニ逮捕シタルモノニアラサルコトヲ且ツ常人ノ場合ニハ其告訴告發ヲ

リタルヲ証スヘキモノトス而シテ若シ逮捕ヲ爲シタルモノヨリ始末書又ハ手續書ヲ呈
出シタルキハ之レヲ調書ニ添ヒ置クヘキナリ而シテ其逮捕シタル被告人ヲシテ官署ニ
留置スルコトヲ必要トセス或ハ留置スヘカラサルモノナルトキハ直チニ釋放スヘキナ
リ(本法第五十九條第二項)

第二章 起訴

第一節 起訴ノ解

起訴トハ即チ本法第六十二條及ヒ第六十三條ニ定メタル如ク檢事カ相當裁判所ヲシテ
被告事件ヲ受理セシムル所ノ手續ナリ故ニ檢事自ラ重罪輕罪ノ搜查ヲ爲シ又ハ司法警
察官ヨリ其送致ヲ受ケタル場合ニ於テハ本法第六十二條第六十三條ニ從ヒ起訴ノ手續
ヲ爲スヘシ

第二節 豫審ヲ求ムヘキ犯罪

第一 豫審ヲ求ムヘキ犯罪ハ左ノ如シ(本法第六十二條)

一 重罪ハ凡テ豫審ヲ求ム

二 輕罪ニ付テハ重難ナル犯罪ハ檢事カ見認メタルトキ

凡テ檢事カ豫審ヲ求ムルキハ證據及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ送致シ且ツ臨檢
スヘキ場所逮捕スヘキ人名及ヒ証人トナルヘキ者ヲ指示スヘシ(第六十六條)

第二 豫審ヲ求ムルニ及ハサル犯罪ハ左ノ如シ

- 一 輕罪犯ニ付テハ輕易ナル犯罪ト論事カ見認メタルトキ
- 二 違警罪ハ凡テ豫審ヲ求メス

第二章 豫審

第一節 豫審ノ解及ヒ性質

豫審ハ前章ニ述ヘタル如ク重罪及ヒ輕罪ニ限リナスヘキモノニシテ治罪上特ニ重要ノ處分ナリ假令ハ信書ノ秘密ヲ發キ家宅權ヲ侵害スルカ如キ若シ此ノ處分ニシテ輕忽ニ涉ルコトアルハ爲メニ權利ヲ妨害スルコト差少ニ非ラヌ是レヲ以テ其ノ手續ニ付テモ公判ト大ニ其ノ性質ヲ異ニス即チ公判ニアリテハ凡テノ手續ハ公行ヲ以テ本旨トシ例ヘハ傍聽ヲ公許シ其ノ他辯護人ヲ用ユルカ如キ是ナリ反之豫審ノ手續ハ凡テ秘密ヲ以テ本旨トス且其ノ處分極メテ秘密周到ナリ例ヘハ傍聽ヲ許サス且ツ其ノ訊問ノ事項ヲ遺漏ナク筆録スルカ如キ是レナリ又タ豫審ハ對審ヲ許サ、ルモノトス即チ公判ニアリテハ檢事ト被告人ノ互ノ辨論ヲ許スモ豫審ニアリテハ之レヲ許サ、ルカ如キ而シテ此ノ秘密ヲ主トシ對審ヲ許サ、ルモノハ豫審ノ本質ナリトス而シテ其ノ效果利益等ニ對テハ以下節ヲ分テ説述スル所ニ依テ盡ス所アルヘキナリ

第二節 豫審ノ利益

豫審ヲ行フ利益ハ主トシテ左ノ三項ニ歸ス

- 第一 重罪及ヒ煩雜ナル輕罪ニ付キ 豫審ヲ行フハ重罪又ハ煩雜ナル輕罪ニ限ルコト

ニシテ此等ノ犯罪ハ只タ其事ノ重大ナルノミナラス又頗ル錯雜ニシテ其證據ヲ蒐集セシ事實ノ明白ナラサルニ之レヲ公判ニ付スルニ於テ犯罪ノ有無ヲ誤認シ或ハ刑罰ノ輕重ヲ失シテ爲メニ好惡ノ徒ヲシテ法網ヲ免カレシメ却リテ無辜ノ人ヲシテ縲紲ニ苦マシムルニ至ルヘシ若シ果シテ然ルハ罪惡ヲ罰シテ社會ノ安寧ヲ維持セントシテ反リテ社會ノ紛擾ヲ招クニ至ル故ニ錯雜煩雜ナル事件ニ付テハ公判ニ付スルニ先チ豫審處分ヲ行ヒ充分ニ其事實ヲ明了ナラシメサルヘカラス

第二 被告人ノ利益ヲ保護スル爲メ、單ニ重罪又ハ輕罪犯タル嫌疑ノミナシテ豫審ニ附セシテ直チニ公判ニ付スルニ於テハ縱令ヒ判決其當ヲ得テ無辜ヲ罰スルコトナキモ判廷ハ公開スルヲ以テ被告人ノ榮譽ヲ害スルコト莫大ナレハナリ是レ所謂豫審ヲ設ケ事實止ムナキノ時ニ非ラサレハ其ノ審理ヲ公ニセスト爲シタル所以ナリトス

第三 證據ノ蒐集ヲ迅速スルコト 抑モ訴訟ノ最モ根據トスヘキハ證據ナリ之レ民刑ニ於テ區別スルナシ即チ訴ニシテ證據ナキハ其ノ訴ハ成立セサルモノナリ而シテ刑事ニアリテハ其證據ノ湮滅スル民事ノ如クナラス是ヲ以テ之レヲ蒐集スル特ニ迅速ヲ要ス且ツ刑事ニアリテハ民事ノ如ク豫メ備フルノ證據ナキヲ以テ之レヲ蒐集スル極ノテ秘密ノ手段ヲ要ス若シ手段ニシテ秘密且迅速ナラサルカ到底完全ナル證據ヲ得ル能ハス故ニ公判ニ附スルニ先チ豫審ノ處分ヲ以テ充分ノ證據ヲ得ヘキコト必要ナリ是レ豫審ヲ設ケタル理由即チ利益ナリトス

第三節 豫審手續ト公判手續トノ區別

豫審ノ手續ハ公判ノ手續ト其方法ヲ異ニシ豫審ノ手續ハ凡シ秘密ヲ主トシテ公開スルコトナシ公判ノ手續ハ常ニ公開ヲ主トスルモノナルヲ以テ公衆ノ傍聽檢事ノ立會辨護人ノ附添等アリ豫審ハ之レニ反シ密行ヲ主トスルカ故ニ公衆ノ傍聽檢事ノ立會辨護人ノ附添ヲ爲サシムルコトナシ而シテ豫審ハ豫審判事ノ行フ審理ニシテ公判ハ裁判所ノ行フ審判ナリ故ニ豫審ノ言渡ハ之レヲ決定トイヒ公判ノ言渡ハ之レヲ判決トイフ

第四節 令狀ノ解

令狀トハ管轄官吏カ重罪輕罪ヲ犯シタル嫌疑アル者ニ對シ出庭又ハ拘禁ヲ命スル所ノ書類ナリ

第五節 令狀ノ種類

令狀ハ固ト豫審判事ノ職權ニシテ裁判所又ハ檢事ノ發スル等ハ其例外ナリ而シテ此ニ令狀トハ左ノ三種ノ謂ナリトス

- 一 召喚狀
- 一 拘引狀
- 一 拘留狀

右三種ノ令狀ノ外尙ホ二種ノ令狀ニ似テ非ナルモノアリ即チ逮捕狀、呼出狀、之レナリ此逮捕狀ハ拘留狀ト同一ノ効力ヲ有スルモノナリト雖モ呼出狀ト同一ノ効力ナキモノトス(呼出狀ト下ハ召喚狀、四字脱ス)

第六節 令狀ノ効力

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ取調上ノ都合ニヨリテハ其日(一日ヲ以テ數フルモノ故ニ午后十二時ヲ過クルヲ得ヌ第十五條)ハ官署ニ差扣サセ置クヲ得ルモ退署前ニハ必ラス訊問スヘキモノトス若シ訊問翌日ニ渡ルヲアルキハ一先ツ釋放シテ更ニ召喚スヘシ但シ拘留狀ヲ發スルヲ得ヘキキハ此限ニアラス(本法第六十九條第二項)拘引狀ハ召喚狀ニ應セサル被告人ニ發スルモノニシテ四十八時以内ハ訊問ノタメ被告人ヲ留置スルコトヲ得ルモノトス(本法第七十二條第二項)

拘留狀ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル被告人ニ發スルモノニシテ無期限ナリトス故ニ必要ナル場合ニ於テハ判決確定ニ至ルマテ拘留スルヲ得ルモノトス(本法第七十五條)

第七節 令狀ノ性質

召喚狀ハ公力ヲ以テ身体ノ自由ヲ拘束スヘキモノニアラス只其日時ト場所トヲ指示シ被告人ニ出庭ヲ命スルニアリ故ニ之レヲ送達スルモノハ執達吏ノ任ナリトス(本法第七十六條第三項)

拘引狀拘留狀ハ被告人ノ利害如何ニ拘ラス公力ヲ以テ人身ノ自由ヲ拘束スルモノナレハ其執行ノ任ニ當ルモノハ公力士タル巡查憲兵卒ナリトス(本法第七十六條第三項)

第八節 令狀ノ目的

召喚状拘引状ノ目的被告人ヲシテ當該官吏ノ面前ニ出庭セシムルニアリ拘留状ハ之レニ反シ其目的ハ被告人ヲ未決拘留スルニアリ

第九節 召喚状ヲ發セスシテ直チニ拘引状ヲ發スルコトヲ得ル場合及其理由

豫審判事ハ檢事ノ起訴ニヨリ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ先ツ被告人ニ召喚状ヲ發スルハ順序ナリト雖モ左ノ場合ニ於テハ召喚状ヲ發セズシテ直チニ拘引状ヲ發スルコトヲ得(本法第七十二條)

第一 被告人定リタル住所アラサルトキ 被告人ニシテ定リタル住所ナキハ或ハ西或ハ東ト相逃レテ逐ニ之レヲ逮捕スルヲ得サルニ至ルヲ以テナリ

第二 被告人罪證ヲ漂滅シ又ハ逃亡スルノ恐レアルキ 被告人ニシテ罪證ナキハ以テ其事ヲ取調フルヲ得ヌ又タ既ニ逃亡シタル後ナルキハ最早如何トモスルヲ得サルニ至ルヲアリ故ニ是等ノ場合ニハ叮嚀ナル取扱ヲナサズシテ例外ヲ設ケタル所以ナリ

第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐レアルトキ 此未遂罪トハ其範圍廣クシテ刑法第九章ノ未遂ニ非ラス乃チ未タ遂ケサル罪惡ト云フ意ニシテ仮ヘハ國事犯ノ隱謀ノ如キ其一例ナリトス而シテ未遂及ヒ脅迫ノ目的ヲ遂ケントスル場合ハ事緊急ニ屬スルヲ以テ之ヲ例外ニ置タル所以ナリトス

第十節 令狀中容貌体格等ヲ記載シテ發スルコトヲ得ルモノト否ラサルモノトノ區別

第一 被告人ノ氏名分明ナラサル場合ニ於テ容貌体格等ヲ記載シテ發スルコトヲ得其令狀ハ即チ左ノ如シ(本法第七十六條第一項)

- 一 拘引状
- 一 拘留状
- 第二 容貌体格等ヲ記載シテ發スルコトヲ得サル令狀ハ左ノ如シ
 - 一 召喚状

第十一節 令狀執行ノ方式

令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付スヘキモノトス此場合ニ於テハ其正本贖本ニ執行ノ場所日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記スヘシ(本法第七十七條第二項)

第十二節 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查憲兵卒被告人發見ノタメ家宅搜索ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合其家宅搜索ヲ爲ニ付ノ制限

令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查憲兵卒ハ被告人其家宅内ニ潛匿シタリト思料シタルトキハ家宅内ヲ搜索スルコトヲ得而シテ家宅内ヲ搜索スルニハ左ノ制限ニ從ハサルヘカス

- 第一 令狀ヲ携帶スルコト
 - 第二 被告人潜匿シタリト思料シタルコト
 - 第三 其地ノ市町村長若シハ其他ノ吏員例ヘハ助役書記又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會アルコト
 - 第四 日出前日没後ニアラサルコト
 - 第五 搜索ノ調書ヲ作ルコト
- 搜索ヲ爲スヘキ場所ハ被告人ノ潜匿シタリト思料スヘキ場所ニ限ル故ニ書類其他什器等被告人ノ搜索ニ關係ナキモノニ及ホスコトヲ得ス何ントナレハ本條ノ搜索ハ被告人ノ搜索ニシテ證據物件ノ搜索ニアラサレハナリ證據物件ノ搜索ハ豫審處分ナレハ第四百四條ノ規定ニ依ラサルヘカラス
- 茲ニ研究シ置クコトアリ即チ左ニ
- 家宅搜索中若シ証憑物件ヲ發見シタルトキハ如何スヘキヤ曰ク其事實モ亦調書ニ記載シ尙ホ湮滅ノ恐レアルトキハ市町村長等ノ立會ヲ得テ其物件ノ地所ニ轉々セサル様ノ取計ヲナスヘシ是レ被告人ノ搜索ニ附隨スル處ノ處分ナレハナリ
- 又家宅内ヲ搜索スルハ被告人潜匿シタリト思料シタルトキ云々トアリ若シ被告人カ其家ニ潜匿シタルコトヲ確認シタルキハ如何スヘキヤ曰ク此場合ハ立會ヲ要セス直チニ家宅内ニ入り令狀ヲ執行シテ可ナリ是レ其事ノ顯著明確ナルヲ以テナリ

又第七十八條ノ法文ニヨレハ隣佑トアリ然レモ四隣居住ノモノニ限ルニアラス地主、家主、差配人等ナレハ其立會ハ有効ナルヘク又其家ニ能力者アレハ其者ヲ立會ハシメテ可ナリ思フニ法律ハ家人不在ノトキテ想像セシナラン家人アラハ其者ヲ立會ハシムルハ反リテ簡便ニシテ且ツ確實ナルヘキナリ

第十三節 日出前日没後ニ家宅搜索ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合

家宅搜索ハ日出前日没後ハ之レヲ爲スコトヲ得サルハ原則ナリト雖モ左ノ場合ニ於テハ例外トシテ搜索スルコトヲ得 (本法第七十八條第二項)

- 第一 旅店割烹店其他夜間ト雖モ乘人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間ハ搜索ヲ爲スコトヲ得
- 第二 戸主若クハ管守者ノ承諾アル場合ニ於テハ夜間ト雖モ搜索ヲ爲スコトヲ得
- 第三 晝間處分ニ着手シ夜間ニ及ヒタル時
- 第四 現行犯人其家ニ闖入シタル場合

第十四節 巡查憲兵卒他管内ニ於テ令狀ヲ執行スル方法

令狀ヲ携帶シタル巡查憲兵卒他ノ管轄地内ニ至リタルトキハ直チニ令狀ヲ執行スルコトヲ得ス其地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ開示シテ即時ニ令狀執行ヲ求ム

百へシテ其請求ヲ受ケタル官吏ハ其令狀ノ裏面ニ執行ノ請求ヲ受ケタル旨ヲ記載シ署名捺印スヘシ之レ職務上分轄アル所以ナリ然レモ實際ニ於テハ或ハ被告人ノ踪跡ヲ失フノ憂ナキニアラス故ニ若シ途中ニ於テ被告人ニ遭遇シタルキハ被告人ニ官署ニ同行ヲ請求シテ而シテ手續ヲナスヘシ直ニ之レヲ執行スルヲ得サルモノトス此點ニ付テハ佛國法ノ規定ニハ令狀ノ効力タル全國ニ執行スルコトヲ得ヘキモノナレハ直チニ執行シテ後チ其旨ヲ管轄官署ニ報告スルモノ、如シ(本法第七十九條)

第十五節

現役ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ執行スル手續

豫備後備ノ軍籍ニアラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ執行スルニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ハ已ムヲ得サル差支ナキ限りハ本人ヲシテ遠ニ令狀ニ應セシメサルヘカラス

第十六節

拘引狀拘留狀ヲ受ケタル被告人ヲ引致スヘキ場所

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ之レヲ相當官吏即チ令狀ヲ發シタル判事ニ引致スヘシ(本法第七十三條)

拘留狀ニ因リ引致シタル被告人ハ指定ノ監獄署ニ引致スヘシ若シ不能トキハ最近監獄署ニ引致シテ人頭受取書ヲ徴ス可シ(本法第八十二條)

第十七節

令狀執行ニ關スル書類ハ何人ニ之レヲ差出

スヘキヤ

巡查憲兵卒令狀執行ニ關スル書類ハ之レヲ檢事ニ差出ス可シ舊法ニハ書記局ニ差出シ來リシモ本法ニテハ之レヲ廢シタリ之レヲ檢事ハ執行官タルノミナラス巡查憲兵卒ヲ監督スルモノナレハ事ノ順序ニ於テ此ノ如クナラサルヲ得ス(本法第八十三條)

第十八節 密室監禁及其目的

密室監禁ハ拘留狀ヲ受ケタル被告人ヲ別室ニ留置シ全ク他人トノ交際ヲ絶タシムル處分ニシテ其目的トスル所ハ犯罪ノ證據ヲ湮滅スルヲ防キ事實ノ發見ヲ容易ナラシムルニアリテ夫ノ野蠻的ノ被告人ヲ苦痛セシムルノ趣意ニ非ラス故ニ豫審判事ハ密室監禁ヲ言渡ニハ左ノ條件ヲ要ス

第一 拘留狀ヲ受ケタル被告人ナルコト

第二 豫審中ナルコト

第三 事實發見ノタメ又ハ證據湮滅ヲ防クノ必要アリト思料シタルコト

以上三個ノ條件ヲ具備スルキハ檢事ノ請求ニヨリ又ハ職權ヲ以テ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ(本法第八十七條)

第十九節 密室監禁ノ制限

密室監禁ハ被告人ノ身体自由ヲ拘束スル最モ甚シキモノナルカ故ニ法律ハ左ノ制限ヲ設ケタリ

第一 密室監禁ハ十日ヲ超過スヘカラス 但シ十日ヲ經過シタル後子傭ホ密室監禁ヲ必要トスルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告シテ其言渡ヲ更改シ更ニ十日間監禁スルコトヲ得

第二 十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問スルコト
而シテ之レヲ裁判所長ニ報告スル所以ハ其不法ニ出テサルナキヤ否ヲ觀察スルノ意ニ出テ又十日間ニ二回ノ訊問ヲナスヘシトシタル所以ハ無益ノ監禁ヲ防止スルノ意ニ出テタルモノトス且ツ密室監禁ニハ接見信音差入等凡テ豫審判事ノ許可アルヲ要ス

第二十節 證據

本法中最モ必要ニシテ且ツ最モ致密ノ攻究ヲ要スヘキモノハ此ノ證據ナリトス何ソトナレハ公訴ノ提起公訴ノ實行ヨリ故障及ヒ上訴ニ至ルマテ其根據ヲ酌ムモノハ唯タ證據ノ一點ニアリ又被告人ノ有罪無罪ノ歸着スルモ亦證據ノ一點ニアレハ其訴訟ノ成立不成立トナルモ單ニ證據ノ一點ニ歸スルト云フモ敢ヘテ過言ニアラサルヘシ然レハ刑事訴訟法中證據ノ必要ナル茲ニ多辨ヲ要セズテ明カナリ今證據ナル文字ヲ解釋スルニ左ノ三個ノ意義ノルモノ、如シ

第一 證據トハ刑事事ヲシテ事實ヲ確認セシムル法定ノ方法ヲ運用スル所爲ヲ云フ即チ舉証ノ任ハ之ヲ申立ル者ニアリト云フカ如キヲ云フ
第二 證據トハ判事ノ心証トナルヘキ法定ノ方法ヲ云フモノニシテ例ヘハ自白又ハ書

面證據等ナリトス

第三 證據トハ法定ノ方法ヲ適用シテ得タル結果ヲ云フ例ヘハ鑑定人ノ鑑定ノ結果ノ如キヲ云フ即チ刑事訴訟法上ニ於テ證據ノ定義ヲ下スルハ單ニ証憑トハ判事ヲシテ其事實ニ付キ心証ヲ確ムルタメ原告被告ノ用ユル所ノ法定ノ方法ナリト云フヲ得ヘシ即チ被告ノ自狀臨檢調書証人及ヒ鑑定人ノ供述ノ如シ

第廿一節 探證上刑事ト民事トノ差別及其理由

刑事ノ裁判ハ一ニ判事ノ心証ニ依ルモノナリ故ニ諸種ノ證據ハ其心証ヲ得ルノ材料ニ過キスシテ其取捨ハ一ニ判事ノ良心ニ依リ然レトモ民事ハ之レト異ナリテ法律上豫メ證據方法ヲ限定シテ其限定ニ依ルニアラサレハ裁判ヲ爲スコト許サス例ヘハ公正證書アルトキハ事實ノ推定ヲ許サ、ルモノナリ之ヲ依法探證ノ制ト云フ故ニ刑事ハ心證結案ノ制ヲ用ヒ證據ノ取捨ヲ以テ判事ノ良心ニ一任シ民事ハ依法探證ノ制ニ從ヒ證據方法ヲ限定シテ刑事ヲ拘束ス然リ而シテ其差異アル理由ハ左ノ如シ

第一 刑事ノ證據ハ豫メ準備スヘカラサルモノナレハ民事ノ證據ハ當事者ニ於テ豫メ準備スルコトヲ得ルモノナリ假令ハ犯罪ヲナス前ニ豫メ證書ヲ呈出シ置クモノアラサルナリ假シ之レアルモノトスルモ法律上ノ効力ナキナリ之レニ反シテ民事ニアリテハ通常當事者ニ於テ合意ヲナスヘキニ先ツテ法律ノ規定ニ準據シ證書ヲ調製シ得ヘキモノアレハナリ而シテ其證書ハ反リテ當事者間ニ於テハ法律ニ均シキ効力ヲ有ス

ルモノナレハ此證書ニ依據スヘキハ勿論ナリ

第二 刑事ト民事トノ間範圍ノ廣狹アリ假令ハ刑事ニ於テハ檢事ノ告クル所單ニ竊盜ナリトスルモ判事ノ理スル所ハ唯ダ竊盜ニ止マラズテ廣ク其汎源ヲ糾正シテ罰スヘキモノハ罰シ免スヘキモノハ免ス其輕重難易ニ從テ自由ノ取調ヲナシ其告クル所ノ以外ノ犯罪ナキヤテ調査スルヲ得之レニ反シ民事ハ唯ダ原被兩造所爭ノ範圍外ニ出ツルヲ得サレハナリ

第二一節 刑事上ノ舉證ニ付キ注意スヘキ要點

刑事ノ證據ハ其類數多アリテ枚舉スル能ハズト雖トモ左ノ項目ヲ標準トシテ舉證スルヲ必要ナリトス

- 第一 犯罪事件ノ性質ニ付テノ證據即チ被告事件重罪ナルカ輕罪ナルカ將タ違警罪ナルカノ證據ヲ舉ケサルヘカラス
- 第二 犯罪事件ノ證據アリトシテ其事實ハ果シテ被告事件ヲ構成スルニ足ルモノナルヤ否ヤノ證據ヲ舉ケサルヘカラス
- 第三 已ニ其事件ヲ構成スル事實ノ證據アル以上ハ其被告人ノ人違ナキヤ否ヤノ證據ヲ舉ケサルヘカラス
- 第四 被告人ノ既ニ人違ナキコトノ明確ナル以上ハ其事件ハ果シテ刑法ニ規定セル如何ナル犯罪ヲ組織スルモノナルヤ否ノ證據ヲ舉ケサルヘカラス

第五 以上ノ諸證舉示シタル以上ハ尙ホ刑法ノ總則ニ定メタル情狀ナキヤ否即チ再犯者ナリヤ將タ無能力者ニ非ラサルナキヤ否ヤノ證據ヲ舉ケサル可ラス

第六 以上ノ證據アルキハ尙ホ被告事件ノ起リタル場所及ヒ日時ノ證據ヲ舉ケサルヘカラス之レ裁判管轄ヲ定メ且ツ時効ノ期間ヲ計算スルニ必要ナレハナリ

第二二節 民事ノ證據ト刑事ノ證據ノ差異

抑モ民事上ノ證據ナルモノハ民法ノ規定ニ從ヒ強大ナル勢力ヲ有スト雖モ刑事上ノ證據ハ甚タ薄弱ニシテ單ニ裁判官ノ心證ヲ確ムルニ過キサルモノトス今左ニ其大要ヲ述ヘン

- 第一 民事上ノ證據公正證書私證書等ハ民事ニアリテハ最モ重ナル證據トナシ彼ノ證人ノ陳述ノ如キハ或ハ僅々タル場合ニ限リテ之レヲ許スコトアルモ其他ノ場合ニ於テハ之レヲ許スコトナシ
- 民法ノ規定ニ依レハ金額五十圓以下ノ事件ニ非ラサレハ人證ヲ許サス其他ノ場合証書ヲ作ルヲ得サル場合等ニ非ラサレハ(例外)決シテ之レヲ許ササルヲ原則トス(民法證據法第六十條)又民事上ニ於テハ一方ノ當事者カ已レニ不利ナル權利上ノ結果ヲ生スルコトアルヘキ事實ニ付キ爲シタル口頭自白ヲ以テ確定不動ノ證據ト爲スト雖モ刑事アリテハ區裁判所ニ屬スルモノ、外自白ノミヲ以テ證據力アリトセス(民法證據法第三十三條)又民事ニアリテハ間接證據トシテ法律上及ヒ事實上ノ推定ナ

ルモノアリ法律上ノ推定トハ法律カ直接證據ナキ場合ニ於テ知レタル事實ヨリ知レサル事實ニ自ラ推及スルモノヲ云フ(民法證據法第七十四條)而シテ其場合ヲ求ムルニ既判力及ヒ取得又ハ免責ノ時効ノ場合ハ公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定ニシテ法律カ人ノ身分ニ關スル或ル資格ヲ付與シ又ハ拒絕スルトキ及ヒ法律カ或ル所爲ヲ其規定ニ背キタルモノト推定シテ取消ストキ等ハ私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定タリ事實上ノ推定トハ法律カ直接ニ證據ナキ場合ニ於テ裁判官ノ明識ト思慮トニ委ヌル結果ヲ云フ例ヘハ貸金ノ證書ナクシテ金員貸與セザルモノト推定スルカ如シ

第二 刑事上ノ證據 刑事上ノ證據ハ民事上ノ證據ト大ニ異ニシテ彼ノ公正證書若クハ私證書ノ如キハ刑事上殆ント其存在ヲ望ムヘカラス蓋シ官吏公吏立會ノ上公正證書ヲ認メテ罪ヲ犯スコトアル可ラサルハ勿論豫メ私證書ヲ認メ置キテ罪ヲ犯スモノモナカルヘケレハナリ例ヒハ某年月日時ニ汝ノ住宅ニ放火スヘシ又ハ汝ヲ毆打スヘシト書面ヲ作り然ル后子其家ニ放火シ毆打スル等ノコトアルモノニアラス假令之レアルモノトスルモ斯ノ如キ書面ハ決シテ法律上有効ノモノニアラスサレハ刑事上ノ證據ハ勢ヒ彼ノ民事ト差異ナカルヘカラス例ヘハ証人ノ陳述ハ民事ニ付テハ價權ノ制限アルモ刑事ニアリテハ之レヲ陳述セシムルカタメニ証人ヲ拘引スルコトヲモ得ヘキモノナリ又刑事ニアリテハ被告人ノ自白ニ重キヲ置カス乃チ他ニ之レト符合ス

ル事實アルトキニ限リ以テ補充ノ證據ト爲スノミ(但シ區裁判所ノ例外アリ)彼ノ民事ニ於テ義務者ノ自白ニ依リ權利義務ノ有無ヲ判定スルモノトハ大ニ異ナルナリ蓋シ被告人ノ自白ニ重キヲ置カサルモノハ他ナシ被告人ハ自ラ罪ヲ犯サハルコトヲ知ルト雖モ是レヲ證明セントスルニハ長キ日時ト夥多ノ手續ヲ要スルカ又ハ取調ノ苛虐ナルヲ恐レテ之レヲ避ケントシテ已ムヲ得ス其意ニ反シテ自白ヲ爲スコトナキニ非ラサレハナリ又自ラ罪ヲ犯シタリト申立ルニ非ラサレハ眞ニ被告人ト爲ルヘキモノニ迷惑ヲ被ラシメンコトヲ慮リ所謂一時ノ義侠心ニ制セラレテ進ンテ自白スルモノナキニアラサレハナリ或ハ眞實被告人タル可キ者ニ誘導セラレテ或ハ食ハシメラルニ金員ヲ以テ自白ヲ爲スモノナキニアラサレハナリ是レ刑事ニアリテ自白ヲ確實不動ノ證據トナサハル所以ナリ若シ自白ヲ以テ被告事件ノ證據ト爲スニ於テハ犯人法網ヲ遁レテ無辜縲紲ニ泣クノ結果ヲ見ルニ至ルヘシ

刑事上ノ證據ト民事上ノ證據ト相異ナルコト概テ前陳ノ如シ
 本法證據ノ部ニ於テ字義ニ付説明ヲ要スヘキモノアリ即チ左ニ
 (イ) 徵憑トハ夫ノ證據其モノト異ニシテ證據ノ補助トシテ判事ノ心證ヲ作ルヘキ凡テノ外觀的ノ事柄ヲ云フ例ヘハ殺人ノ場合ニ地上ニ點シタル血痕ノ如キ之レナリ
 (ロ) 證憑トハ其意義汎濶ニシテ單ニ徵憑ノミヲ云フコトアリ又ハ其結果ノミヲ云

フコアレモ多クノ場合ニハ證據ト徵憑ヲ合稱シタルモノナリ

第廿四節 被告人ノ訊問

第一 被告人ヲ第一着ニ訊問スル理由 檢證又ハ證人訊問ニ付キ急速ヲ要スル場合ノ外先ツ第一ニ被告人ヲ訊問セサルヘカラス其理由ニ二アリ一ハ事實發見ノタメニシテ一ハ被告人保護ノタメナリ(本法第九十三條)

一 被告人ノ出廷スルヤ直チニ其訊問ヲ爲ストキハ虛構ヲ按シ又ハ事實ヲ偽ル少シ若シ之レヲ猶豫スルニ於テハ偽僞ノ事實ヲ構述スル等ノ弊ヲ免レス故ニ急速ニ被告ノ訊問ヲ第一着ニ爲スハ事實發見ノ利益アリ

二 起訴アリト雖モ必シモ其犯罪ヲ以テ被告人ノ所爲ナリト速斷スヘカラス又タ犯罪ノ事實アルモ他ノ原因ニ依テ無罪トナリ又ハ其所爲ハ法律上罪トナラサル等ノ場合ニアリテ起訴アレハ必ズヤ犯人ナリトスルヲ得ス故ニ被告人ヲ第一着ニ訊問スルキハ是等ノ事實ヲ速ニ明確ニスルヲ得若シ然ラズシテ被告人ヨリ先キニ証人等ヲ訊問スルキハ爲メニ無罪ノ被告人ノ名譽ヲ害スルコトアリ特ニ禁錮以上ノ犯人ニアリテハ無益ニ身体ヲ拘束スルニ至ルナリ又有罪被告人ノ場合ニハ爲メニ他ノ罪證ヲ濯滅スルコト等アレハナリ之レ被告人ヲ第一着ニ訊問スル理由ノ二ナリトス

第二 被告人訊問ノ法式 被告人ヲ訊問スルニ付テハ左ノ法式ニ從ハサルモカス

一 豫審判事被告人ヲ訊問スルキハ其陳述ヲスル所ヲ自ラ錄取スルカ又ハ裁判所書記ナシテ筆記セシメテ之ヲ被告人ニ讀聞カセ其陳述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ相違ナント申立タルトキハ署名捺印セシメ又タ相違若シハ變更増減ヲ請フトキハ更正ニ訊問シテ之レヲ更正シタル后更正ニ讀聞セタル後チ被告人ト共ニ署名捺印スヘシ(本法第九十三條第九十五條第九十六條)

二 被告人訊問ハ之レヲ密行スヘキモノナルカ故ニ數人ニ犯ノ場合ニ於テモ各別ニ訊問シテ其通謀ヲ防カサルヘカラス若シ被告人ノ共犯ナルコト又ハ人違ナキヤ否ヤ其他事實發見ノタメ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ他ノ被告人証人其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得ルモノナリ(本法第九十八條)

三 被告人既アルトキハ書面ヲ以テ答ヘシメ聲ナルトキハ書面ヲ以テ之レヲ問ヒ若シ之レ等ノ者文字ヲ知ラサルトキ或ハ國語ニ通セサルトキノ如キハ通事ヲ命スヘキナリ(本法第百條)

法文ニハ雙聲各別ナル場合ヲ想像シタルモ通常ハ雙者ハ其耳必ラス雙者タルモノ多シ然レトモ中年疾病ノ爲メニ啞トナリタルキノ如キハ其言語ニ不自由ナラサルヲ勿論ナリトス

四 通事ヲ爲サシムルニハ正實ニ通譯スヘキ宣稱ヲ爲サシメ而シテ書記ハ通事ノ通譯スル調書ヲ作り之レニ署名捺印スヘシ(本法第百一條)

五 被告人調書ノ騰本ヲ請求スルモ之レヲ下付スヘキモノトス(本法第九十七條)

第三 被告人訊問ノ法則 被告人訊問ハ事實發見ヲ以テ其目的トスルモノナリト雖モ強テ其目的ヲ達セン爲メニ不法ノ手段ヲ用ユルコトヲ許サス但シ機ニ臨ミ諭戒スルカ如キハ妨ケナキモノトス其不法ノ手段トハ左ノ如シ

一 暴行 往時ニアリテハ其罪ヲ白狀センカタメニ拷問ヲ用ヒタリト雖モ現今ノ法律ニ於テハ嚴格ニ之レヲ禁スルノミナラス却リテ之レヲ以テ一ノ犯罪トセリ然レモ實地犯人ヲ取調フニ當テハ感念一ニ犯人ノ頭上ニ傾射シテ動モスレハ事暴行ニ涉ル等ノ弊ナキ能ハス之レ大ニ注意ヲ要スヘキコトナリ

二 恐嚇 恐嚇トハ事ヲ設ケテ被告人ヲ恐激又ハ畏懼セシムルモノヲ云フ假令ハ汝白狀セズンハ汝ノ父ノ曾テ殺人罪ヲ犯シタル事實ヲ取調フヘシト云フカ如キ之レナリ

三 詐言 詐言トハ假令ハ他ノ共犯人ハ皆既ニ白狀セリト詐ルカ如キヲ云フ

四 誘導 事ヲ構ヘテ其白狀ヲ誘導スルヲ云フ假令ハ證據既ニ充分ナルカ故ニ汝ノ罪アルコトハ明カナリ寧ロ早ク其罪ニ服スルニ加カサルヘシト云フカ如キ之レナリ

自白ハ感想上諸般ノ證據中ニ在テ最モ有力ノモノタリ然レトモ之レヲ得ンガタメ前項ノ手段ヲ用フルハ公平正直タルヘキ判事ノ職務ヲ汚濁スルノミナラス暴行詐言恐嚇等

ヲ以テ強テ被告人ノ自白ヲ得ルハ其名義ニ於テハ既ニ野蠻的治罪ノ方法ヲ採ラズトナシテ其實尙ホ痕跡ヲ遺留シテ顧ミサルモノト云ハサルヲ得ス且ツ此場合ニアリテハ被告人ノ自白モ亦任意ノモノニアラサルカ故ニ到底無効タルヲ免カレサルナリ判事又ハ判事ニ屬スル訊問ヲ爲スヘキ檢事及ヒ司法警察官タルモノ慎マズンハアルヘカラス然リト雖モ單ニ眞實ノ事ヲ以テ被告人ヲ説諭スルハ公義ニ於テ害惡ナク且ツ被告人ノタメニ寧ロ利益トナルヘキモノナレハ之レヲ行フモ妨ケナキモノトス(本法第九十四條)

第廿五節 對質

對質トハ被告人ト他ノ被告人證人其他ノモノト一場ニ列席セシメテ雙方供述ノ異同ヲ辨明糺質セシムルモノニシテ被告人ノ共犯人ナルコト人違ナキコト其他事實ヲ發見スルニ足ルヘキ一切ノ模様ヲ證明スルカタメニスル豫審處分ナリ(本法第十八條)

第廿六節 檢證

檢證トハ重罪輕罪ヲ犯シタル場所其他事實ヲ發見スルタメ必要ナル場所ニ就テ被告事件ノ情況ヲ檢視シテ其犯狀ニ付キ調書ヲ作ル處分ヲ云フ假令ハ犯罪ヲ証明スヘキヲ又ハ被告人ノ利益トナルヲ又ハ證據物件ヲ差押フル等ノコトヲ爲スヲ云フ即チ第二百二條以上第二百六條マテノ處分ヲ包含スルモノナリ

第廿七節 檢證ヲ爲スヘキ場合及コレヲ爲ス理由

豫審判事ハ事實發見ノタメ臨檢ヲ必要トスルハ犯罪ノ場所其他犯人ノ逃走シタル場

所潜伏集會シタル場所脏物ヲ藏匿シタル場所等ニ臨ミテ檢証スヘシ其之レヲ爲ス理由ハ左ノ如シ(本法第百二條)

第一 豫審判事現場ニ臨ミ實際ノ模様ヲ目撃スルトキハ被告人證人等ノ供述シ能ハサル所ヲ知ラン隨テ其供述ノ虛實ヲ識別スルヲ得ヘク且ツ犯罪ノ證憑其他各種ノ模様ヲ詳悉シテ其心證ヲ得ルニ便益アリ

第二 豫審判事犯罪ノ場所ニ臨檢シ公衆ヲシテ其處分ノ迅速精密ナルコトヲ知ラシムルトキハ未タ其裁判ナキモ社會ノ平安寧ヲ回復スルノ便益アリ

如何ナル犯罪ニテモ多少犯罪ノ場所ニ其痕跡ヲ遺サ、ルモノアラス其痕跡ハ獨リ犯罪事件ノ存在ヲ證明シ得ヘキノミナラス或ハ證憑ト爲リ或ハ事實ノ推定トナリ又時アリテ犯人ヲ發見スルコトアリ假令ハ其地ニ印セル足跡ハ被告人ノ足跡ニ符合スルカ如キ門戸ヲ破リタル刀痕ハ被告人ヨリ押収シタル兇器ニ符合スルカ如キ是レナリ(本法第百二條)

第廿八節

檢證調書ノ必要及ヒ其掲載スヘキ諸種ノ模様

檢證ハ現場ニ臨ンテ諸種ノ情況ヲ實檢スル處分ナリ然ルニ諸種ノ情況ハ親シク目撃シタル其人ニアラサレハ之ヲ知ルコト能ハス故ニ第百三條ニ記スル諸目ノ如キモ素ヨリ其要領ニ過ニ備ヘンメ又公判判事其他親シク檢證セサル、モノ、クメニ其目撃知悉シタル諸種ノ

模様ニ付キ調書ヲ作ルヘキコトヲ命セリ而シテ犯罪事件ハ千種萬別ニシテ其模様ノ如キハ法律ヲ以テ豫定スル能ハス故ニ第百三條ニ記スル諸目ノ如キモ素ヨリ其要領ニ過キス故ニ犯罪ノ證憑タルヘキ諸種ノ模様ハ網羅シテ遺漏ナキヲ要ス今法文ノ項目ヲ掲クレハ左ノ如シ(本法第百三條)

第一 犯罪ノ性質、犯罪ノ性質トハ重罪輕罪違警罪ノ區別テイフニアラス殺人ニ付テ

ハ謀殺ナルヤ故殺ナルヤ歐打殺ナルヤ又ハ過失殺ナルヤヲ區別シ盜罪ニ付テハ其竊盜タルヤ強盜ナルヤヲ區別スルヲ云フ此等ノ性質ハ犯罪ノ輕重ニ關スルノミナラス又擬律ヲ異ニスルモノナルカ故ニ法律ハ其模様ニ付テ調書ヲ作ルヘキコトヲ命シタリ

第二 犯罪ノ方法、犯罪ノ方法トハ人ヲ殺スニ毒藥ヲ以テシタルカ兇器ヲ以テシタル

カ將タ支解折割其他慘虐ノ所爲ヲ以テシタルカ又タ竊盜ヲ爲スニ兇器ヲ携帯シタルカ或ハ門戸墻壁ヲ踰越損壞シタルカ又其毒藥兇器ハ如何ナルモノカ、如キ即チ犯罪ノ手段之レナリ犯罪ノ方法ニ因リ大ニ其刑罰ヲ異ニスルモノナリ例ヘハ單純ノ故殺ハ無期徒刑ニ過キサシモ毒物ヲ使用シ若シクハ支解折割其他慘虐ノ所爲ヲ以テシタル者ハ死刑ニ處セラル、カ如キ又同一ノ竊盜ト雖モ門戸墻壁ヲ踰越損壞シテ入りタル者ハ加重セラレ又兇器ヲ携帯シタルカ如キハ重罪ニシテ輕懲役ニ處セラル、カ如シ故ニ詳細ニ其取調ヲ爲サ、ルヘカラス

第三 犯罪ノ日時 犯罪ノ日時トハ其罪ハ何年何月何日ニ犯シタルヤ又其犯時ハ晝間ナリヤ將タ夜間ナリヤトイフガ如キ是レナリ而シテ犯罪ノ日時モ亦罪ノ有無刑ノ輕重ニ關係テ及ホスモノナルヲ以テ詳ニ其取調ヲ爲サ、ルヘカラス何ントナレハ被告人ノ年齢ハ不論罪及ヒ宥恕減輕ノ原因タルヘキモノニシテ其年齢ハ犯罪ノ日ヲ以テ起算スヘキノミナラス同一ノ家宅侵入罪ニ在テモ其晝間タルト夜間タルトニ依リテ其刑ヲ異ニスル等ノ關係アルヲ以テナリ。

第四 犯罪ノ場所 犯罪ノ場所トハ其犯罪ノ場所ハ公然タル所ナルヤ否ヤ若クハ何府縣何郡何町村字何々ノ地若クハ山林ナリシヤ原野ナリシヤ人家稠密ノ場所ナリシヤ(獸獵違犯)ノ如キヲ云フ而シテ之ヲ其調書ニ記載スル所以ハ彼ノ猥褻罪ノ如キハ其犯所ノ公然タルヤ否ヤトニ依テ罪ノ有無ヲ異ニスルノミナラス刑ノ輕重ニモ關係シ且ツ場所ヲ確ムルノ最モ重ナルモノハ裁判所管轄ヲ定ムルニ關係ヲ生スルヲアレハナリ。

第五 被告人ノ入逮ナキコトヲ證明スヘキ摸樣 被告人記憶セル被告人ノ人相着服又ハ其携帶品等ノ摸樣チイフ此取調ハ被告人ノ誰タルヲ認定スルニ必要ナレハナリ

第六 檢證時間 檢證ノ時間トハ檢證ヲ始メタルヨリ終リタルマデノ時間假令ハ檢證處分ハ午前何時何分ニ着手シ同時何十分ニ終リ云々ト云フ如キ之レナリ之レヲ記載スル所以ハ種々其必要アルモ第百七條ノ制限ニ背カサルカ如キ又ハ現行ノ場合ニア

リテハ檢事ノ起訴ナキモ公訴ヲ犯シタルモノトスルヲ以テ公訴提起ノ日時ヲ知り隨テ公訴ノ時効ニ關係スル等種々ノ理由ニ出テタルモノナリ且ツ第七十八條ノ制限ニ從テ日出前日没後ニアラサルヲ証明スルニアリ若シ之レヲ記載セサルニ於テハ日出前日没後ノ區別判明セサルヲ以テ檢證調書ノ効力ノ有無ニ關スルヲ以テナリ

第廿九節 搜索

搜索ハ被告人ノ住所又ハ犯人及ヒ証據物件ヲ藏匿シタル疑アル者ノ住所又ハ其他ノ場所又ハ全上ノ者ノ身体并ニ之レニ屬スル物件ニ付キ搜索ヲ爲シ犯人及ヒ証據物件ノ差押ヲ爲ス處分ヲ云フモノニシテ夫ノ司法警察權ノ搜索ト違ヒ外形的ノ處爲ヲ云フ故ニ搜索ニハ住所ニ係ルモノト身体物件ニ關スルモノトアリ(本法第百四條)

第一 住居搜索及ヒ住居搜索ヲ爲ス法則住居搜索トハ被告人ノ住所又ハ犯人及ヒ証據物件藏匿ノ疑ヒアル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲シ其發見シタル物件ヲ差押フルニアリ故ニ住居搜索ヲ爲スニハ其手段トシテ臨檢ヲ爲サ、ルヘカラス而シテ其目的ハ常ニ物件差押ト犯人押縛トノ二ヶニ在リ

住居搜索ハ公益上ノタメニスル一ノ特別處分ナレハ特ニ嚴重ヲ旨トシテ其法則ヲ守ラサルヘカラス即チ搜索處分ニハ住居本人ノ立會ヲ要シ若シ不在ナルトキハ同居ノ親屬此等ノモノ尙ホ不在ナルトキハ市長町長村長書記助役等ノ立會ヲ要ス尙ホ此等ノ公吏差支アルトキハ隣佑二人以上ノ立會ヲ得テ搜索スヘシ法文ニハ本人親族及ヒ

市町村長トノミテ明示セズト雖モ第七十八條ノ規定ヲ違ニ利用スルモ敢ヘテ差支ナシ只タ彼レハ人ヲ搜索スルニアリテ之レハ住所ヲ搜索スルノ差アルノミ特ニ訴訟法ハ比附援引ヲ爲スモ原則上取テ差支ヲ生スル事ナクハナリ特ニ法律ハ住所ヲ侵スヲ重スル餘リ立會人ヲ要ストスル以上ハ法律ノ指示セサル立會人ト雖モ豫審判事一人ニテ之レヲ爲シタルニ比スレハ亦タ其法律ノ精神ヲ得タルモノト云フヘキナリ已ニ隣佑ノ立會ヲ得テ搜索スヘシトスル上ハ雇人ノ立會ヲ得テ搜索スルヲ得ヘキハ言ヲ俟タス

而シテ住居搜索ハ日出前日没後ハ之レヲ爲スコトヲ得ス之レ住所搜索ハ固ト違憲ノ所業ニシテ何人モ侵害スルヲ得サルヲ公益上不得止ニ出テタルノ特定ナレハ法律上此特權ヲ附與セラレタル豫審判事ト雖モ本法第七十八條ノ制限ニ從フヘキハ當然ナリ然レトモ第七十八條但書ノ場合及ヒ家主ノ承諾ヲ得タルキハ固ヨリ差支ナシ(本法第百四條)

第二 身体及ヒ附屬物件ノ搜索

第百五條ニ規定スルカ如ク予審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明スヘキ物件ヲ藏匿スル疑ヒアルモノ、身体及ヒ之レニ屬スル物件ニ付キ搜索ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ若シ予審判事ノ搜索權ヲ以テ單ニ住居ノミニ限ルニ於テハ證據蒐集ノ處分ヲ完全ナラシムルヲ得ス又證據物件ヲ藏匿スルハ必ズシモ住居ノミニ限ルニアラサレハナリ

故ニ本法第百五條ハ予審判事ニ於テ被告人又ハ證據物件ヲ携帯セリト思料スルモノ、身体及ヒ其携帶品等ニ就テ搜索ヲ爲スコトヲ許シタルモノナリ(本法第百五條)

第三十節 差押フヘキ物件及其處置

檢證搜查ノ結果トシテ差押フヘキ物件即チ事實ヲ證明スルニ足ルヘシト思料シタル物件ニ過キスト雖モ概シテ左ノ三種トス

第一 犯罪ノ用ニ供シタリト思料スヘキ物件即チ兇器ノ如キモノナリ

第二 犯罪ニ因リ得タリト思料スヘキ物件即チ贓物ノ如キ之レナリ

第三 右ノ外總テ事實發見ノタメ必要ナル物件即チ犯時着用シタリト思料スヘキ衣類

其他遺留シタル携帶品其他有形的無形的ノ證據トナルヘキ一切ノ物件之レナリ

而シテ物件ヲ差押ヘタルトキハ其増減變換ヲ防カンカタメ認印ヲ爲シ尙其數量品質等ヲ明確ナラシメンカタメ目錄ヲ作ラサルヘカラス但シ差押物件ヲ監護スルハ裁判所書記ノ擔任ナリトス(本法第百六條)

第卅一節 臨檢搜索物件差押ニ付(其日ニ終ラサル時ノ處分)

臨檢搜索物件差押ノ處分其日ニ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得而シテ看守者ハ何人ヲ以テ之レニ充ツヘキヤ曰ク公力士タル巡查憲兵卒ヲ以テスルヲ通例トスト雖モ山間僻處ノ地或ハ巡查憲兵卒ヲ使用スルコト能ハサル場合ニ在

ヲテハ其所在ノ市町村長ヲシテ看守セシムルヲ得ヘク又通常人民ヲシテ看守セシムルモ妨ケナシ犯罪人ヲモ尙ホ通常人民ニ責付シテ看守セシムルコトアリ況ンヤ證據物件犯所等ノ看守ニ於テオヤ(本法第百七條明治十五年二月内務省訓令參照)

第卅二節 差押物件ヲ被告人ニ示シテ辨解ヲ爲サシムル理由

被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ示シテ辨解ヲ爲サシムヘシ其辨解ヲ爲サシムル理由左ノ如シ(本法第百八條)

第一 不實ノ事ヲ構ヘテ陳述スルモノハ言語澁滯前後矛盾スル等其事實ヲ掩ハント欲シテ能ハサルモノアリ故ニ若シ犯所ニ遺留シタル物件住居ニ藏匿シタル兇器贓物等ヲ示シテ其理由ヲ訊問スルトキハ終ニ其自白ヲ得ヘキノミナラス縱令ヒ自白ヲ得サルモ其辨解ノ模様ニ依リ其實情ヲ得ヘキナリ

第二 右ニ反シ被告人若シ無罪ノモノニシテ眞ニ一時ノ嫌疑ニ過キサルトキハ其辨解明瞭ニシテ訊問ニ對シテ躊躇スル所ナク亦其實情ヲ得ヘキナリ且ツ其物件ノ何人ニ屬スルヤ否ヤヲ確ムル等ノ理由ニ出テタルモノナリ

第卅三節 臨檢搜索及ヒ物件差押ノ處分中現場ノ取締

臨檢搜索及ヒ物件差押ノ如キハ一個ノ豫審處分ナリ然ルニ若シ何人ニテモ自由ニ其場所ニ出入スルニ於テハ獨リ予審察行ノ趣旨ニ背反スルノミナラス証人トナルヘキ者又

ハ外人ニシテ濫リニ入場セシムルニ於テハ終ニハ証憑ヲ隱蔽脱漏シテ臨檢其處分ヲシテ全ク無効ナラシムルノ恐レアルヲ以テ其處分中ハ何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルコトヲ得若シ其禁ヲ犯スモノアルトキハ之レヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之レヲ留置スルコトヲ得即チ人身拘束ノ例外タル不得止ノ處分ナリ(本法第百十一條)

第卅四節 檢證搜索物件差押ノ委囑

以上檢證搜索物件差押ノ純然タル豫審處分ニシテ常人ノレヲ爲スルハ違憲ノ所爲ニシテ犯罪タルヲ免カレヌ司法警察官又ハ檢事ト雖モ之レヲ爲スルハ職權外ナレハ其制裁ヲ免レヌ特ニ此レ等ノ處分ハ憲法ノ例ナレハ嚴重ノ解釋ヲ要スヘキモノニシテ決シテ其範圍ヲ擴張スヘカラス然レトモ法律ハ便宜上或ル場合ニ於テハ之レカ處分ヲ區裁判所判事ニ囑托スルヲ得ヘキモノナリ舊治罪法ニアリテハ此ノ囑托ハ司法警察官ニモ囑托スルヲ得ヘシ云々トノ布告アルモ本法改正ト共ニ消滅ニ歸シタレハ今ヤ司法警察官ハ臨檢搜索物件差押ヲナスヘキ場合ナシ但シ現行犯ノ場合ニテ事急速ノキニ限リ假シニ其處分ヲ爲スル得然レモ拘留狀ヲ發シ又ハ罰金又ハ賠償ノ言渡又ハ宣誓ノ式ヲ履行スルノ權ナシ尙ホ詳細ハ現行犯豫審ノ場合ヲ參照スヘシ(本法第百十二條)

第卅五節 官署諸會社ノ取扱ニ係ル物件及ヒ信書ヲ差押ヘ開披スル手續

本法第百十三條ニ曰ク豫審判事ハ事實發見ノタメ必要ナリトスルトキハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其理由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發送シ若クハ此等ノ者ニ對シ發信シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但シ受取証書ヲ渡サハルベカラズ此レ信書ノ秘密ハ家宅搜索トモ何人モ侵スヘカラサルハ憲法上不可動ノ原則ナリト雖モ公益ノタメニハ私益ヲ害スルコトハ國家行政上亦タ不得止ノ規定ナリ之レ第百十三條ニ明記スル所以ナリ茲ニ研究シ置クコトハ現行犯ノ場合ニ於テハ檢事及ヒ司法警察官モ遞送物件及ヒ信書ヲ差押開披スルコトヲ得ルヤ如何ノコト之レナリ曰ク其書類物件ハ之レヲ差押フルコトハ差支ナキモ開披スルコト能ハサルモノトス何者秘密ヲ開披スルハ特リ豫審判事ニノミ許シタルモノナレハナリ

第卅六節 物件差押及ヒ信書ヲ開披スルコト能ハサル場合

本法第百廿五條ニ列記スル各人ノ所持品ニシテ默秘スヘキ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾ヲ得ルコトアラサレハ差押開披スルコトヲ得サルモノトス蓋シ醫師隱婆等ハ裁判所ニ於テモ證言ヲ拒ムヲ得ヘキモノナレハナリ

第卅七節 證人鑑定人

證人トハ即チ偶然犯罪ノ場所ニ在リタルカタメ若シクハ犯罪前後ノ情況ニ就テ見聞スル所アリテ而シテ判事カ檢証スルコト能ハサル事柄ヲ陳述スルモノヲ云フ

鑑定トハ特種ノ學藝職業ニ依リ經驗アル者犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ檢案考査スルヲ云フ

第卅八節 證人鑑定人呼出狀ノ程式

證人鑑定人ノ呼出狀ハ本法第二十條書類調製ノ規定ニ從フノ外尙ホ左ノ條件ヲ記載セサルヘカラス(本法第百十五條第百廿六條)

第一 證人鑑定人ノ住所職業氏名 是レ其人違ナカラシメ且ツ其送達ヲ容易ナラシメ又ハ被告人ノ親族姻族ノ干係ナキヤ否ヤヲ確ムルノ必要ナリ

第二 出頭ノ日時場所 出頭ノ日時場所ヲ記載スルハ證人ニ其日時場所ヲ知ラシムルカタメナリ且ツ呼出シニ應セサル場合ニ於テ罰金ヲ言渡ニ必要ナリ

第三 訊問ヲ要スヘキ被告事件及證人鑑定人トシテ呼出スコト 之レヲ記載スルハ其呼出サル、事實及其訊問又ハ鑑定ノ事實ヲ知ラシムルカタメナリ

第四 其呼出狀ニ應セサルキノ制裁 之レヲ記載スルハ證人鑑定人等ヲシテ其出頭ヲ忽ニセシメ且ツ其制裁ヲ知ラシムルカタメナリ

而シテ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間ニハ少クトモ二十四時間ノ猶豫アルコトヲ要ス若シ即時ニ出頭ヲ命スルハ證人鑑定人ノ家事上ニ不都合ヲ生スヘケレハナリ

第卅九節 證人呼出ニ應セサルモ其制裁ナキ場合

證人トナルハ國民タルノ義務ニシテ之レヲ拒ムコトヲ得スト雖モ疾病其他正當ノ事故

アルニ於テハ出頭セシムルヲ得ズ故ニ証人ニ於テ其事由ヲ申立タルニ於テハ豫審判事ハ其所在ニ付テ訊問スルコトアルヘク又管轄外ナルトキハ其管轄區裁判所判事ニ囑托シテ訊問スルコトモアルヘシ而シテ茲ニ研究スヘキコトハ疾病ニモ輕重ノ差アリ正當ノ事故ニモ公私ノ別アリ單ニ疾病ト云ヒ正當ノ事故ト云フノミニテハ未タ詳ラス要スルニ疾病ト云フキハ疾病ノタメニ出頭スルコト能ハサル醫師ノ証明書アルカ又正當ノ事故トハ天災地變其他公務ノ繁多或ハ父子ノ重病ニ付看護ニ暇ナキ場合ヲ云フモノナリト解セサルヘカラス(本法第百十六條)

第四十節 現役ノ軍人軍屬ヲ證人トシテ呼出狀ヲ發スル手續

訴訟法ハ陸海軍ノ權内ニ及ホスコトヲ得サルヲ以テ原則トス故ニ証人タルモノ現役中ニ在ル軍人軍屬ナルトキハ其在營中ナルト行軍中ナルトヲ問ハス其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經テ呼出狀ヲ送達セサルヘカラス長官又ハ隊長ハ職務上差支ナキ限りハ即時ニ其呼出ニ應シテ出頭スヘキ認可ヲ與フヘク職務上已ムヲ得サル差支アルトキハ即時其事由ヲ具シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ求ムヘキナリ

第四十一節 證人鑑定人故ナク呼出ニ應セサルキノ制

證人鑑定人ハ國家ニ對スル義務ナレハ必ラス呼出ニ應シテ出頭セサルヘカラス責任

アリ故ニ此責任ヲ盡サ、ルトキハ之レニ對スル制裁ナキ能ハス故ニ第百十八條第百三十六條ニ規定スル所ナリ其制裁ハ左ノ如シ

第一 證人ニ付テハ檢事ノ意見ヲ聽キ不參ヨリ生スル費用即チ送達費等ノ賠償ヲ言渡シ且ツ二圓以上二十圓以下ノ罰金ノ言渡ヲ爲スノ外必要ナル場合ニ於テハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得ヘシ

第二 鑑定人ニ付テハ罰金ノ言渡ヲ爲スノミニシテ拘引狀ヲ發スルコトヲ得ス之レ鑑定人ハ必ズシモ其人ニ限ルニアラス且強制ノ方法ヲ以テ鑑定ヲ爲サシムルモ決シテ完全ナル結果ヲ見ル能ハサルモノナレハナリ

第三 證人時アリテハ再度ノ呼出ヲ發スルコトアリ若シ再度ノ呼出ニ應セサルトキハ二倍ノ罰金ヲ言渡スモノナリ

第四 軍人軍屬ノ証人不參ノキハ軍事裁判所又ハ所屬長官又ハ隊長ニ囑托シテ罰金ヲ言渡スモノナリ

此決定ニ對シテハ第百九十五條ノ規定ニ從ヒ言渡書ノ送達アリタル日ヨリ三日内ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ其抗告ノ結果ハ右言渡ノ執行ヲ停止スルノ効力アルモノトス

第四十二節

證人鑑定人ニ科シタル罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消スヘキ場合及ヒ其理由

豫審判事ハ証人鑑定人ノ罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコト
ヲ正當ノ理由ヲ以テ辨解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ言渡ヲ取消
ス可シ此ノ不參ノ處分ハ刑罰ニハ相違ナキモ其實懲戒ノ趣旨ニ出テ一時取締ノタメニ
スルモノナルヲ以テ正當ノ理由ヲ以テ辨解シタルトキハ取消スヘキハ當然ナリトス

第四十二節 証人鑑定人ノ氏名年齢職業ヲ確ムル理由

証人鑑定人呼出ニ依テ出頭シタルトキハ豫審判事ハ第一若シ其氏名年齢職業住所ヲ問
ハサルヘカラス是レ其人違ナキヤ否ヤチ明確ナラシムルタメナリ且ツ其年齢ハ第二百
十四條ニ掲クル十六年未滿ノ幼者タルヤ否ヤ又ハ訴訟人ノ親族等ニ非ラサルヤチ知ル
カタメナリ其族業ハ第二百二十五條ニ規定セル証言ヲ拒ムチ得ルモノナルヤ否ヤ又ハ鑑
定人ニアリテハ其鑑定ノ能力アルヤ否ヤ等チ知ルカタメナリ又第二ニハ第二百廿三條ニ
記載シタル身分ヲ有スルヤ否ヤチ問シ是レ其証人タルコトヲ得ルヤ否ヤチ定メ宣誓
ヲ命スヘキモノナルヤ否ヤチ決定スルカタメナリ

第四十四節 宣誓及宣誓ヲ爲ス方式

宣誓トハ訴訟事件ニ付愛増畏懼ノ心ナク正實ニ陳述又ハ鑑定スヘキコトヲ誓ハシムル
モノニシテ即チ其人チシテ良心ニ誓テ公益ノタメニ眞實ヲ述ヘシメ何事チモ腹藏ナク
又ハ虚偽ヲ附加セシメサルコトヲ公言セシムルモノナリ蓋シ此ノ式ヲ要スル所以ノモ
トハ夫ノ神意ニ反セスト云フカ如キハ誓ラク之レヲ置キ専ラ証人鑑定人チシテ眞實チ

吐カシムルヲ以テ主トシ併セテ之レヲ偽ルニ於テハ其制裁(偽証)アルヲ示スヲ以テ
其重要ナルチ旨トス而シテ宣誓ヲ爲サシムル方式ハ裁判所書記ニ於テ宣誓書ヲ讀ミ聞カ
セ之レニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記セシムルナ
リ(明治十四年十二月司法省第廿八號達)

第四十五節 法律上證人トナル能力ナキ者及其理由

左ニ列記スルモノハ法律上證人トナル能力ナキモノトス

第一 民事原告人 民事原告人トハ犯罪ニ因リテ損害ヲ受ケタル者カ其賠償ノ要求即
チ私訴ヲ起シタルモノヲ云フ故ニ民事原告人ハ其事件ニ直接ノ利害ヲ有スルモノナ
レハ自己ニ不利益ナル供述ハ爲サ、ルヘク且ツ自ラ起訴シテ自ラ証言スルコトハ道
理ノ許サ、ル所ニシテ若シ民事原告人チシテ証人タルコトヲ許ストセハ原被平等ナ
ルヲ以テ被告人ニモ亦証人タルコトヲ許サ、ルチ得サルニ至ルヘシ是レ法律上能力
ナキ所以ナリ

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但シ婚姻ニ付テハ婚姻ノ解除シタルノミ后ト雖モ
亦同シ 親屬トハ刑法第百十四條第百十五條ニ列記スルモノヲ云フ即チ親屬間ハ相
愛シ互ニ其惡事ヲ隠スル人ノ常情ニシテ法律ノ禁スヘキモノニアラス故ニ之レ等ノ
供述ハ証言トシテ信スルコトヲ得ヌ姻族ハモト婚姻ノタメニ其關係ヲ生シタルモノ
ナレハ愛情ノ點モ亦タ常ニ同一ナリトス故ニ一旦婚姻ヲ解除シタル后ト雖モ其間或

ハ自然親族ノ關係ヲ以テ舊情ヲ忘レズシテ之レヲ曲庇スル所アルカ或ハ解除ノタメニ反リテ怨恨ヲ抱持シテ陷害スルカ如キ私情アルヤモ計リ難シ之レヲ以テ法律上能力ヲ失ハシメタルモノナリ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ之等ノモノ、後見ヲ受クヘキ者 後見人ト被後見人トノ情合モ尙ホ親子ノ愛情ト異ナル處ナキヲ以テ法律上ノ能力ナキコト、セリ

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人 雇人ハ通常雇主ニ對シテ特別ノ情誼アルモノナレハ雇主ノタメニ不利益ナル陳述ハ情ニ於テ爲スヘキモノニアラス隨テ其陳述ヲ信スルヲ得ス同居人モ亦タ同シ而シテ同居人トハ親屬ニモアラス雇人ニモアラサル假令ハ妾婢食客書生等ノ類ヲ云フ(本法第百廿三條)

第四十六節 性質上證人トナル能力ナキモノ及ヒ其理由

左ノ場合ハ性質上證人トナル能力ナキモノトス

第一 十六年未滿ノ者 幼者ハ智識未タ充分發達セス故ニ其見聞スル處モ確實ナラサルヲ以テ陳述スル所モ隨テ信ヲ措クニ足ラサルヲ以テ其能力ヲ失ハシメタルモノナリ之レ只タ法律ノ正面的解釋ナレトモ世上見ル所ニ徵スルニ十六年ノ未滿幼者トモ却テ夫ノ無言ナル漁夫又ハ獵徒ニ比スレハ其智識經驗遙ニ其上ニ出ル者アリ然レ

トモ此レ公ノ秩序ニ關スル法律ノ推定ナレハ絶對的其反証ヲ許サ、ルモノナルヲ以テ如何ナル場合ト雖モ十六年未滿ナルトモハ男女ノ區別ナク証人タル能力ナキモノトセサルヘカラス

第二 智覺精神ノ不充分ナルモノ 白痴癡癲等智覺精神ノ不充分ナルモノハ是非ヲ辨別スル能ハズシテ幼者ト同視スヘキモノナリ故ニ其能力ナキモノトス

第三 瘖啞者 瘖啞者ハ耳聽ク能ハス口亦言フ能ハサルモノナレハ是非ヲ辨別スル智識ノ發達モ幼者ト略ホ同一ナリトス故ニ其能力ナキモノトセリ是レ亦タ世ニハ瘖啞者ト雖モ却リテ常人ヨリ英敏ナル者アルモ公益ニ關スル法律ノ推定ナルヲ以テ十六年未滿ノ幼者ト全シク絶對ニ反對ヲ許サ、ルモノナリ

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者 公權ヲ剝奪スルハ重罪ヲ犯シタルモノニ附加シタル刑罰ナレハ則チ刑餘ノ人ナリ之レ等ノモノハ何レモ一個人ニ損害ヲ加ヘタルト同時ニ社會ニ害ヲ加ヘタルモノナレハ多少社會ノ擯斥ヲ受ケ隨テ其陳述モ亦信ヲ措ク能ハス故ニ其能力ヲ失ハシメタルモノナリ

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ係ルヘキ輕罪事件ニ付キ公判ニ附セラレタルモノ之レ等ノモノモ多少社會ノ嫌疑ヲ受ケタルモノナレハ前項ト同シク其陳述ヲ信スル能ハサルヲ以テ其能力ヲ失ハシメタルモノナリ

第六 現ニ供述ヲ爲スヘキ事件ニ付キ曾テ訴ヘテ受ケ其証憑十分ナラサルニヨリ免訴

ノ言渡ヲ受ケタルモノ 此能力ヲ失ハシメタル理由ハ現ニ供述ヲ爲スヘキ事件ニ付
キ先キニ關係シタルモノナレハ自己ノ利益ナルノミチ主張シテ正實ノ供述ヲ爲サ
ルモノト認定スルヲ以テナリ假令ハ自己ノ惡事ニ付キ新タナル証憑ノ發覺セシ
恐レ故テニ他ノ被告人ヲ曲庇スルカ或ハ陷害セントシテ不公偏頗ナル供述ヲ爲スモ
計リ難シ縱令正實ナル陳述ヲ爲ストスルモ法律ハ之レヲ信セサルヲ以テナリ然リト
雖モ現ニ供述スヘキ事件ニ付キ免訴ノ言渡ヲ受ケタルモノ云々トハ明文ノ指示スル
カ如ク証憑不充分ニテ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者ニシテ權利行爲ニ原因シタル夫ノ正
當防衛ノ如キモノニ非ラサルナリ

以上法律上及ヒ性質上ノ無能力者ト雖モ事件ニ依リテハ其陳述ヲ必要トスル場合ナキ
ニ非ラス若シ必要アルモノ之レヲ聞クヲ得スト絶對的ニ制限スルハ犯人ヲシテ法網ヲ
脱セシメ爲メニ法律ノ威嚴ヲ失スルコトアリ是レヲ以テ法律ハ此場合ニハ法律上及ヒ性
質上ノ無能力ヲ以テ事實參考人トシテ其陳述ヲ聞クヲ許シタリ是レ公益上必要ノ規定
ナリ但シ事實參考人トナルハ宣誓ヲ用フルコトナシ隨テ僞証罪ノ主体タルヲ得ス

第四十七節 證言ヲ拒絶スルコトヲ得ル場合及其理由

左ノ場合ハ証人トシテ証言ヲ拒ムコトヲ得ルモノナリ

第一 官吏公吏其職務上默秘スヘキ義務アル場合 モト官吏公吏ハ國家保護ノ任アル
モノナレハ其義務トシテ証言セサルヘカラサルモノナレトモ又國家保護ノタメニ其

職務上默秘スヘキ義務(例ハ外交官又ハ國事警察ニ關スル如キ)モ負ハシメサルヘ
カラス之レ第二百二十五條第一項ノ規定アル所以ナリ故ニ只々其現任ノ官吏公吏ニ
ノミナラス休職免官ノ官吏公吏モ亦同様ナリトス

第二 左ニ列記スル職業ニ依リ秘密スヘキ義務アルモノモ亦タ証言ヲ拒ムコトヲ得是
レ公務上ニ關係セズト雖モ人ノ陰私ハ濫リニ摘發スヘキモノニアラサルヲ以テ特ニ
法律ハ之レヲ規定セリ

一 醫師藥商穩婆 之レ等ノ營業者ハ衛生ニ關スルノミナラス又タ人ノ性命ニ關ス
ルモノニシテ世人ハ信任シテ毫末モ疑ハサルヲ以テ爲メニ其秘密ヲ告クルモノナ
リ若シ此等ノモノヲシテ濫リニ其營業上ノ陰私ヲ証言セシムルトキハ世人ハ他日
其秘密ノ世上ニ顯表シ後害ヲ恐レテ其疾病ヲ願ミス遂ニハ其身体生命ヲモ害スル
ニ至レハナリ且ツ此等ノ營業者ハ其依頼ノ減少スルヲ恐ルル故ニ其眞實ヲ吐クヲ
欲セス爲メニ僞証罪トナルコトアリ即チ到底眞實ノ申告ヲ得ルニ由ナキモノナリ故
ニ此特例ヲ置キタルモノナリ

二 辨護士辨護人 此等ノ營業者ハ當事者ヲ代表シ若クハ當事者ニ補佐シテ訴訟ヲ
爲スモノナレハ之レ等ノモノヲシテ陰私ヲ証言セシムルニ於テハ當事者ノ私益ヲ
害スルノミナラス法律ノ之レ等ノ營業者ヲ公認シタル趣旨ニ反スルヲ以テ強テ其
ノ証言ヲナサシメサルモノトス

三 公証人 是レ亦ク一二項ノ營業者ノ如ク人ノ依託ニ依テ公正証書ヲ作ルモノナレハ秘密ニ涉ルカ如キコトナキニ似タリト雖モ時トシテハ公正証書ヲ以テ默秘スヘキノ契約ヲ爲スコトナキニアラス故ニ公証人ヲシテ隱密ニ涉ルコトヲ証言セシムルニ於テハ弊害枚擧スヘカラス又々法律カ公証人ヲ公認シタル趣旨ニ反スルヲ以テナリ

四 神職僧侶 神職僧侶ハ改過遷善ノ道ヲ説キ人ヲシテ其非業ヲ懺悔セシムルニ於テハ宗教上其教法ニ反スルノミナラス改惡遷善ノ途ヲ斷絶セシムルニ至ルモノナレハナリ

而シテ証言ヲ拒ムニ付キ爲ス手續ハ如何スヘキヤ曰ク其証言ヲ拒マントスルモノハ其拒絕ノ原因理由即チ其職務上若クハ其身分上知得シタル秘密ナルコトヲ開示シ且ツ之レヲ証明セサルヘカラス然ラサレハ拒絕濫用ノ弊起リ事實証明ノ途ヲ梗塞スルニ至レハナリ(本法第百廿五條)

第四十八節 宣誓又ハ供述ヲ肯セルキノ制裁

証人鑑定人トナリテ出頭スルモ宣誓ヲ肯セス若クハ宣誓ヲ爲スモ供述又ハ鑑定ヲ爲スコトヲ肯セサルモノハ國民ノ義務ニ背キ公務ヲ行フコトヲ拒ムモノナルヲ以テ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聞キ鑑定人ニ對シテ刑法第七十九條ニ照シ証人ニ對シテハ同法第百八十條ニ照シ罰金ヲ科スヘキモノナリ然レモ刑法ニハ故ナク云々トアリテ之ヲ証言

又ハ鑑定スルノ能力ナキ場合ノ如キハ固ヨリ罰金ヲ科スヘキニ非ラサルコト勿論ナリトス(本法第百廿六條第百三十八條)

而シテ此場合ニ於テハ罰金ノ言渡ニ對スル上訴ヲ爲スコトヲ得ルヤ其罰金ノ言渡ニ對シテハ他ノ豫審處分ト同シク抗告ヲ爲スコトヲ得レトモ裁判言渡ノ如ク控訴ヲ爲スヲ許サス而シテ抗告アリタルトキハ其決定ノ執行ヲ停止スヘキモノナリ

第四十九節 証人訊問ノ手續

証人ハ他ノ証人及ヒ被告人ト各別ニ之レヲ訊問ス可シ之レ豫審ハ秘密ヲ旨トスルモノナルカ故ナリ若シ同時ニ訊問セントスルカ豫審處分ノ趣旨ニ反スルノミナラス或ハ他ノ証言ニ雷同セラレ若シクハ被告人ヲ愛憎畏懼スル等ノ私情ヨリ不實ノ供述ヲ爲ス等種々ノ弊害アルヲ以テナリ然リト雖モ事實發見ノタメ必要ナルトキハ對質セシムルコトヲ得ルハ被告ト他ノ証人トニ區別ナキモノトス(本法第百廿七條)

第五十節 証人訊問ノ場所

証人訊問ハ通常裁判所内ニ於テスヘキモノトス然レトモ豫審判事ニ於テ証人ノ供述ヲ明確ナラシムルコトヲ必要ナリトスルカ又ハ事實發見ノタメ必要アルトキハ犯所若クハ犯人ノ住所其潛匿シタル場所證據物件贓物等ノ現在シ又ハ藏匿セル場所等ニ同行シ又ハ其場所ニ呼出シテ其實事ヲ訊問スルコトヲ得ルモノナリ若シ之レヲ肯セサルトキハ尙ホ第百十八條ニヨリ處分スヘキモノナリ(本法第百廿八條)

第五十一節 証人ノ所在又ハ所在地ニ於テ訊問スヘキ
場合及其理由

左ニ記スルモノハ至高ノ身分アル人若クハ至高ノ職務ヲ執ル人ナルヲ以テ証人トシテ
訊問スルニハ其所在又ハ其所在地ニ就キ訊問スヘキナリ(本法第三百二十條)

第一 皇族證人ナルトキハ豫審判事ハ其所在ニ就キ供述ヲ聽カサルベカラズ之レ身
分ヲ尊重スルカタメナリ故ニ第一百十八條ヲ適用スルコト能ハズト雖モ第百廿六條第
一項ハ適用スルコト差支ナシ即チ皇族ト雖モ國民ノ義務ニ背クニ於テハ毫末モ差支
ナキ故ニ常人ト均シク罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ヘシ

第二 國務大臣證人ナルトキ 是等ノ官吏ハ國家樞要ノ政務ヲ執ル至重ノ人ナリ若シ
之レヲ訊問スルニ所在地外ノ裁判所ニ呼出等ノ如キアリテハ樞要ノ政務ヲ妨害スル
ニ至ルベケレハナリ故ニ其官廳内外ヲ問ハス其所在地ニ就キ訊問スヘキモノナリ但
シ國務大臣ハ皇族ト異ナリテ其所在地ノ裁判所ニ呼出シテ訊問スヘキモノナリ是レ
法文ニ所在又ハ所在地トアル所以ナリ

第三 帝國議會ノ議員證人ナルトキ 貴族衆議兩院ノ議員ハ立法ノ大權ニ參與シ其他
國家ノ財政ニ關係スル者ナルカ故ニ亦國務大臣ト同シク其所在地ニ於テ訊問スヘキ
者トス之レ其職務ヲ妨礙セサルカ爲ナリ而シテ本項ノ場合ニハ下ノ二條件ヲ要ス即チ
第一議會ノ開會期間ナルコト第二議會ノ所在地ニ滞在在中ナルコト之レナリ其他ハ一般人

民ト同シク取扱フヘキナリ

第四 外國公使証人ナルトキ 外國公使ノ証人タル場合モ其所在ニ就テ訊問セサルヘ
カラズ且ツ此場合ハ必ラス政府ノ許可アルヲ要ス何ントナレハ外國公使ハ本國ノ主
權ヲ代表スルモノナレハナリ又外國公使ハ第百二十六條ノ規定ヲ適用スルコト能ハ
ス之レ治外法權ヲ有スルモノナレハナリ(明治十五年十月司法省丙第廿二號參照)

第五十二節 鑑定ヲ命スヘキ場合及其命スヘキ事項

豫審判事ハ犯罪ノ顛末ヲ明瞭ナラシムルヲ必要ナリトスルトキハ左ノ事項ニ付キ鑑
定ヲ命スルコトヲ得

第一 犯罪ノ性質 假令ハ殺人ナレハ謀殺ナルカ故殺ナルカ毒殺ナルカ毆打致死ナル
カ過失殺ナルカノ類

第二 犯罪ノ方法 假令ハ殺人ニ刀劍銃砲棍棒ヲ用ヒタルノ類

第三 犯罪ノ結果 假令ハ創傷ノ有無輕重致命ノ遲速又ハ其所爲ノ致命ノ原因藥濟ヲ
用ヒタルヤ否ヤ等ノコトヨシテ鑑定シタル結果ニ非ラズ(本法第百卅五條)

第五十三節 死体ノ解剖又ハ檢視ノタメ墳墓ノ發掘ヲ
命スル場合

鑑定ノヨメ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又ハ既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ
若クハ檢視スルヲメ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得云々トアリテ是レ亦豫審判事特有

ノ權ニシテ常人ニアリテハ皆テ刑法上ノ制裁ヲ免カル、ヲ得サルモノトス（本法第百卅五條第二項）

第五十四節 鑑定書ノ作製及記載スヘキ事項

鑑定人鑑定ヲ結了シタル時ハ其顛末ヲ明瞭ナラシメシテ鑑定書ヲ作製セサルヘカラス而シテ其鑑定書ニハ左ノ事項ヲ詳記スヘキモノトス（本法第四百十條）

第一 鑑定ノ手續 鑑定ノ手續トハ鑑定ヲナシタル方法順序ニ外ナラス其之ヲ記スルハ一ニ其結果ノ正否如何ヲ明了ナラシムルニアリ假令ハ被告人ノ衣服ニ留メタル血痕ニ其藥ヲ灌キ又ハ其他ノ方法ヲ以テ之レヲ分析シタリトイフカ如キ之レナリ

第二 鑑定ノ結果 鑑定ノ結果トハ鑑定ニ因テ鑑定人ノ知得シタル信憑ヲ云フ例ハ被告人ノ衣服ニ留メタル血痕ハ獸血ニアラズシテ人血ナリ而シテ其血痕ハ附着以後幾時間ヲ經過シタルモノナリト云フカ如キ之レナリ

第三 鑑定ノ時間 鑑定ノ時間トハ鑑定ノタメ要シタル時間ニシテ假令ハ何時ニ初メ何時ニ終リタリト記スルヲ云フ之レ其鑑定ノ正否如何ヲ審査スル原由タルノミナラス又費用計算等ヲ爲スニ必要ナレハナリ

而シテ以上ノ如ク鑑定ノ方法ヲ盡スモ其結果ヲ得サルトキ假令ハ致命ノ原由ヲ審査セシトスルモ死後許多ノ日數ヲ經過シ死体腐爛スル等ノ故ヲ以テ原因ヲ審査スル能ハサルトキハ鑑定人ハ只其思料推測スル所ヲ記スヘキモノナリトス

第五十五節 現行犯ノ豫審

現行犯ノ豫審ハ 重罪又ハ輕罪ノ現行犯準現行犯アリテ而シテ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ハ檢事ノ起訴ナキニ豫審ニ着手シ檢事又ハ司法警察官（仮處分）モ或ル制限ニ從テ同上ノ場合ニ於テハ豫審處分ヲ爲スコトヲ得ル變例ノ場合ヲ云フ

第五十六節 豫審判事ハ檢事ノ請求ヲ俟タズ豫審ニ着手スルヲ得ル場合

通常ノ場合ニテハ告ケサレハ理セストノ原則ニ據テ豫審判事檢事ノ請求アルニアラザレバ豫審ニ着手スルコトヲ得ズト雖モ現行犯準現行犯ノ場合ニ於テハ檢事ノ請求ヲ俟タズシテ豫審處分ニ着手スルコトヲ得之レ本法第四百二十二條ニ規定スル所ノ變則ナリ而シテ不告不理ノ原則ノミ墨守スルニ於テハ犯人ヲ逃亡セシメ証憑ヲ湮滅セシムルノ恐レアリ之レ變則ノ規定アル所以ナリトス而シテ此變則ニ必ラス左ノ條件アルヲ必要トス

第一 豫審判事檢事ヨリ先キニ現行犯準現行犯アルヲ知リタルコト 檢事ヨリ先キニ

現行犯準現行犯アルヲ知リタル時トハ檢事ノ起訴スル前ニ之ヲ知リタルコトヲ云フ故ニ檢事ハ現行犯準現行犯アルヲ知リタルヤ否ヤヲ穿鑿スルニ及ハス故ニ假令檢事ニ於テ其現行犯ナルヲ知ルコトアルモ其起訴ナキ以上ハ此特別處分ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ然レトモ實際ニ於テハ豫審判事檢事同時ニ臨檢スルヲ以テ通例トス此場

合ニ於テハ檢事ハ豫審ヲ請求シ且其處分ニ立會ヒ臨時ノ請求ヲ爲ス等凡テ正則ニ復スヘキナリ

第二 其現行犯準現行犯ハ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ナルコト 同シク輕罪犯ニシテ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト區別裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト別アルコトハ構成法ノ規定スル所ナリ而シテ豫審ハ此變例處分ニ着手スルコトヲ得ヘキハ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ニ限ルモノニシテ區裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪又ハ違警罪ナルトキハ豫審ヲ爲スヘキ必要ナキヲ以テ之レ等ノ場合ハ第六十條ノ規定ニ從ヒ官吏又ハ常人ノ資格ヲ以テ被告人ヲ逮捕シテ告發ヲ爲スコトヲ得ヘキノミ

又茲ニ注意ヲ要スル點ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪犯ニモ輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求ムヘキ犯罪ト否トノ區別アリテ其實質煩雜ナルモノハ豫審ヲ求メ輕易ナルモノハ豫審ヲ求サルハ通常ナレハ此場合ニハ此區別ヲ置クノ必要ナシ何者犯人ノ逃走犯罪ノ証憑湮滅ヲ防クノ主趣ニ出テタル變例ナレハナリ

第三 其事件急速ヲ要スルコト 此特別處分ハ其事件急速ヲ要スル場合ニ限ルモノニシテ急速ヲ要セサルハ即チ犯人逃亡証憑ノ湮滅ノ恐レナキハ如キハ通常ノ規定ニ從ヒ檢事ニ告發シ檢事ノ請求ヲ待テ而シテ后チ豫審處分ニ着手スヘキナリ而シテ以上ノ豫審處分ハ特別中ノ亦々特別ナレハ法律ハ速ニ通例ニ復センコト望ムモ

ノナリ是レ本法第四百四十二條第一項ノ末文ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ云々ト規定シタル所以ナリ

又本法第四百四十二條第二項ニハ豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得トアレハ豫審判事ハ犯所ニ臨檢シタル上ニテ令狀即チ勾引狀又ハ拘留狀ヲ發スルノミナラス証人鑑定人ニ對シテ罰金ノ言渡ヲモナステ得ルモノナリ

第五十七節 豫審判事自ラ公訴ヲ受理スル場合

檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事カ現行犯ノ場合ニ於テ檢証調書ヲ作りタルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス固ト豫審判事カ公訴ヲ受理スルハ檢事ノ起訴アルニ由ルト雖モ現行犯ハ一種ノ特別處分トシテ豫審判事現行ノ犯所ニ臨檢シ檢証調書ヲ作ル時ハ假令ヒ檢事ノ起訴ナシト雖モ茲ニ公訴ヲ受理シタルモノトス而シテ此調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載セサルヘカラス之レヲ記スル所以ハ之レ豫審判事カ未タ檢事ノ起訴ナキニ法律上例外トシテ自ラ其事件ヲ受理スルハ實ニ其重罪又ハ輕罪ノ現行犯ニ限ルヲ以テ特別處分ヲ行ヒタルコトヲ証明センカ爲メナリ若シ之レヲ記載セサルニ於テハ後日豫審判事ノ行ヒタル處分ハ現行犯罪ノ場合ナルヤ非現行犯ノ場合ナルヤヲ判然セサルニ於テハ越權ニ出テタルモノナルヤ否ヤノ疑義ヲ生スルニ至レハナリ而シテ豫審判事ハ自ラ公訴ヲ受理シタル場合ニ於テハ速ニ之レヲ檢事ニ書類ヲ送致セサルヘカ

ラス之レ特別處分ナレハ速ニ之レテ通常ノ手續ニ復セシメンカ爲メナリトス（本法第百四十三條）

第五十八節 現行犯罪ノ豫審手續繼續ニ付檢事ノ異議

ニ對スル處分

豫審判事ト檢事ト其意見ヲ異ニシ豫審判事カ已ニ着手シタル豫審手續ヲ繼續スヘキモノニ非ラズト檢事カ陳述スルキハ如何スヘキヤ之レ第百四十三條第二項ニ明定スル如ク檢事ヨリ其豫審手續繼續スヘキモノニ非ラサル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之レテ終結スヘシト蓋シ公訴ハ一旦起リタル以上ハ設令中途ニシテ檢事ハ之レヲ繼續スヘガラズト思料スルコトアルモノレカ爲メ公訴ハ消滅スルモノニアラズ何トナレハ經令ヒ檢事ヨリ提起シタルモノニアラサルモ豫審判事法律ニ從ヒ特例トシテ自ラ受理シタルモノナリトスル以上ハ其公訴タルニ於テ何ソ異ナル所アラシヤ加之公訴權ハ國家ノ所有ニシテ國家ハ唯々其實行ヲ檢事ニ委任シタルノミナレハ檢事ノ意見ニヨリ之レヲ左右スルヲ得サルハ前既ニ述ヘタル所ナリトス若シ檢事ノ意見ニヨリテ之レヲ左右スルヲ得ルトセハ判事ノ獨立ヲ害スルノミナラス亦タ以テ社會ノ公益ヲ害スルニ至ルモノナリ

第五十九節

地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事カ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ル

場合

第一 地方裁判所ノ管轄ニ屬スル犯罪ナルキ

地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事カ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ル場合ハ本法第百四十四條ニ於テ規定スル所ニシテ豫審判事ノ特別處分ノ場合ト同ク左ノ條件ヲ要ス

- 一 檢事豫審判事ヨリ先キニ現行犯（準現行犯）アルコトヲ知リタルコト
 - 二 其現行犯ハ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル犯罪ナルコト
 - 三 其事件急速ヲ要スルコト
- 之レナリ法律ノ正則ヨリ云ヘハ犯所臨檢其他ノ豫審處分ハ獨リ豫審判事ノ任トスル所ニシテ檢事ヲシテ之等ノ處分ヲ行ハシムルハ恰カモ原告人ヲシテ自ラ判事ヲシムルニ異ナラス然レトモ現行犯ハ事件急速ニシテ一刻モ躊躇スベキモノニアラス若シ法律カ職務分轄ノ原則ヲ固守シテ豫審判事ノ到ルヲ待ツモノトセンカ証憑湮滅犯人逃亡ノ憂アルヲ以テ檢事ハ其旨ヲ豫審判事ニ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ許シタルモノナリ然レモ罰金及ヒ賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ許サス之レ罰金及賠償ノ言渡ノ如キハ証人鑑定人等ノ呼出ニ應セサルトキ等ノ場合ニシテ第三條件即チ急速ヲ要セサルノミナラス此等ハ性質上純然タル判事ノ任ニ非ラサレハ能ハサルモノナレハナリ

而ノ檢事カ此處分ヲ行フニ當リ証人鑑定人ノ供述ハ宜警ナク之レヲ聽クヲ得之レ
証人鑑定人ノ供述ハ依リノ供述ニシテ後日更ニ之レヲ呼出スコトヲ得ヘク又急遽ノ
際充分ナル資格ヲ取調フルヲ得ス單ニ事實參考トシテ之レヲ聽クニ過キサレハ敢テ
正式ニ履ムニ及ハサルモノトシタルモノナリ否テ檢事ハ之レヲ爲サシムルノ權ナキ
モノナレハナリ

又地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲シタルトキハ如何ナ
ル處置ヲ爲スヘキヤ曰ク地方裁判所檢事及區裁判所檢事ヲシテ豫審處分ヲ爲サシムル
ハ其事件現行犯ニシテ急速ヲ要シ公益上止ムヲ得サルニ出テタル特別處分ナレハ可成
の通常ノ手續ニ復セシメシコトヲ務メサルヘカラス之レ第百四十五條ニ地方裁判所檢
事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヒ速ニ之レヲ豫審判事ニ送致スヘシト規定セル所以ナリ而
シテ區裁判所檢事ハ証憑書類ニ意見書ヲ添ヒ之レヲ地方裁判所檢事ニ送致セサルベカ
ラズ何トナレハ地方裁判所官轄ニ屬スル場合ハ地方裁判所檢事カ起訴ヲ爲スハ正則ナ
レハ其正則ニヨリ地方裁判所檢事ニ送致スルモノナリ(第百四十五條)

第二 區裁判所管轄ニ屬スル犯罪ナルトキ(第百四十六條)

區裁判所檢事其裁判所管轄ニ屬スル犯罪ノ現行アルコトヲ知リタルトキハ本法第百
四十四條ニ從ヒ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得若シ被告人ニ對シ拘留狀ヲ發
シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲スコシ之レ區裁判所管轄ニ屬スル犯罪ハ本刑五

十圓以上ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金
ニ該ル犯罪ナレハ若シ三日以上ニ亘ルトキハ未決拘留長キニ過キ本刑ヘ其權衡ヲ失
スルニ至レハナリ之レ三日以内ニ起訴ス可シト定メタル所以ナリ

第六十節 司法警察官假ニ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲
スヲ得ヘキ場合

司法警察官ハ以上述ヘタル現行犯ノ場合ニ於テ豫審判事檢事ヨリ先キニ之レヲ知リタ
ルトキハ職務上自ラ進ミ又ハ檢事ノ命令ニ依リ假リニ豫審判事ニ屬スル處分或ル制限ニ
從テ行フコトヲ得而シテ之レヲ行フニ付キ檢事ト異ナルハ拘留狀ヲ發スルヲ得サルコ
ト(イ)及ヒ檢事ノ處分ハ本分ノ處分ナレトモ司法警察官ノ處分ハ假處分ナルノ差アルノ
ミ(ロ)蓋シ拘留狀ハ人ノ身体自由ヲ拘束スルノ効力ヲ有スルモノニシテ特ニ丁寧ヲ要
スヘキモノナレハナリ且ツ此ノ處分ヲナスハ其監督官タル檢事ニアリテモ元來之レカ
處分權ナキモノナレハ其配下ニアル司法警察官ナレハ只タ單ニ罪證ノ湮滅ヲ主トシタ
ルニ出テタルモノナレハ其處分ヲ以テ假處分トシタル所以ナリ

而シテ檢事ノ第百四十四條ノ規定ニ從ヒ特別處分ヲ爲ストキハ先ツ其旨ヲ豫審判事ニ
通知セサル可カラズト雖モ司法警察官ハ此處分ヲ爲スルハ之レヲ豫審判事ニ通知スル
ヲ要セス何ントナレハ司法警察官ハ檢事ノ配下ニ立ツモノナレハ此ノ處分ヲナシタル
事ハ速ニ之テ檢事ニ送致スルヲ以テ足レリトス而シテ檢事ヨリ更ニ之ヲ豫審判事ニ送致

スヘキモノナリ
 而ノ第四百十七條ノ法文ニ曰ク假リニ之ヲ行フ云々トアリ此ノ假リトハ如何ナルコト
 ナ意味ヲタルモノナルヤ曰ク或曰司法警察官カ豫審處分ヲ爲スハ甚キ變例ナルヲ以
 テ檢事ニ於テ更ニ之ヲ爲スニアラサレハ真正ノ効力ヲ有セサルヲ云フ故ニ檢事ハ司法
 警察官ヨリ被告事件ノ送致ヲ受ケタルハ更ニ取調ベ之レヲ豫審判事ニ送致スルモノ
 ナリ是レ即チ假リニ云々ノ文字アル所以ナリト然レモ此ノ說正當ニ非ラズ何者司法警
 察官ノ爲メタル緊急處分ニ付キ檢事之ヲ訂正スヘシトノ法律規定ナシ却テ一切ノ書類
 ニ請求書ヲ添ヒ送致スヘシトアリ之レヲ以テ司法警察官カ現行犯アルコトヲ知リタル
 場合ニ於テハ自ラ進メテ檢事ニ代理シ豫審ノ假處分ヲ爲スヘキコトヲ云フモノニシテ
 其假處分ヲ以テ全ク無効トスルヲ得サルモノナリ然レモ司法警察官ハ自ラ公訴ヲ提起
 スルノ權ナキモノナレハ檢事ハ司法警察官カ爲メタル處分ハ果シテ犯罪ノ事實アリト
 スルハ之レヲ豫審判事ニ送致シテ豫審ヲ求メ又ハ犯罪証憑充分ナル輕罪ナルハ直
 ニ公判ニ送致スヘシ若シ此ノ事件ニシテ犯罪ニ非ラズト認定スルハ檢事ノ自由ニ任
 シテ他ノ容嘴スヘキモノニアラス故ニ第四百十八條ノ場合即チ豫審判事ニ送致スヘ
 トハ其事件ノ犯罪ナリト思量スルハ限ルモノトス

第六十一節 保釋責付ノ解

夫レ裁判言渡確定セサル前ニ於テハ被告人ヲ無罪視ス可キハ一般ノ原則ナリ然レモ之

レテ常人ト全一ニ未決拘留ノ制ナク人身ノ自由ヲ拘束セサルニ偏スルハ被告人ハ其
 証據ヲ漂滅スルニ力ヲ專ラニシ若シ既ニ証憑充分ニシテ蔽フヘカラサル場合ニハ其身
 ナ隱避スルノ策ヲ搆シ送ニハ如何ナル犯罪モ之レヲ罰スルヲ得サルノ結果ヲ見ルニ至
 ル之レ未決拘留ノ制ヲ設ケテ其身体及ヒ自由ヲ拘束スルニ至ルモノニシテ蓋シ亦止ム
 ヲ得サル手段ナリ然レモ未決拘留ハ固ト人間ノ貴重スヘキ自由ヲ拘留スルノ大ナルチ
 以テ可成的之レヲ行フ區域ヲ狭少ニ爲シ即チ止ムヲ得サル場合ニ限リテノミ爲ス可キ
 事ヲ希望セザルヘカラス之レ保釋責付ヲ許ス所以ナリ而シテ保釋責付ハ何レモ人身ノ自
 由ヲ束縛シアル被告人ニ對スル恩典ナリ否ナ未決拘留ハ人身拘束ノ必要アリテナシタ
 ルモ既ニ其理由ヲ除去シ即チ罪証漂滅犯人逃亡ノ恐ナシト思量スルニ於テハ直ニ原則
 ニ復シ其拘束ヲ解クハ亦タ當然ナリトス

第六十二節 保釋ニ要スヘキ條件

豫審判事ガ未決拘留ヲ受ケタル被告人ニ對シ保釋ヲ許スニハ五個ノ條件ヲ必要トス

- 第一 勾留狀ヲ受ケタル審中ノ被告人ナル事
- 第二 被告人ノ請求アルコト若シ被告人無能力ナルハ法律上ノ代理人ヨリ請求アル事
- 第三 檢事ノ意見ヲ聽キタル事
- 第四 何時ニテモ呼出ニ應ジ出頭スヘキ証書ヲ差出シタル事

第五 保証ヲ立テシムル事
之レナリ(本法第百五十條)

第六十三節 保証ヲ立テシムル方法及ヒ保証ノ金額

保証ヲ立テシムルニ日常流通ノ金錢ヲ以テスルハ最モ簡便ナリト雖モ時トシテハ被告人又ハ法律上ノ代理人ニ於テ之レヲ所持セザルコトアルベシ故ニ法律ハ左ノ三個ノ方法ヲ設ケタリ

- 第一 金錢ヲ差出スコト
- 第二 有價証券ヲ差出スコト(例ヒハ無記名公債ノ如キ)
- 第三 裁判所ノ管轄地内ニ住ル且ツ充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツベキ保証書又ハ金員ヲ差出スコト

保証ノ金額ハ一定ノ制限ヲ立ツルヲ得ズ何ントナレハ被告人ノ逃亡ノ恐ナキハ其金額多カラズシテ可ナルベシ又逃亡ノ恐ナキモ事件ノ如何ニ依テ其金額多クセサルヲ得サルカ如キ其ノ事件ノ模様ニ依ルモノナレハナリ故ニ法律ハ其金額ハ判事ノ認定スル所ニ一任シ保釋ヲ許ス言渡書ニ之ヲ記載セザルベカラズト規定セリ(本法第百五十二條第百五十一條)

第六十四節 保証金ノ没収

豫審判事ハ保釋中ノ被告人ニ二十四時前ニ呼出ノ報知ヲ爲シ其呼出ヲ受テ正當ノ事由ナクシテ出頭セザルハ檢事ノ意見ヲ聽キ保証金ヲ沒收スルコト得ルモノナリ然レモ

其沒收スヘキ金額ハ全部又ハ一部ナリトス何ントナレハ呼出ニ應ゼザル情狀ニモ輕重アリ或ハ逃亡シ或ハ潛匿シ或ハ單ニ疎虞懈怠ニ依リテ其呼出ニ應ゼザル者アル者ナレハナリ故ニ沒收スヘキ金額ハ一ニ豫審判事ノ認定ニ一任シタル者ナリ(本法第百五十四條)

第六十五節 保釋ノ言渡ヲ取消スヘキ場合

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ保釋ノ言渡ヲ取消スヘキ者也即チ左ノ如シ(本法第百五十五條第百五十六條參照)

- 第一 豫審判事保証金ヲ沒收シタル時
 - 第二 豫審判事が保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリト思料シタル時
 - 第三 被告事件重罪ナリト思料シ其裁判所ノ重罪公判ニ付スルノ言渡ヲ爲シタル時
- 然リ而シテ豫審判事保証金ヲ沒收シタル后チ免許ノ言渡ヲナシ又ハ違警罪若クハ單ニ罰金ノ刑ニ該ル輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタル時又ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付スヘキ者ナリ之レ初メヨリ法律上勾留スヘカラサルモノナリ勾留シタルモノナレハナリ而シテ其初メニ於テハ罪質ノ如何モ知ルヘカラサルモノナレハ之カ沒收ヲナシタルモ既ニ其爲スヘカラサル事ノ明了ナルニ於テハ既ニ沒收シタル金額ヲ還スヘキハ言ヲ待ツニ違アラサレハナリ之レ第百五十七條ニ規定シタル所以ナリ

第六十六節 保証金ヲ還付スヘキ場合

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テハ保証金ヲ還付スヘキ者トス

- 第一 豫審判事其事件ノ取調ヲ爲シタル后チ免訴ノ言渡又ハ違警罪若シクハ罰金ニ

係ルヘキ輕罪ニ付キ公判ニ付スル旨渡ヲ爲シタル件

第二 保釋ノ旨渡ヲ取消スル

モト保証金ヲ納メ置クハ保釋アルカ爲メナリ故ニ前項ノ場合ニアリテハ即チ保釋ノ消滅シタル以上其ノ担保ナル保証金モ亦ク隨テ必要ナキヲ以テ被告人ニ還付スヘキハ當然ナリ然リト雖モ前項ノ場合ニハ保証金ノ金額ヲ還付スヘキ者ト速了スベカラズ保証金ノ内ニアモ全額ヲ沒收スルコトモアリ又タ一部ヲ沒收スルコトモアレバ一部ヲ沒收スルル件ハ其ノ殘額ヲ還付スヘキモノニシテ既ニ沒收シタルモノマテモ還付スルニ非ラサルナリ(本法第百五十七條參照)

第六十七節

責付ヲ爲ス場合及責付ヲ爲スニ付必要ナル條件

豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トモ問ハズ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スル事ヲ得故ニ責付ヲ爲スニ付テハ左ノ條件ヲ必要トス(第百五十九條第百六十條)

第一 豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キタルコト

第二 親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ジ被告人ヲ出頭セシムベキ證書ヲ呈出セシムルコト

然リト雖モ被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セザルル件ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ノ旨渡ヲ取消スベキハ亦ク保釋ノ場合ト異ナルコトナキモノトス而シテ以上保釋及ヒ責付ニ關スル

規定ハ豫審ノ規定ナルモ公判裁判所ニ於テモ適用スヘキモノナリ

第六十八節

豫審終結ヲ爲スヘキ場合及ヒ豫審終結ニ付テノ手續

豫審判事カ豫審ヲ終結スヘキ場合ヲ別テ二トナス即チ左ノ如シ(第百六十一條)

第一 被告事件其管轄コアラスト思料シタル件

第二 他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル件

以上二個ノ場合ニ於テ豫審判事ハ豫審ヲ終結セサル前ニ於テ先ツ檢事ノ意見ヲ聽カサルヘカラス之レ檢事ハ公訴ノ原告者ニシテ之レヲ實行スルモノナレハナリ其處分ニ付意見ヲ述ルハ當然ニシテ又豫審判事ノ專横ヲ防ク所以ナリ

而シテ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ求ムルニハ一切ノ訴訟記録ヲ送致セサルヘカラス而シテ檢事ハ其送致ヲ受ケタルルキハ其意見ヲ付記シ三日内ニ之レヲ還付セサルヘカラス但シ事務繁忙ニシテ三日内ニ還付スル能ハサルル件ハ豫審判事ニ照會シテ更ニ延期ヲ請求スルハ妨ケナカルルニシテ而シテ檢事ハ豫審處分十分ナラスト思料シタルルキハ其條件ニ付更ニ取調ヲ請求スルコト得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルル件ハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之レヲ還付スヘシ

第六十九節

豫審終結ノ決定ヲ爲ス場合(第百六十三條)

豫審終結ノ決定ヲ爲ス場合ハ左ノ如シ

第一 免訴ノ言渡

免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ヲ細別スレハ左ノ如シ

(イ) 犯罪ノ証據十分ナラサルハ 犯罪ノ証憑十分ナラサルハ 審ニ其十分ナラサルノミナラス全ク犯罪ノ証憑ナキモ包含スル者ナリ

(ロ) 被告事件罪トナラサルトキ 此場合ハ第一ノ場合ト異ナリ 被告事件現存シ被告ハ亦タ本人ニ相違ナキモ其事件ノ罪トナラサルモノニシテ即チ刑法上一般ノ不論罪及ヒ特別不論罪ノ如ク其他其所爲ノ法律上罰スヘキ刑ナキ場合等ヲ云フ

(ハ) 公訴ノ時効ニ罹リタルハ 時効ハ公訴權消滅ノ一原由ナリ故ニ公訴ノ時効ニ罹リタルトキハ公訴消滅スルモノナルヲ以テ最早ヤ裁判ノ必要ナキニ至ルヘケレハナリ

(ニ) 大赦アリタルトキ 大赦モ公訴權消滅ノ一原由ナリ故ニ公訴ノ時効ニ係リタルハト同ク其事件ヲ繼續スルノ必要ナシ否ナ大赦ハ其事件ヲ消滅セシムルモノナル故ニ初メヨリノ被告事件ナキト同一ノモノナレハナリ

(ホ) 確定判決 前断ト全シ

(ヘ) 法律ニ於テ犯罪ヲ全免スルトキ此場合ハ不論罪ノ場合ヲ云フ者ニアラス即チ其事件ハ罪トシテ論スヘキ若ニシテ只法律ニ於テ其刑ヲ科セサル場合ヲ云フナリ (刑法第九十二條第二項第二百二十六條第三百七十七條參照)

(ト) 犯罪后法律ヲ以テ其刑ヲ廢シタルハ

(チ) 親告罪ニ付キ告訴ノ放棄アリタルハ 此ニケノ場合ハ明文ナキモ尙ホ免訴ノ言渡ヲナスヘキ場合ナキモノトス

第二 區裁判所ニ移ス言渡

區裁判所ニ移スヘキ言渡ヲ爲ス場合ヲ分析スレハ左ノ如シ

(イ) 被告事件ノ違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且勾留狀ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲スヘシ

(ロ) 被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルトキハ之ヲ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲スヘシ

此場合ニアツテハ法律上豫審ヲナスヘキモノニ非ラス其理由ハ前既ニ述ヘタレハ茲ニ贅セズ

第三 地方裁判所公判ニ付スヘキ言渡

公判ニ移ス言渡ヲ爲ス場合ヲ分析スレハ左ノ如シ

(イ) 地方裁判所ニ屬スヘキ輕罪事件ナルハ 此場合ハ其裁判所ノ輕罪公判ニ付スル言渡ヲ爲スヘキモノナリ而シテ其所爲罰金ニ該ルモノニシテ身体拘束ヲ受ケタルハ之レヲ釋放シ若シ禁錮以上ノ刑ニ該ルモノナレハ勾留狀ヲ發スルヲ又ハ區裁判所ニ移スヘキ決定ノ場合ト異ナルヲナシ

(ロ) 重罪事件ナルキ 此場合ニハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲スヘシ
若シ被告人當時保釋又ハ責付セラレタルモノナルキハ其言渡ヲ取消シ被告人未ダ
勾留狀ヲ受ケサルキハ勾留狀ヲ發スヘシ是レ其ノ罪ノ重大ナルカ故ニ既ニ許可
タル保釋責付モ之レヲ取消サ、ル得ス

第四 管轄違ノ言渡

管轄違ノ言渡ヲ爲ス場合 被告事件其管轄ニ非ルコトヲ認メタルキハ其旨ヲ言渡
ス可シ而シテ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルキハ前ニ發シタル令狀ヲ其儘存ス
ルカ又ハ新クニ令狀ヲ發シテ其事件ヲ管轄裁判所檢事ニ交付スルモノトス
以上如何ナル場合ヲ問ハヌ豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ノ手元ニ送
達スヘキモノトス是レ豫審ニテハ公判ノ如ク檢事被告人ノ面前ニ於テ言渡スヘキモ
ノニ非ラサレハ何時如何ナル決定アリタルキハ其正本ヲ受ケテ始メテ之レカ了知ス
ルモノナレハナリ且ツ此決定ニ對シ抗告等ノ準備ノ必要アレハナリ
終リニ一言スヘキハ(イ)豫審中被告人死去シタルトキ(ロ)數罪俱發ノ場合ニ前罪
既ニ確定シ后罪輕ク若クハ均シキモノナルキハ如何(ハ)入達ナルキハ如何ナル言渡
ヲナスヘキヤ曰ク此場合ニアツテハ各其決定ヲ異ニセサルヘカラス即チ(イ)ノ場合
ハ目的トシタル被告人ナキモノ故ニ訴訟ハ此ニ止息スヘキモノナルカ故ニ其儘ニテ
手續キテ止ムヘシ又(ロ)ノ場合ニアリテハ矢張り判決ヲ要スヘキモノナルヲ以テ

通常ノ如ク之レヲ管轄スヘキ裁判所又ハ公判ニ付スヘキ言渡ヲナスヘシ(ハ)ノ場合
即チ人違ノ場合ハ故ナリ之レヲ放免スルヲ得サルヲ以テ証憑不充分トシテ之レヲ放
免スルノ言渡ヲナスヘキナリ

第七十節 豫審終結ノ決定書ニ記入スヘキ要件

豫審終結ノ決定書ニ記載スヘキ要件ハ左ノ如シ
第一 被告人ノ氏名職業住所身分年齢

第二 事實 假令ハ犯罪ノ方法又ハ性質場所月日等ノ實地ノ情況即チ某ハ何月何日何
所ニ於テ何器物ヲ以テ某ヲ歐打シテ死ニ到ラシメタリ又タ免訴ノ場合ニハ其事實例
ヘハ其所爲ノ正當防衛ナリト云フ如キ之レナリ

第三 法律ノ理由 假令ハ歐打シタル所爲ハ何條ニ依ルヘント云フカ如キ又ハ免訴ノ
場合ニアツテハ本法百六十五條第何項ニ依リ免訴スヘキモノナリト云フカ如キモノ
ヲ云フ其他某ノ事件ハ豫審ヲ受クヘキモノニ非レハ之レヲ區裁判所ニ送致スト云フ
カ如キ即チ之レナリ

第四 檢事ノ意見ヲ聽キ決定シタルコト

第五 年月日場所及ヒ豫審裁判所書記ノ署名捺印
以上ハ豫審終結ノ決定言渡書ニ記入スヘキ要件ニ過キスト雖モ重罪ニ移スヘキ言渡ニ
ハ抗告ヲナスヲ得ヘキコト及ヒ其期間等ヲ記載スヘシ否ラサレハ正當ノ言渡アルマテ其

期間ヲ停止ス

第七十一節 豫審終結ニ對シテ抗告ヲナス場合

豫審終結ニ對シテ抗告ヲナス場合ハ左ノ如ク

第一 重罪公判ニ付スル決定

第二 免訴ノ決定

第三 管轄違ノ決定

之レナリ

而シテ抗告ト被告人ト抗告ヲ爲ス場合ニ廣狹アリ檢事ノ抗告ハ凡テノ場合ニ爲スコトヲ得ルモ被告人ノ抗告ヲ爲スハ重罪公判ニ付スル場合ニ限ルモノトス
以上ノ如ク被告人ノ抗告ハ重罪公判ニ移スヘキ場合ニ限リタルハ何ツヤ曰ク重罪ハ刑法中最モ重大ナルモノナルカ故ニ特ニ上訴ノ途ヲ開キタルモノナリ其他ノ場合ト雖モ抗告ノ必要ナキニ非ラサルモ豫審ハ元ト罪ノ有無ヲ決定スルモノニ非ルヲ以テ之レカ上訴ヲ許サ、ルモ敢テ非常ナル害ヲ生セズ然レモ一旦公判ニ付セラレタルモノハ証人トナルノ資格ヲ剝奪セラレ、ハ重罪ノ場合ト異ナルヲナシト雖モ一方ニハ檢事アリテ其不法ヲ防止スルモノナレハ敢テ被告人ノ利害ニ非常ナル關係ハナキモノナリ故ニ重罪ノ場合ノミニ限リテ他ハ亂訴ノ弊ヲ防クト費用日時ヲ節スルノ意ニ出テ抗告ヲ許サ、ルモノトス

反之檢事ハ公益ヲ保護スルノ任アレハ彼是ノ區別ナク凡テノ場合ニ抗告ヲ許シタル所以ナリ

第七十二節 豫審免訴言渡ノ効力

豫審ニ於テ被告人管轄違又ハ區裁判所ニ移シ若シクハ公判ニ付スル言渡ヲ受ケ其決定確定シタルキハ別ニ異論ナキモ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキハ被告人ハ同一ノ事件ニ付再ヒ訴ヲ受クルコトナキヤ如何ハ少ク説明ヲ要スヘキノミナラズ亦タ必要ナル問題ナレハ此章ヲ終ルニ臨テ一言ヲ贅セントス

夫レ一事再理セストハ訴訟法ノ原則ニシテ公判ノミナラス豫審ノ場合ニモ適用スヘキナリ然レモ此原則ヲ豫審ノ場合ニ嚴正ニ適用スルコトヲ得サルモノトセリ本法第百七十五條但書ニ新ナル証憑アルトキハ此限リニアラス云々トアリ之レ豫審ハ犯罪ノ有無ヲ決定スルモノニアラサレハナリ故ニ新ナル証憑アルトキハ同一ノ事件ニ付再ヒ起訴スルコトヲ得ルモノナリ

然リト雖モ檢事ハ新ナル証憑アリトシテ直チニ起訴スルヲ得ス先ツ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ハ其起訴ノ許スヘキヤ否ヤヲ決定ス而シテ后チ起訴ヲ許スヘキモノト決定シタルトキ初メテ檢事カ起訴スルコトヲ得ルモノナリ
茲ニ新ナル証憑トハ如何ナルモノシ指サヤ新ナル証憑トハ被告事件ヲ決定スルキニ未ダ採テ資料トナサ、ルモノニシテ被告事件ヲ斷スルニ足ルヘキ新規ナル証據ヲ云フ故

ニ決定ノ資料トシタルモノハ新ナル証憑ト云フヘカラス假令ハ謀殺犯アリトモ其証憑トシテ甲ナル刀ヲ呈出セシニ該刀ハ謀殺犯ノ証憑トナスニ足ラサルヲ以テ免訴ノ旨渡シタル時ニ更ニ乙刀ヲ以テ新ナル証憑トシテ起訴スルハ妨ケナキモノトセリ之レ乙刀ハ未ダ決定ノ材料ニ供シタルモノニアラサレハナリ然リト雖モ確定判決大救等 原山ヲ以テ免訴ノ旨渡アリタル場合ニハ新ナル証憑ヲ舉クルト雖モ之レヲ動カスコト得ス輕罪ノ時効ニ罹リタル原山トシテ免訴アリシトキハ更ニ重罪タルノ証憑ヲ得レハ之ヲ新ナル証憑トナシ起訴スルヲ得ヘシ何トナレハ輕罪トシテ決定サレモ重罪トシテハ未ダ決定ヲ經サレハナリ之レ豫審ハ証憑ノ有無ヲ決定スルニ過キサレハ其決定ヲ經サル証憑アレハ更ニ起訴スルヲ得ヘキハ當然ナリ故ニ確定判決ノ場合ニ於テモ甲號証憑ニ由テ免訴ノ旨渡ヲ受クルモ更ニ乙號証憑ヲ以テ新ナル証憑トナシ起訴スル事ヲ得ルハ又當然ナリトス

以上ニテ豫審處分ヲ全ク終レリ而シテ豫審以外ニ豫審判事ノ職務ヲ執ルヘキモノハ公判及ヒ抗告裁判所ノ受命判事等ニシテ即チ本法第二百九十六條第二百四十一條全百九十五條等ノ場合はレナリ此等ノ場合ハ豫審判事ト全一ノ權利ヲ以テ其處分ヲナスヘキモノトス

第四編 公判

第一章 通則

第一節 公判及ヒ公判公行ノ理由

事實審査ニ二種アリ一ハ豫審一ハ公判是ナリ而シテ豫審ノ何タルハ既ニ述ヘタル如ク其性質トシテ秘密ヲ要スヘキモノニシテ且非對審ナリ公判ハ反之事凡テ秘密ヲ主トセスシテ公明ナルヲ要ス隨テ原被告ノ對審ヲ以テ原則トス然ル所以ノモノハ他ナシ豫審コアリテハ犯人ト否トテ問ハス之レカ審査ヲナスヘキモノナレハ人ノ名譽等ニ干スルヲ莫大ナルモ公判ニアリテハ既ニ豫審ヲ經タルカ又ハ其犯証ノ明確ナルモノヲ審判決定スルモノナレハ多クハ免訴又ハ無罪タルコト少シ假リニ之レアリトスルモ別ニ上訴ナルモノアリテ之レカ失誤ヲ正訂スルヲ得ヘケレハ敢テ非常ノ害ヲ見サルモノトス且之ヲ密行スルハ大ニ世上ノ疑ヲ引キ其結果法律ノ威嚴ヲ損壞スルニ至ルモノナリ且ツ公判ニアリテハ罪ノ有無又ハ責任ノ有無ヲ定ムルモノニシテ民人ノ權利ニ關スルヲ最モ大ナリ是レヲ以テ公判ニアリテハ豫審ト異ナリ別ニ辯護等ノ設ケアリテ被告人ヲシテ充分ナル辯護ヲ試ミ又タ檢事民事原告人ニアリテモ各々其ノ意見ヲ陳述スルニ於テ充分ナル手續ノ規 等アリ又タ被告人ヲシテ最終ニ辯論セシムル等凡テ豫審ト其ノ規定ヲ異ニス故ニ豫審ハ密行スレモ公判ハ文字自休ノ如ク公ニシテ其ノ處分ニ私ナカ

ラシム(新聞掲載公衆傍聴)然レモ或ル場合則チ公安ヲ害スルカ又ハ風俗ヲ壞亂スルハ
恐レアルキハ言渡ヲ以テ公開ヲ禁スルモノトス

公判ヲ公行スル理由ハ重ニ左ノ三トス

第一 公判ヲ公行スルキハ公衆ハ其實際ヲ目撃シ因果應報ノ通理ヲ感悟シ良者其緒ニ
安シ惡者ハ其過チヲ改ムルノ利益ナリ

第二 公判ヲ公行スルキハ其處分公明ニシテ公訴ノ信憑自ヲ篤フシ公衆ヲシテ疑惑ス
ル所ナカラシムルニ足ルモノナリ

第三 公判ヲ公行スルキハ其所分ハ公衆ノ面前ニ於テスルカ故ニ又裁判官ヲシテ專横
ヲ防キ一層ノ鄭重ヲ加ヘシムルニ足ルモノナリ

第二節 公判開廷ノ要素

公判ヲ開廷スルニ欠クヘカラサル要素ハ左ノ如シ

第一判事 憲法第五十七條ニ曰ク凡ソ訴訟ノ審判ハ裁判所ニ於テ天皇ノ御名ヲ以テ行
フモノナリ而シテ裁判所ハ司法權則チ裁判權ヲ行フ所以ノ一法人ニ外ナラス故ニ法律
ニ於テ定メタル資格ヲ有スル判事ニ任シテ之レカ裁判ヲナサシム若シ其資格ナキハ
ハ其言渡ハ無効ナルモノトス而シテ其任期ハ終身ニシテ刑法ノ宣告又ハ懲戒所分法
ニ據ルニ非ラサレハ免職セラレ、トナキモノトス是レ司法官ノ獨立ヲ全フスル所以
ニシテ公判ニシテ若シ判事ヲ欠クニ於テハ其ノ判決ハ正當ノモノニ非スシテ未ダ裁

判ナキ以前ト同一ノ結果ヲ生ス

第三檢事

檢事ハ公訴ノ原告官ニシテ又公益保護ノ職掌ヲ帶フルモノナリ而シテ其出廷

スル檢事ノ員數ハ法律上別ニ定限ナキヲ以テ數人ニシテ出廷スルモ妨ケナキモノ、
如シ又タ檢事ノ官職ハ一体不分ノモノナレハ其間交互代理スルハ妨ケナカルヘキナ
リ否ナ互ニ代理スヘキモノナリ而シテ其結果トシテ檢事ハ其取調事件ノ中途ヨリ其
訴訟ニ干渉スルヲ得レトモ判事ハ何レノ場合ニテモ之レニ反對ナルモノナリ

而シテ刑事ノ訴訟モ亦タ原被兩造ヨリ組成シタルモノニシテ檢事ト被告人トハ素ヨ
リ全等ノモノニ非ラスト雖其互ニ對手人トナリ訟廷ニ於テ辨論スル點ニ至リテハ毫
モ他ノ訴訟人ト異ナル所ナシ蓋シ被告人ノ出廷ハ必要トセスシテ(其出廷セサルハ
ハ欠席ニテ審判ス)檢事ノ出廷ヲ以テ一要素トシタルハ檢事ハ一面ニ於テハ公訴ノ
原告官ニ相違ナキモ他ノ一面ニ於テハ公益保護ノ任ヲ帶フル行政官タルヲ以テナリ
故ニ法律ニ於テハ公判開廷ヲ爲スルハ必ス檢事ノ立會ヲ要ストナシタル所以ナリ若
シ立會ナクシテ開廷シタルキハ其裁判ヲ無効トスルニ於テ少モ差支ナキモノナリ

第三裁判所書記

公廷ニ於テ裁判所書記ノ職トスル所ハ裁判長若シクハ判事ノ命ニ從

ヒ又ハ職權上訴訟關係人ノ口述ヲ錄取シ又ハ之レヲ朗讀スル等ノ職務アリ而シテ其
命令ニシテ口供ノ錄取ニ關シ又ハ書類ノ調製若シクハ變更ニ關スル場合ニ於テ不當
ノモノナリト認ムルキハ自己ノ意見ヲ記シテ之レヲ添フルヲ得ヘシ則チ書記ハ一切

ノ書類ヲ可トルモノナリ之レ開廷ニ必要ナル所以ナリ(本法第百七十六條)

第三節 公廷ニ於ケル被告人身体自由ノ制限

裁判所ニ於テ公廷ヲ開キ被告事件ノ審判ヲ爲スニ當テハ最モ鄭重ナル手續ヲ要スヘキモノニシテ假令被告人トナリタルモ判決ノ確定ニ到ラサル以前ハ無罪純白ヲ以テ偶セサルヘカラス故ニ罰金等ノ場合ハ勿論如何ナル被告人ト雖モ法廷内ニ於テハ身体ノ自由ヲ拘束スヘキモノニ非ラス則チ身体ノ自由ヲ拘束スルハ從テ精神ノ自由ヲ束縛スルニ至ル己ニ身体ト精神ノ自由トヲ束縛スルハ被告人ノ陳述モ亦タ自由ノモノニ非ラスト云ハサルヲ得ス自由ナラサル陳述ハ被告人ニ利益ナルト不利益ナルトニ論ナリ其任意ヨリ出テサルモノナレハ探テ以テ憑據トナスヘキモノニ非ラス故ニ被告人ハ公判廷ニ於テハ一切身体ノ拘束ヲ受クヘキモノニ非ラサルナリ但シ巡査又ハ看守押丁ヲシテ逃亡ヲ豫防スル等ハ固ヨリ格別ナリトス即チ被告人中或ハ強難頑惡ナル者アリテ逃亡等ヲ圖ルモノナキニ非ラスト雖モ法廷ニハ守衛(巡査看守)ヲ置キ以テ是等ノ不慮ニ備フルアリテ敢テ差支ナキモノトス(明治十四年十月太政官第八十六號達ニ曰ク大審院各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スル爲メ其院所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡査ヲ爲相詰又ハ拘留被告人審問中ハ其購送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入り看護セムヘ云々)(本法第百七十七條參照)

第四節 公訴ノ受理

公訴ハ裁判所ノ等級ニ依リテ其受理スル手續ヲ異ニス則チ左ノ如シ

第一 區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理スルモノナリ

一 檢事ノ起訴アリタル時

二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ其裁判所ニ移スノ裁判アリタル時

第二 地方裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スヘキ輕罪重罪ノ公訴ヲ受理スルモノトス

一 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタル時

二 豫審ヲ經サル輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リタル時

以上上級裁判所ノ言渡トハ區裁判所ヨリ言ヘハ地方裁判所以上ノ各裁判所ヲ謂ヒ地方裁判所ヨリ言ヘハ控訴院大審院ヨリ其裁判所ニ移ス言渡アリタル時ヲ云フモノナリトス

第五節 辯護人ノ選任

被告人ハ自ラ辯護スルノ權アルノミナラス尙ホ自己ノ權利ヲ伸張スル爲メ特ニ辯護人ヲ選任スルコトヲ得又タ重罪ノ場合ハ被告人之レヲ選任セサルハ裁判所ハ其所屬ノ辯護士ヲ官選セサルヘカラス若シ辯護人ナクシテナシタル辨論ハ法律上其効力ナキモノトス而シテ其辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ選任スルヲ以テ本則トシ然レモ裁

判所ノ允許ヲ得タル時ハ辯護士ニ非ザル者ト雖モ辯護人ニ選任スルヲ得ルモノナ
 リ但テ辯護人中ヨリ選任スルト常人ヨリ選任スルト其手續ヲ異ニス辯護士中ヨリ選任
 スルキハ辯護人屆書ヲ裁判所ニ差出ス可シ又常人ヨリ選任スルキハ辯護人選定願書ヲ
 裁判所ニ差出スヘシ右ノ區別アルハ辯護人ハ法律ニ於テ設ケラレタルモノナレハ職務
 上別ニ許可ヲ受クルノ必要ナキモ常人ノ如キニ至リテハ法律ニ熟練セサルモノモアル
 ヘク或ハ肝煎者ニシテ訴訟ヲ教唆シ事實ヲ捏造スルヲアルヲ以テ其人ノ如何ニ依リ或
 ハ許可ヲ與ヘサル事モアルモノトス且ツ裁判所ノ許可ヲ得タル辯護人ハ裁判所ノ意見
 ニ依テ何時コトモ解除セラル、モノトス反之辯護士ニアリテ裁判所ハ勝手ニ解除等ヲ
 ナスヲ得サルモノトス

以上ノ如ク辯護士ヲ以テ被告事件ヲ辯護スルヲ得ルハ前既ニ述ヘタル如ク公判ハ豫審
 ト異リ犯罪ノ成立不成立又ハ責任ノ有無ヲ決スルモノニシテ人ノ權利ニ干スルコト重大
 ナレハナリ且ツ法律上ノ事ハ非常人ニアリテハ之レカ是非ヲ判斷スルノ能力ナキノミ
 ナラス爲メニ訴訟ヲ導引スルコトナルヲ以テナリ(本法第七十九條)

第六節 辯護權

辯護權ハ被告人ノ犯罪者トシテ審問セラル、ニ當リ辯解陳明ヲ以テ自己ノ條利ヲ防禦
 スルモノナリ抑モ有罪者ヲ責罰シテ其無辜ヲ救護スルハ國家ノ本旨ナリ否テ國家ノ權
 利ナリ義務ナリ被告人モ亦テ罪ヲ認リニ責罰ヲ負擔スルノ義務ナキモノ故ニ國家カ有罪ノ
 責ヲ負担スヘキノ證據ヲ舉グルニ當テハ之レニ對シテ其反對ノ舉證ヲナスヘキノ義務
 アリ權利アリ故ニ被告人ニ辯護ヲ爲サシムルハ被告人ノ爲メニ必要ナルノミナラス亦
 テ國家ノ爲メニ必要ナリ辯護權ノ必要夫レ此ノ如シ是レヲ以テ法律ハ特ニ重罪ノ被告
 人ニハ自ラ辯護權ヲ拋棄スルヲ許サス故ニ被告人ニ於テ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判
 長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ辯護士中ヨリ之レヲ選任シ其ノ辯論ニ參與セシム是レ
 國家ハ社會ノ代表ナレハ其ノ社會ノ中一人ノ犯人アルキハ利害亦タ自己ニ關係スルヲ
 以テ被告人ノ辯護權ヲ放棄スルヲ許サ、ルモノトス而シテ此辯護權ヲシテ充分ニ其實効
 ヲ奏セシメンニハ既ニ述ヘタル如ク獨リ被告人ニノミ委スヘキモノニ非ラス何者常人
 ハ法律ノ何モノタルヲ解セサルモノナレハナリ加之被告人ノ反對ノ位置ニ立ツヘキ檢
 事ハ常ニ法律ニ熟練シ況ンヤ其助力トモナルヘキ民事原告人其反對ノ位置ニアルオヤ
 是レ辯護人ノ設ケアル所以ナリ而シテ荷モ此選任者タル者ハ亦タ以テ充分ニ精力ヲ盡サ
 、ル可カラス是レ被告人ノ爲メニ辯護權ヲ行ヒ其利益ヲ保全スル代表者ナレハナリ
 又辯護人ト爲ルコトヲ得ヘキ者ハ既ニ述ヘタル如ク辯護士及ヒ裁判所ノ允許ヲ得タル者
 トス而シテ法文ニハ辯護士トアレモ辯護士法ノ制定ナキヲ以テ辯護士ナル者アルコトナ
 故ニ今日ニ在テハ辯護人ノ選任モ從前ノ如ク被告人ヲ以テ辯護士トナスヘキハ明治廿
 三年十月司法省訓令第四號達文ニ曰ク訴訟法中辯護士ノ職ルヘキ職務ハ追テ辯護士ヲ
 登ク當分ノ中代理人之ヲ取扱フ儀ト心得ヘシ云々トアリ

第七節 辯護人ノ權利及義務

辯護人ノ權利義務ニ關スル事項頗ル多シ今辯護權ノ性質ヨリ生スル重要ノモノヲ掲ク
レハ左ノ如シ

- 第一 辯護人ハ被告人ノ利益ノ代表者ナレハ被告人ニ於テ自ラ保護スルヲ得ヘキ一切ノ條利ハ之ヲ伸張スルヲ得ヘシ
- 第二 苟モ被告人ノ利益ヲ害シハ縱令被告人ノ意志ニ反スルモ之レヲ斷行スル權利及ヒ義務ヲ有ス但シ被告人ノ意志ヲ以テ自由ニ拋棄スルヲ得ヘキ權利ニ付テハ其意志ニ反シテ之ヲ行フヲ得ス假令ハ上訴權ノ如キ是レナリ
- 第三 被告人ハ談判通信等ニ依リ未ダ發覺セサル事實ヲ明知スルモ苟モ被告人ニ不利益ナリト認ムルモノハ裁判所ニ於テ之ヲ申述スルノ義務ナク又尋問ヲ受クルモ答辨セサルヲ得何トナレハ辯護人ハ被告人ノ利益ノ爲メ代表スルモノナレハ其不利益ナルヲ申述スルノ義務ナケレハナリ
- 第四 辯護人ハ被告人ヲ犯罪者ナリト愚料スル場合ニ於テモ其所爲ノ不正ナルヲ理由トシテ其辯護ヲ拒ムヲ得ス夫レ被告人自甘ナル以上ハ其所爲素ヨリ不正ナルヲ免レヌ從テ之ヲ辯護スルハ即チ不正ノ辯護ニ似タリ則チ社會ノ嫌疑スヘキ犯罪ヲ補釋スルニ似タリ然レモ法律ハ是非ヲ顛倒シ不正ヲ曲庇セシムルヲ欲スルモノニ非ラズ法律ノ辯護ヲ爲サシムルハ犯罪ハ素トヨリ不正ナルニ相違ナシト雖モ其不正ニモ輕

重大ノ別ナキ能ハサルヲ以テ其程度ヲ明了正確ナラシムルニ在リ況ンヤ裁判官ト雖モ有機動物ノ一種ニ過キサレハ時ニ失誤ナキヲ保シ難シ則チ無辜ニ科スルニ重刑ヲ以テスルヲナキニ非ラサレハナリ故ニ裁判所ハ辯護ニ依リテ此程度ヲ定メ相當ノ所分ヲ爲ス可キコトアレハナリ

第五 辯護人ハ裁判所ニ於テ其職務ヲ行フニ訴訟記録ヲ閱覽シ且ツ之ヲ抄寫スルヲ得

第六 辯護人ハ被告人ト而接通信スルヲ得被告人カ預罪公判ニ付スルノ言渡ヲ受ケタルキハ通常人民ハ其現在ノ裁判所長ノ允許ヲ受クルニ非ラサレハ被告人ニ面接スルヲ得スト雖モ辯護人ハ其允許ヲ得スシテ接見スルヲ得(治罪法二八ニ現法明又フシ)

第七 辯護人ハ公廷ニ於テ被告人ノ爲メニ最終ニ發言スルヲ得最終發言ノ權利ハ固ト被告人自己ノ辯護ノ爲メニ有スルモノナレハ其代表者タル辯護人ニ於テ之ヲ行フヲ得ヘキハ當然ナリトス

第八 辯護人ハ裁判所ヨリ辯護上必要ナル通知ヲ受ケ又ハ公廷ニ於テ判事檢事又ハ証人若シクハ民事原告人等ニ向テ必要ナル質議ヲ爲シ又ハ意見ヲ陳述スルヲ得

第八節 補佐人

補佐人トハ被告人ヲ保護スルカ爲メニ被告人ト共ニ裁判所ニ出頭シ被告人ノ權利ヲ伸張シ又ハ防衛シテ被告人ヲ補佐スル人ヲ謂フ元來刑事ニ在テハ辯護人ヲ用ユルヲ得ル

カ故ニ別ニ補佐人ヲ差出スノ要ナシト雖モ被告人ノ無能力者ナルハ法律上ノ代理人
 ナリテ補佐人トシテ辯論ニ與カルコトヲ許シタルハ蓋シ無能力者ノ不利益ハ法律上ノ代理
 人ノ不利益ニシテ恰モ其利害ノ及フ點ニ於テハ彼是同一ノ地位ニ在ル人ニシテ但自ラ
 其刑罰ヲ負ハサルノミナラス法律上代理人モ亦補佐人トシテ出頭スルノ權アルカ故ニ結
 ムルコトヲ得ルノミナラス法律上代理人モ亦補佐人トシテ出頭スルノ權アルカ故ニ結
 局二人ノ赤論ヲ爲ス人ヲ得ルニ至ル可シ而シテ法律上ノ代理人ハ補佐人トナリ辯論ニ傾
 ルニハ其中立書ヲ差出シ置ク可キモノニシテ被告人ノ爲メニハ辯護人ト全一ノ權利ヲ
 有シ則チ訴訟記録ノ閱録且ツ抄寫ヲ求ムル權又ハ獨立シテ上訴ヲ爲スカ如キ是ナリ
 (本法第百八十一條參照)

第九節 辯護權ノ拋棄及ヒ制限

被告人出頭スト雖モ辯論ヲ爲スコト肯セサルハ裁判所ハ對席トシテ則チ口頭辯論ヲ
 爲シタルモノトシテ裁判ヲ爲スモノナリ蓋シ被告人自ラ辯護權ヲ拋棄シタルモノニシ
 テ審問ノ事實ヲ知了ヒサルニアラサレハナリ但シ重罪事件ニ付テハ被告人ニ於テ辯護
 人ヲ選任ヒサルハ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任セルカ故ニ此場合ニ於テハ辯護
 人ハ獨立シテ被告人ノ利益ノ爲メ辯論スルハ其對席タルヘキニヨリ論ヲ待タサル
 ナリ又タ裁判所長ハ公庭内ニ於テハ其秩序ヲ維持スル義務アルカ故ニ若シ被告人ニ於
 テ審問ヲ妨害シ其他不當ノ行狀アルハ直ニ退廷ヲ命シ又ハ必要ナリトスルハ拘留

ヲ命スルコト得此場合ニ於テハ裁判長ハ被告人在廷セスト雖モ亦對席トシテ裁判シ
 自ラ其辯護ヲ爲スヲ許サス此ノ如ク被告人辯護ノ權ヲ制限スト雖モ前項ト全シテ辯護
 人選任シアル場合ニハ辯護人ハ猶ホ獨立シテ辯論スルコトヲ得ルモノトス而シテ其辯論
 ガ二日ニシテ時即チ翌日ニ至ル時ハ當日ノ公判ニハ必ス被告人出頭セシメサルヘカ
 ラス之レ退廷拘留ノ所分ヲ受クル者ト雖モ必スヤ常ニ妨害其他不當ノ所業ヲ爲ス可キ
 ニ非ラサルヲ以テナリ記シヤ其所分ノ爲メニ悔悟改悛スルコトナルニ於テチヤ(本法第
 百八十二條)

第十節 開廷ノ取締

法廷秩序ノ維持ハ裁判長ノ權内ニアリ(構成法百八條)故ニ審問ヲ妨クル者又ハ不穩ノ
 行狀ヲナスモノナル時ハ裁判長之ヲ法廷ヨリ退去セシムルヲ得若シ其所行ニ依リ不都
 合ナリト認メタルハ閉廷マテ拘留スルコトモアルヘク或ハ五圓已下ノ罰金若シハ五
 日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得ヘシ蓋シ此ノ言渡ニ對シテハ上告ヲ爲スコトヲ得ヘキモ控
 訴ヲ爲スコトヲ許サス若シ其行狀カ輕罪又ハ重罪ナルハ刑事被告人トシテ公訴ヲ起シ
 處分ヲ爲スコトヲ得(構成法百九條)右ハ通常人則チ傍聽人ノ場合ナレトモ被告人代理人
 代人補佐人又ハ民事原告人証人及ヒ鑑定人(キハ左ノ規則ヲ適用スヘキナリ)之レ本
 件ニ關スル本人ナレハ常人ヨリ嚴重ニスヘシ以テナリ

一 裁判所ハ閉廷ヲ待タズシテ違犯者ヲ即時ニ罰金若シクハ拘留ニ處スルコトヲ得

二 違犯者原告ナルキハ處罰ノ上仍ホ本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其取調ヲ中止スルヲ得
又辯護士ト雖モ不當ノ言語ヲ用ユルキハ引續陳述スル權ヲ差留ムヘシ

第十一節 辨論停止

公判廷ニ於テ辨論ヲ停止スル場合左ノ如シ

第一 辨論前ニ被告人ノ發病シタルキ 此場合ニ於テハ其痊癒ニ至ル迄辨論ヲ停止スルモノトス之レ疾病ノ爲メ出廷スルヲ得サルモノニ強テ出廷セシムヘキモノニ非ラズ又出廷スト雖モ實際辨論スル能ハサル者ハ出廷セシムルモ其益ナキヲ以テナリ然レモ罰金以下ノ刑ニ係ルヘキ被告人ニハ法律ニ於テ代人ヲ出頭セシムルヲ許シタレハ(本法二百十四條)此場合ニ於テハ被告人カ代人ヲ差出シタルキハ辨論ヲ停止ス可キニ非ラズ但シ被告人精神錯亂シタルキハ代人ヲ差出スヲ能ハサルヘク又代人トシテ出廷スルモノアルモ其代人ヲ委任スヘキ能力ヲ失スルヲ以テ此場合ニ於テモ仍ホ辨論ヲ中止セサルヲ得ス

第二 辨論中ニ被告人ノ發病シタルキ 此場合ヲ分拆スレハ二個ノ區別アリ

(イ) 精神錯亂シタル場合 此場合ニ於テハ辨論ヲ停止スヘキノミナラス以前ノ辨論モ亦ク無効トス故ニ被告人痊癒ノ後チ新ニ辨論ヲ爲サ、ルヘカラス蓋シ訴訟能力ヲ欠キタルモノナレハナリ

(ロ) 其他ノ疾病ニ罹リタル場合 此場合ニ於テモ停止スヘキハ勿論ナレモ精神錯亂ノ場合ト異ナリテ前ニナシタル辨論ハ無効トナルコトアラス被告人痊癒ノ後ハ以後ノ手續ヲ繼續スルカ故ニ辨論モ亦ク之ヲ繼續スヘキモノナリ是レ精神錯亂ノ場合ニ於テハ其以前ニナシタル辨論ノ顛末ヲ忘却スヘシト雖モ其他ノ疾病ニ罹リタル場合ニ在テハ之ヲ忘却スル事ナレハナリ

然レモ其辨論ノ停止五日以上ニ涉ルキ又ハ五日以上ニ涉ラサルモ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルキハ新ニ辨論ヲ爲サ、ルヘカラス蓋シ判決ノ事實ニ適セサルノ恐アレハナリ

第三 辨論終結後ニ被告人ノ發病シタルキ 此場合ニ於テハ被告事件法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ盡シタルヲ以テ被告人ニ於テ疾病ニ罹ルコトアルモ其以後ニ於テ辨論ヲ盡スヘキモノナケレハ痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナクシテ直ニ裁判スルヲ得ヘケレハナリ但シ其裁判ハ痊癒后ニ非ラサレハ之ヲ爲スヲ得ス

第四 本按ノ事件ニ附帶ノ犯罪アリテ其事件豫審ヲ必要ナリトシテ公判ヨリ豫審判事ニ豫審ヲ求メタルキ又ハ豫審判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムル間ハ辨論ヲ停止スルコトアリ

第五 檢事及ヒ被告人ヨリ管轄違又ハ公訴受理スヘカラサル申立ヲ爲シタルニ裁判所ハ其申立ヲ退ケタル時ハ本案判決ヲ待タズ直ニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得ヘキモノ

ナリ此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止セラル則チ上訴ノ効果トシテ其執行ヲ停止スルモノナリ

第六 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ刑事事ヨリ豫審判事ニ送致シタルハ本案ノ辨論ヲ停止セラル但シ此場合ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ請求アルカ又ハ職權ヲ以テ爲スモノトス(本法第百八十三條參照)

第十一節 不告不理ノ原則

告ケサレハ理セストハ訴訟法不動ノ原則ニシテ告ケレハ必ス理セサルヲ得サルハ亦タ裁判官ノ義務ナリ是レヲ以テ裁判所ハ告ケル所ニヨリテ其當否ヲ裁判スルモ告ケル所ナキニ裁判スルハ以テ不法ノ裁判タルヲ免レス然レモ往時司法權ノ甚ク幼稚ナルハニアリテハ訴ノ有無ヲ問フコトナク其實ヲ發見スレハ則チ直ニ之ヲ裁判セリト云フ故ニ裁判所ハ自ラ發見シテ自ラ裁判スルヲ以テ其裁判ニ於テハ毫末モ信用ヲ措ク能ハス唯ク裁判所ノ意見ノ向フ所ニ從フノミ管ニ裁判所ノ權力ニ制限ナキノミナラス其弊ヤ先入主トナリテ事實ヲ失フコト無キ能ハス然レモ今日トナリテハ原告官タル檢事アリ奇モ其告ケサルニ理スルハ其裁判ニ不法ニシテ上告ノ原由ヲ免カル、ヲ得ス於是カ不告不理ノ原則確々トシテ動ス可カラス而シテ原告ト裁判官トナシテ其職權ノアル所ヲ明ニシテ弊害ヲカラシメコリキ(本法第百八十四條)然レモ左ノ場合ハ不告不理ノ例外ナリトス但シ(ハ)ノ場合ハ性質別罰ニ非ラサレハ隨テ例外ニ非ラサルモノ如シ

(イ) 辨論ニヨリ發見シタル附帶ノ犯罪ハ檢事ノ告ケル所則チ起訴ナシト雖モ直ニ審判スルコト得之レ附帶ノ犯罪ハ本案ノ事件ト互ニ密着ノ關係ヲ有シ若シ其事件相牽連スルナキモ併合審理スルハ能ク其事實ノ信ヲ得テ裁判ノ正鵠ヲ失セサルヲ得ヘキ利益アレハナリ且ツ之ヲ併合審理スルハ裁判抵觸ナキノ利益アリ然レモ此附帶犯ト雖モ其性質等ノ其裁判所ニ屬セサル犯罪ハ例外ナリトス假令ハ大審院ノ特別權限ニ屬スルモノ、如シ

(ロ) 豫審判事現行犯ノ場合ニ於テ檢證調書ヲ作りタルトキ

(ハ) 豫審判事鑑定証人ニ罰金ヲ言渡スル(本法第百八十四條參照)

第十二節 附帶犯

附帶犯トハ本法第百八十五條ノ規定スル所ニシテ即チ多罪併發シテ其間互ニ相牽連シタル犯罪ヲ云フ則チ左ノ如シ

第一 全一ノ場所ニ於テ全時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタルハ 此罪ハ相集リテ偶然又ハ故意ヲ以テ相互ニ原因結果ヲナシ牽連セルモノニシテ假令ハ某途上ニ於テ二人喧嘩ヲナスコ當リ他ノ一人其機ニ乘シ一方ノ懷中物ヲ掏取シタルカ如キ即チ喧嘩ハ掏取ノ偶然ノ原因ヲ爲シタルモノトシテハ共ニ全一ノ裁判所ニ呼出シテ取調フルハ其ノ事實ヲ得ルニ於テ實ニ難シナルノ便アリ是レヲ以テ法律ハ不告不理ノ例外トシテ之レカ取調ヲ同一裁判所ニセリ反之途上ノ南北(場所ヲ異ニシ)ニ於テ一人ハ喧